

勸群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第159集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集

多比良平野遺跡 白石根岸遺跡

1 9 9 4

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

助群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第159集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集

多比良平野遺跡 白石根岸遺跡

1 9 9 4

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

序

関越自動車道の藤岡ジャンクションより分岐して新潟県の上越市にぬける高速自動車道の上信越自動車道は平成5年3月に長野県佐久市までが開通しました。この上信越自動車道の建設に伴い、数多くの埋蔵文化財が発掘調査され、記録保存されました。

多野郡吉井町多比良に所在する多比良平野遺跡と藤岡市白石に所在する白石根岸遺跡は、数多く調査された遺跡の中では小規模な遺跡でしたが、縄文時代前期、奈良・平安時代の住居跡、土壇等が調査されました。両遺跡については、本年度に報告書刊行のための整理作業を始めましたが、小規模な遺跡のため作業が順調に進み、この度、調査報告書刊行の運びとなりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで日本道路公団東京第2建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会、吉井町教育委員会、地元関係者等には種々お世話になりました。報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明するための資料として十分活用されることを願い序とします。

平成6年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は上信越自動車道建設に伴い事前調査された「多比良平野遺跡」(事業名称 平野遺跡)及び「白石根岸遺跡」(事業名称 根岸遺跡)両遺跡の発掘調査報告書である。本書における報告は、多比良平野遺跡・白石根岸遺跡から検出された遺構・遺物を対象とする。
2. 多比良平野遺跡は、群馬県多野郡吉井町多比良字平野に所在し、また白石根岸遺跡は、群馬県藤岡市白石字根岸に所在する。
3. 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
4. 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上信越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査を目的に設置された、上越線調査事務所(多野郡吉井町南陽台に所在)が担当した。
5. 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査
『平野遺跡』 試掘調査 昭和62年3月 群馬県教育委員会本調査 平成元年5月1日～6月30日
調査担当者 須田 茂(専門員)、山口逸弘(主任調査研究員)、小林 徹(調査研究員)
『根岸遺跡』 第1次調査 平成元年3月1日～3月31日 第2次調査 平成元年4月1日～6月30日
調査担当者 石島和夫(専門員)、須田 茂、山口逸弘、船藤 亨(調査研究員)、小林 徹
 - (2) 整理 整理期間 平成5年4月1日～9月30日 整理担当者 斎藤利昭(主任調査研究員)
 - (3) 事務
常務理事 邊見長雄(平成元～4年度)、中村英一 事務局長 松本浩一(昭和63年～平成3年度)、
近藤 功 管理部長 佐藤 勉 調査研究部長 神保信史 庶務課長 斎藤俊一 専門員 国
定 均、笠原秀樹 主任 須田朋子、吉田有光、柳岡良弘 主事 船津 茂、高橋定義 嘱託員
松下 登 臨時職員 今井もと子、内山佳子、塩浦ひろみ、角田みづほ、角田正子、松井美智代、吉
田恵子
関越道上越線調査事務所 所長 高橋一夫(平成元・2年度)、阿部千明(平成3年度)、吉田 肇 総
括次長 片桐光一(昭和61年～平成元年度)、大沢友治(平成2・3年度) 次長 徳江 紀(昭和63
年～平成2年度) 課長 鬼形芳夫(昭和62年～平成2年度)、依田治雄 庶務課係長代理 宮川初
太郎(平成元・2年度) 主任 国定 均(昭和63年・平成元年度)、笠原秀樹(平成2・3年度)、
吉田有光 臨時職員 山崎都夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、田中智恵美、本城美樹、後関玲
子、高田千恵、吉田登志子
6. 報告書作成関係者 編集 斎藤利昭 本文執筆 依田治雄(第1章)、山口逸弘、斎藤利昭(第2～4章)
遺物観察 山口逸弘、神谷佳明(主任調査研究員)、大西雅広(主任調査研究員)、斎藤利昭
遺構写真 発掘調査担当者 遺物写真 技師 佐藤元彦 保存処理 技師 関 邦一 嘱託員 土
橋まり子 補助員 小材浩一、樋口一之 整理補助 安藤三枝子、木暮紀子、白井和子、田所順子、
林美奈子、宮沢房子、山田キミ子、渡部あい子 委託関係【遺構調査、遺構・遺物トレース】輪測研
7. 出土遺物・図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターが保管している。
8. 報告書作成に当たり、下記の諸機関にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。
藤岡市教育委員会、吉井町教育委員会

凡 例

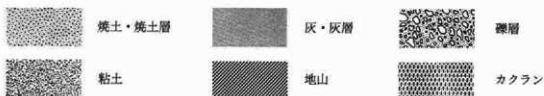
1. 根岸遺跡の遺構名称は、調査地点が離れているが調査時点での名称を付した。
2. 遺構図の方位記号は国家座標の北を表す。座標系は国家座標第IX系である。
3. 遺構断面実測図、等高線等に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
4. 遺構図の縮尺及びスクリーン・トーンは次の通りである。

(1) 遺構図縮尺

竪穴住居跡…1/60 竈…1/30 土坑…1/40

溝・その他の遺構についてはその都度スケールを参照されたい。

(2) 遺構図 スクリーン・トーン



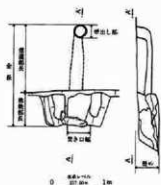
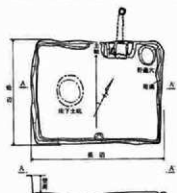
5. 遺物図の縮尺及びスクリーン・トーンは次の通りである。

- (1) 遺物図縮尺については1/3を基本とした。しかし、金属器1/2、古銭・石鏝については1/1とした。
- (2) 遺物図 スクリーン・トーン



6. 竪穴住居跡の床面積算出については、1/20平面図でプランメーター（ローラー極式・レンズ式）による計測を2回行い平均値を使用し、小数点以下2桁は四捨五入してある。
7. 土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帳 1988版』を使用した。
8. 本書中にある火山灰は以下のとおり略記した。

浅間山噴出火山灰 1108年（天仁元年）噴火火山灰……As-B
1783年（天明3年）噴火火山灰……As-A
9. 主軸方位については、竈を有する竪穴住居跡は竈軸方位を主軸と見なし計測を行った。竈を有しない竪穴住居跡は長辺を主軸方位として計測を行った。土坑については、長辺を主軸方位とし計測を行った。
10. 遺跡の各部の名称及び各計測値は以下に示した図を参照されたい。



目 次

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

写真図版目次

抄 録

第1章 発掘調査に至る経過

- 第1節 発掘調査に至る経緯……………1
- 第2節 発掘調査経過と調査方法……………2
 - 1. 調査経過……………2
 - (1) 試掘調査……………2
 - (2) 本調査……………4
 - 2. 調査方法……………4
 - (1) 調査区の設定……………4

第2章 地理的・歴史的環境

- 第1節 地理的環境……………5
- 第2節 歴史的環境……………5
- 第3節 基本土層……………7

第3章 多比良平野遺跡

- 第1節 遺跡の概要……………11
- 第2節 検出された遺構・遺物……………11
 - 1. 竪穴住居跡……………11
 - 2. 土 坑……………19
 - 3. 溝……………22
 - 4. 遺構外出土遺物……………23

第4章 白石根岸遺跡

- 第1節 遺跡の概要……………27
- 第2節 検出された遺構・遺物……………28
 - 1. 竪穴住居跡……………28
 - 2. 土 坑……………62
 - 3. 溝……………72
 - 4. 水田跡……………74
 - 5. 集石遺構……………75
 - 6. 遺構外出土遺物……………76

第5章 ま と め

- 第1節 白石根岸遺跡1号住居跡
出土土器の位置付け……………90
- 第2節 白石根岸遺跡の遺構遺物について……………94

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	第60図	11号住居跡出土遺物(2)
第2図	多比良平野遺跡トレンチ配置図	第61図	11号住居跡出土遺物(3)
第3図	白石柳岸遺跡トレンチ配置図及び調査区図	第62図	12号住居跡
第4図	多比良平野遺跡グリッド配置図	第63図	12号住居跡電
第5図	周辺遺跡位置図	第64図	12号住居跡出土遺物(1)
第6図	多比良平野遺跡基本土層図	第65図	12号住居跡出土遺物(2)
第7図	白石柳岸遺跡基本土層図	第66図	13号住居跡
第8図	多比良平野遺跡全体図	第67図	13号住居跡電
第9図	1号住居跡	第68図	13号住居跡掘り方
第10図	1号住居跡電	第69図	13号住居跡出土遺物(1)
第11図	1号住居跡遺物出土状態	第70図	13号住居跡出土遺物(2)
第12図	1号住居跡出土遺物(1)	第71図	14号住居跡
第13図	1号住居跡出土遺物(2)	第72図	14号住居跡出土遺物(1)
第14図	1号住居跡出土遺物(3)	第73図	14号住居跡出土遺物(2)
第15図	1号住居跡出土遺物(4)	第74図	1号土坑跡平面図及び出土遺物
第16図	1号住居跡出土遺物(5)	第75図	6・8・18号土坑跡平面図及び出土遺物
第17図	1～4号土坑跡	第76図	2号土坑跡
第18図	1～6号溝跡	第77図	2号土坑跡出土遺物
第19図	1・4・6号溝跡土層	第78図	3～5・7号土坑跡
第20図	2・5号溝跡土層	第79図	9・11・12・32・33号土坑跡
第21図	遺構外出土遺物	第80図	14・16・17・19・20・21号土坑跡
第22図	白石柳岸遺跡A区全体図	第81図	22～29号土坑跡
第23図	白石柳岸遺跡D区全体図	第82図	1～5号溝跡
第24図	1号住居跡	第83図	1・4号溝跡
第25図	1号住居跡出土遺物(1)	第84図	東低地 As-B 下水田遺構
第26図	1号住居跡出土遺物(2)	第85図	1～3号集石遺構
第27図	2号住居跡	第86図	遺構外出土遺物(1)
第28図	2号住居跡電	第87図	遺構外出土遺物(2)
第29図	2号住居跡遺物出土状態	第88図	遺構外出土遺物(5)
第30図	2号住居跡出土遺物	第89図	遺構外出土遺物(4)
第31図	3号住居跡出土遺物	第90図	D区西台地遺構外遺物出土分布図(1)
第32図	3号住居跡	第91図	A区東低地遺構外遺物出土分布図(2)
第33図	4号住居跡出土遺物	第92図	D区西台地遺構外遺物出土分布図(3)
第34図	4号住居跡	第93図	遺構外出土遺物(5)
第35図	5号住居跡	第94図	遺構外出土遺物(6)
第36図	5号住居跡出土遺物	第95図	遺構外出土遺物(7)
第37図	6号住居跡	第96図	遺構外出土遺物(8)
第38図	6号住居跡電	1 図	周辺遺跡の放射土層群
第39図	6号住居跡掘り方	2 図	照内照曲底部遺構
第40図	6号住居跡出土遺物(1)		
第41図	6号住居跡出土遺物(2)		
第42図	7号住居跡		
第43図	7号住居跡電		
第44図	7号住居跡掘り方		
第45図	7号住居跡出土遺物		
第46図	8号住居跡		
第47図	8号住居跡電		
第48図	8号住居跡出土遺物		
第49図	9号住居跡		
第50図	9号住居跡電		
第51図	9号住居跡出土遺物(1)		
第52図	9号住居跡出土遺物(2)		
第53図	10号住居跡		
第54図	10号住居跡掘り方		
第55図	10号住居跡出土遺物		
第56図	11号住居跡		
第57図	11号住居跡電		
第58図	11号住居跡掘り方		
第59図	11号住居跡出土遺物(1)		

写真図版目次

- P L 1 多比良平野遺跡調査区全景
 P L 2 1号住居跡
 1. 1号住居跡全景
 2. 1号住居跡土層
 3. 1号住居跡竈
 4. 1号住居跡出土遺物
 5. 1号住居跡出土遺物
 P L 3 1～3号溝
 1. 1・3号溝全景
 2. 1号溝土層
 3. 1・3号溝土層
 4. 2号溝・4号土坑全景
 5. 2号溝土層
 P L 4 1号住居跡出土遺物(1)
 P L 5 1号住居跡出土遺物(2)
 P L 6 1号住居跡出土遺物、遺構外出土遺物
 P L 7 白石根岸遺跡A区全景
 P L 8 白石根岸遺跡A・D区全景
 1. 根岸遺跡A区(東低地)全景
 2. 根岸遺跡D区(西台地)全景
 P L 9 1号住居跡、2号住居跡
 1. 1号住居跡全景
 2. 1号住居跡土層
 3. 1号住居跡掘り方
 4. 2号住居跡全景
 5. 2号住居跡出土遺物
 P L 10 3号住居跡、4号住居跡
 1. 3号住居跡全景
 2. 4号住居跡全景
 P L 11 5号住居跡、6号住居跡
 1. 5号住居跡全景
 2. 6号住居跡全景
 P L 12 7号住居跡、8号住居跡
 1. 7号住居跡全景
 2. 8号住居跡全景
 P L 13 9号住居跡、10号住居跡
 1. 9号住居跡全景
 2. 10号住居跡全景
 P L 14 11号住居跡、8・12・13号住居跡
 1. 11号住居跡全景
 2. 8・12・13号住居跡掘り方全景
 P L 15 12号住居跡、13号住居跡、14号住居跡
 1. 12号住居跡竈
 2. 12号住居跡竈内出土遺物
 3. 13号住居跡竈
 4. 13号住居跡竈内出土遺物
 5. 14号住居跡全景
 P L 16 1～6号・10号土坑
 1. 1号土坑全景
 2. 2号土坑全景
 3. 2号土坑出土遺物
 4. 2号土坑出土遺物
 5. 3号土坑全景
 6. 4号土坑全景
 7. 5・6号土坑全景
 8. 10号土坑全景
 P L 17 11・12・14・17・18・20・21号土坑
 1. 11号土坑全景
 2. 12号土坑全景
 3. 14・21号土坑全景
 4. 17号土坑全景
 5. 18号土坑全景
 6. 20号土坑全景
 7. 21号土坑全景
 P L 18 22～24号土坑、1・2号集石遺構
 1. 22・23号土坑全景
 2. 24号土坑全景
 3. 1号集石遺構
 4. 2号集石遺構
 P L 19 1～3号溝、4号溝・3号集石遺構
 1. 4号溝内3号集石遺構全景
 2. 1・2・3号溝全景
 P L 20 浅間B經石下水田、浅間B經石下水田内溝
 1. 浅間B經石下水田
 2. 浅間B經石下水田内溝
 P L 21 1号住居跡出土遺物
 P L 22 1・2号住居跡出土遺物
 P L 23 3～8号住居跡出土遺物
 P L 24 8～11号住居跡出土遺物
 P L 25 11・12号住居跡出土遺物
 P L 26 12号住居跡出土遺物
 P L 27 13・14号住居跡出土遺物
 P L 28 14号住居跡、1・6・8・18号土坑出土遺物
 P L 29 2号土坑出土遺物
 P L 30 遺構外出土遺物(1)
 P L 31 遺構外出土遺物(2)
 P L 32 遺構外出土遺物(3)
 P L 33 遺構外出土遺物(4)
 P L 34 遺構外出土遺物(5)
 P L 35 遺構外出土遺物(6)

抄 録

1. 遺跡の概略

平野遺跡は、群馬県多野郡吉井町多比良字平野に所在する。発掘調査は、昭和63年に群馬県教育委員会により試掘調査が行われ、平成元年4月から6月にかけて本調査を実施した。遺跡は鍋川右岸段丘上を南北に開析する土台川の谷あい小段丘上に立地する。遺跡東側の比高差約50mを測る丘陵上には平安時代の寺院址を検出した黒熊中西遺跡が所在する。本遺跡では、竪穴住居跡1軒と土坑4基及び溝6条を検出した。

根岸遺跡は、群馬県藤岡市白石字根岸に所在する。発掘調査は、平成元年3月に試掘調査が行われ、小谷に挟まれた掌指状に開く3カ所の台地2カ所で遺構の存在が認められた。本調査は、平成元年4月から6月にかけて実施され、東台地では竪穴住居跡9軒、土坑7基を検出した。また同台地東側低地部ではAs-Bに埋没した水田跡を検出した。西台地部分では、竪穴住居跡5軒、土坑24基、溝5条を検出した。

2. 遺構数量

平野遺跡

種 別	時 代	数 量	備 考
竪穴住居跡	平 安 時 代	1	
土 坑	時 期 不 明	4	
溝	時 期 不 明	6	

根岸遺跡

種 別	時 代	数 量	備 考
竪穴住居跡	縄 文 時 代	3	縄文時代前期諸磯c式
	奈良・平安時代	10	
	時 期 不 明	1	
土 坑	縄 文 時 代	5	縄文時代
	平 安 時 代	1	墨書土器出土
	時 期 不 明	25	
溝	時 期 不 明	3	
集石遺構	中・近世	3	
水田跡	平 安 時 代	1箇所	As-Bに覆われる。溝状遺構1条

3. まとめ

多比良平野遺跡 本遺跡は、谷あい小段丘上に立地する。検出された遺構は竪穴住居跡1軒と土坑・溝であり、段丘部に展開する小規模遺跡と考えられる。竪穴住居跡は、灰釉陶器の塊(大原2号窯期)や羽釜、須恵器塊等を多数出土し、出土状態から土器廃棄場所の様相が伺える。

白石根岸遺跡 本遺跡は、北に開く掌指状の台地を横断する形で調査が行われ、両端部の台地で遺構が検出された。西端部の台地では、西斜面部に縄文時代前期(諸磯c式期)の竪穴住居跡3軒と5基の土坑が検出され、また墨書土器を伴う平安時代の土坑1基が検出された。

東端部の台地では、奈良・平安時代の竪穴住居跡8軒に台地東側の低地部でAs-Bに覆われた湧水利用の水田跡が検出され、小谷を臨む集落を知るうえで貴重な遺跡と考えられる。

第1章 発掘調査に至る経過

第1節 発掘調査に至る経緯

関越自動車道上越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km(内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用)である。今回(平成5年3月27日)開通した藤岡インター～佐久インター間は約69kmで群馬県藤岡市(5.6km)、吉井町(6.3km)、甘楽町(4.3km)、富岡市(11.6km)、妙義町(2.5km)、松井田町(19.5km)、下仁田町(5.3km)、長野県佐久市(11.9km)の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町(東部)・松井田町(東部)、同57年松井田町(西部)・下仁田町(西部)・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取

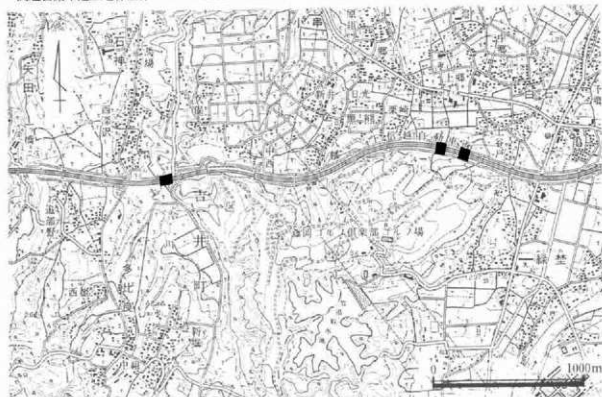
り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県(企画部交通対策課)より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財について、より具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とす



第1図 遺跡位置図

第1章 発掘調査に至る経過

る地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。(後の試掘により52遺跡に変更)そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和65年度末(平成2年度末)とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 事業団の出張所(上越線調査事務所)を開設し、整理作業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりとする。
埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。
調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足。調査を開始する。以後、6班22人体制(昭62)、9班36人体制(昭63)、12班45人体制(平元)、12班45人体制(平2)。平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成3年度からは本部においても整理作業が始まり、現在2か所11班体制で実施している。調査事務所は今年度で事業を終了し、以後本部のみで実施され、平成8年度全事業終了予定である。

第2節 発掘調査経過と調査方法

1. 調査経過

(1) 試掘調査

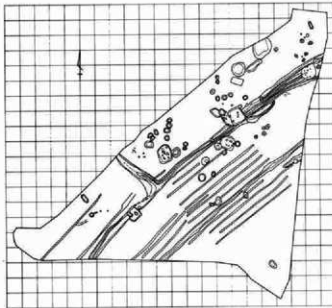
多比良平野遺跡 本遺跡の調査対象地は、多野郡吉井町多比良平野地内、土合川の形成した谷地形の小段丘面上にあり、面積は2,600㎡であった。試掘調査は昭和62年度末に群馬県教育委員会文化財保護課(以下、保護課)により実施された。

白石橋岸遺跡 本遺跡の調査対象地は、藤岡市白石

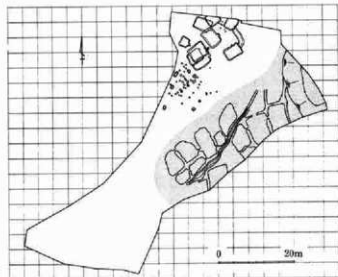
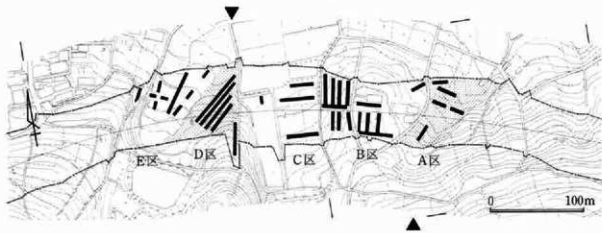
字根岸地内の3本の小支谷と2本の舌状台地上の17,240㎡であった。試掘調査は、昭和63年度末に保護課により実施され、更に平成元年度末に再度試掘調査を行った。平成元年度の試掘調査は、100mの大グリッドを設定し、東から「A・B・C・D・E」の大グリッド名称を付しA・B・C・D・E区と仮称し、トレンチによる試掘調査を実施した。試掘調査の結果は、A区及びD区において遺構の存在が確認されたのみであり、B・C・E区については遺構は検出されず調査対象地から外された。



第2図 多比良平野遺跡トレンチ配置図



白石根岸遺跡D区



白石根岸遺跡A区

第3図 白石根岸遺跡トレンチ配置図及び調査区図

第1章 発掘調査に至る経過

(2) 本調査

多比良平野遺跡 平成元年5月1日から本調査を開始した。調査は、プレハブ用地や虎土置き場等の確保から遺構の無い部分の範囲を確定し、その後遺構の調査を開始した。遺構密度は薄いとされた通り平安時代の竪穴住居跡1軒と溝5条、土坑4基が検出された。

5月1日 表土剥ぎ開始。

5月16日 遺構確認。

5月25日 遺構掘り下げ(1・2号溝)

6月27日 調査終了。

白石根岸遺跡 平成元年4月1日より試掘調査の結果からA区(東低地)・D区(西台地)を調査対象地として本調査を開始した。

2. 調査の方法

(1) 調査区の設定

多比良平野、白石根岸遺跡の発掘調査に際しては、国家座標第IX系座標軸を用い調査用グリッドを設定した。調査用グリッドは4mを小単位とした。

グリッド呼称については、多比良平野遺跡では東から西へは「A・B・C・D……」の順にアルファベットで、北から南へは「0・1・2・3……」の順に数字を用いて標記し、北東隅の交点をグリッド名称とした。

A区(東低地)

4月19日 表土剥ぎ開始。As-B確認。

5月9日 As-B除去。水田面及び溝検出。

5月16日 住居調査開始。重複多い。

5月31日 As-B下水田面写真撮影。

6月14日 全景写真、水田下掘り下げ。

7月12日 住居調査終了。

D区(西台地)

4月10日 表土剥ぎ開始。

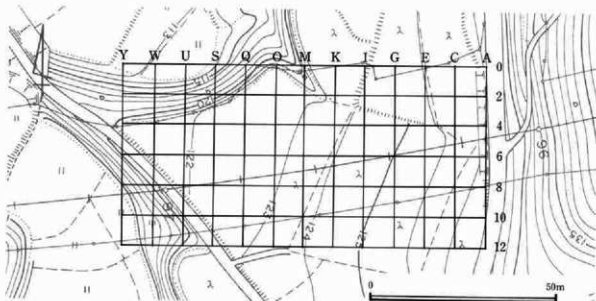
4月11日 遺構確認開始。縄文時代の遺構遺物多い。

4月12日 遺構掘り下げ。(住居、溝、集積等)

4月21日 全景写真。旧石器試掘調査(4×4m)

5月10日 調査終了。

白石根岸遺跡では、グリッド設定は多比良平野遺跡同様に4m単位の小グリッドの設定を行ったが、調査範囲が広いため更に100mの大グリッドを設定し、東から「A・B・C・D・E」の大グリッド名称を付した。よってグリッド呼称は北東隅の交点を「Aa-O」のアルファベットの大きく、小文字が併記され、各区のX軸はOa-Oyまでの25分割され次の区に渡るが、南北方向の数字についてはそのかぎりではない。



第4図 多比良平野遺跡グリッド配置図

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

多比良平野遺跡は、吉井町南東の多比良字平野に所在し、多野山地に源を発する土合川の形成した間析谷の小段丘面上に立地する。土合川は、吉井町を眼下に見下ろす牛伏山東端部を回り込み、蛇行しながら鍋川上位段丘面を侵食し、流域に小段丘を形成しながら北流する。遺跡地周辺部では河床面と東側黒熊中西遺跡の所在する丘陵との比高差は約50m前後を測る。対岸の丘陵上には多比良追道野遺跡が所在し、他の上位段丘面より一段低く、200m程の平坦面が見られる。

白石根岸遺跡は、藤岡市南西部の吉井町黒熊と接する白石字根岸に所在する。遺跡地は、鍋川右岸上位段丘面東端部に位置し、東側2km程には鮎川が北流し、扇状地形を形成している。本遺跡周辺部の上位段丘面上では、台地と小谷地が指状状に見られ谷筋は北側に開く。この谷地の下流は白石稲荷山古墳東脇の谷へと続く。また、遺跡地南方1km程の所には人造湖の竹沼貯水池があり、更に南には秩父山地に続く急峻な丘陵が見られる。この丘陵の基盤層には第三紀中新世の吉井層が堆積する。上層にはローム層の堆積が見られ、室田軽石(MP)が確認されている。谷地にはAs-Bが堆積し、湧水利用の谷頭田が検出された。現在、周辺部に幾つかの貯水池が設けられ、水田耕作に利用されている。

第2節 歴史的環境

多比良平野遺跡、白石根岸遺跡の両遺跡とも黒熊中西遺跡(1)(1992)や白石大御堂遺跡(1990)に隣接している。当地域の考古学的通史は上記2冊に既述されており、両冊を参照していただき、ここでは、白石根岸遺跡で検出された縄文時代前期後半の諸磯c式期について若干の遺跡分布を概観しておきたい。

周辺で該期の住居跡を検出した遺跡として、吉井

町黒熊第5遺跡が挙げられる。白石根岸遺跡からも近距離にあり、両遺跡の近縁性は強い。吉井町黒熊第5遺跡では3軒の住居跡から諸磯c式土器が出土し、その他に興津式や十三菩提式も見られ、本遺跡の様相と近似する。この黒熊第5遺跡の南側に展開する上位丘陵上では黒熊栗崎遺跡(5)・黒熊八幡遺跡(4)・黒熊中西遺跡(3)が一連の高速道開発で調査され、諸磯c式の破片が出土しているが、住居跡は検出されていない。一方、多比良平野遺跡と土合川を挟んで占める入野遺跡(9)においては、c式終末期的な様相を持つ土器を出土した住居跡1軒が報告されている。

その他に、本遺跡に東接する白石大御堂遺跡より諸磯b～c式期の土器細片が、希薄な出土を見せる。5図範囲外だが、鮎川右岸の河岸段丘上に位置する滝下遺跡ではc式期の住居跡が1軒と土坑1基が確認されている。

以上のように、白石根岸遺跡を取り巻く該期周辺遺跡を概観したが、中期遺跡とは違い量的にも少ない傾向は看取できる。前期後半末から終末段階の遺跡数の激減は当地域にも見られる現象である。

当地域の縄文時代遺跡分布は既に、鬼形芳夫・内木真琴両氏が述べている(1988)。氏は、鍋川右岸上位段丘面では諸磯b式期とc式期の遺跡数箇所存在を示唆され、その傾向を「c式期にかけては、上位段丘に占める割合が増加傾向を示す」と指摘している。確かに当地域の該期遺跡が集中する上位段丘では、住居跡は入野遺跡や黒熊第5遺跡のように平坦地形がある程度保証された地点に選地する様相が見られる。反面、丘陵地形を呈する高標高部分における黒熊八幡遺跡などの散布状況は高次の居住域としてではなく、副次的な活動による所産と受け取られる。次に、本遺跡の東側(鮎川左岸)では、大御堂遺跡・竹沼遺跡(15)とも中期が主体となるように、前期の遺跡は希薄なようだ。ただし、右岸の河岸段丘上に立地する滝下遺跡には注目しておかなければ

ならない。該期の集落が、低位段丘などに進出する傾向が果して一般なのか事例の増加を望みたい。

当地域の諸畿C式期は、住居跡・遺跡数とも他の時期と比較して極端に少ない。しかしながら、出土

土器は、希少な遺跡数に比して多く、次代の十三菩提式土器の量的な貧弱さを考えると、C式期においてもb式期と同等の居住を位置付けなければならないだろう。集落の拡散現象なども考慮しておきたい。

周辺遺跡一覧表

No	遺跡名 所在地	遺跡内容 発掘の要因	備考
1	多比良平野 吉井町大字多比良	上信越自動車道建設。	
2	白石坂岸 藤岡市白石字根岸	上信越自動車道建設。	
3	黒熊中西 吉井町黒熊字中西	古墳時代～奈良・平安時代集落、寺院址。 上信越自動車道建設。	群馬県埋蔵文化財調査事業団「黒熊中西」1992
4	黒熊八幡 吉井町黒熊字八幡	旧石器・縄文時代、古墳～奈良・平安時代。 上信越自動車道建設。	群馬県埋蔵文化財調査事業団年報9・10 1990・1991
5	黒熊築崎 吉井町字築崎	奈良・平安時代の集落。 上信越自動車道建設。	群馬県埋蔵文化財調査事業団年報9・10 現在報告書作成中
6	多比良追辺野 吉井町多比良字追辺野	旧石器時代～奈良・平安時代集落。 上信越自動車道建設。	群馬県埋蔵文化財調査事業団年報9・10 1990・1991
7	矢田 吉井町大字矢田	旧石器・縄文時代、古墳～奈良・平安時代。 上信越自動車道建設。	群馬県埋蔵文化財調査事業団「矢田遺跡1～IV」1990～1993
8	榑谷戸 吉井町大字矢田	縄文時代、古墳～奈良・平安時代 上信越自動車道吉井インター接続道路建設。	吉井町教育委員会「榑谷戸遺跡」1989
9	入野 吉井町大字石神	縄文時代～奈良・平安時代の集落。 吉井町入野中学校建設。	尾崎吉左衛門「入野遺跡」1962 吉井町教育委員会「入野遺跡」1985・1986
10	黒熊遺跡群 吉井町黒熊字原	縄文時代～奈良・平安時代の集落。 町営原地区土地改良総合整備事業。	吉井町教育委員会「黒熊遺跡群1～5」 1981～1985
11	東沢 吉井町大字多比良	古墳時代～奈良・平安時代の集落。 吉井町農協稲藁貯留所建設。	吉井町教育委員会「東沢遺跡、折茂東遺跡」1987
12	下五反田窪跡 吉井町多比良字下五反田	平安時代、須置器製作窯址。地下式無階階段登室。 学術調査。	国士館大学「考古学研究室発掘調査報告書」1983
13	未沢窪跡 吉井町多比良字未沢	奈良時代、須置器製作窯。	国士館大学「考古学研究室発掘調査報告書」1983
14	川内遺跡 吉井町吉井字中原	弥生時代～平安時代集落。方形周溝基。 学校建設工事。	吉井町教育委員会「川内遺跡」1982
15	F1竹沼遺跡群 藤岡市西平井緑芝	旧石器・縄文～奈良・平安時代。 県営圃地整備事業。	藤岡市教育委員会「F1竹沼遺跡」1978
16	塚原遺跡 吉井町大字小車字塚原	縄文時代中期末～晩期包含層。平安時代堅穴住居1軒。 東京電力中東京新幹線鉄塔建設1983	吉井町教育委員会「塚原遺跡・黒熊遺跡」1983
17	石神神社古墳群 吉井町石神字夜神	8基	『上毛古墳總覧』1935年 『吉井町誌』1974年
18	蛇塚古墳群 吉井町大字池	円墳1基。瓦石・円筒埴輪配列。形象輪輸出土「塚原古墳群内」 宅地造成。	吉井町教育委員会「蛇塚古墳」1987年
19	中之原城 吉井町大字多比良	中世紀址。縄文包含層。古墳2基。 吉井町宮内平地区土地改良総合整備。	吉井町教育委員会「中之原城」1989年
20	新郷城跡 吉井町大字多比良字中城	中世紀址。土器・門状遺構、道路状遺構。 町道拡幅工事。	吉井町教育委員会「新郷城跡」1992年

第2節 基本土層

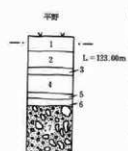
多比良平野遺跡は、土合川の侵食が基盤層である吉井層まで達し、遺跡内では竊川段丘堆積物及び関

東ローム層等の堆積は見られず、土合川の段丘堆積物が見られる。遺構掘り込み面は土合川段丘堆積層

第2章 立地と環境

の褐色粘土層その下層には礫層が見られる。

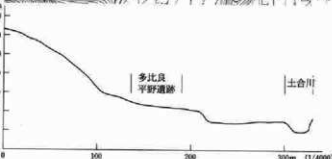
白石根岸遺跡の土層は、下層より基盤層の吉井層、段丘堆積層、関東ローム層、沖積層の順に土層堆積が観察でき関東ローム層中には室町軽石、As-BP層などが見られる。またA区では、ローム層上に黒褐色の水田耕作土の堆積が見られ、直上にはAs-B軽石層が覆う。



平野遺跡基本土層

1. 淡灰褐色土 耕作土
2. 淡褐色土 白色粒、砂混含む。
3. 灰褐色土 白色粒混じり。やや砂質。
4. 暗褐色粘質土 小砂混含む。
5. 黄褐色粘質土 間層に白色粘土層混含む。
6. 明黄褐色粘質土
7. 砂礫層

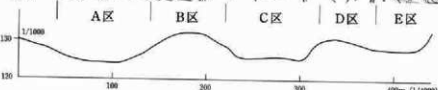
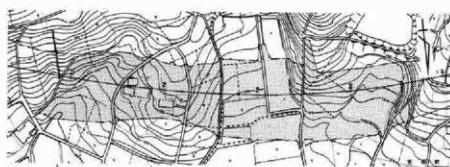
第6図 多比良平野遺跡基本土層図



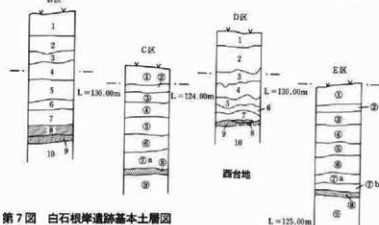
根岸遺跡基本土層

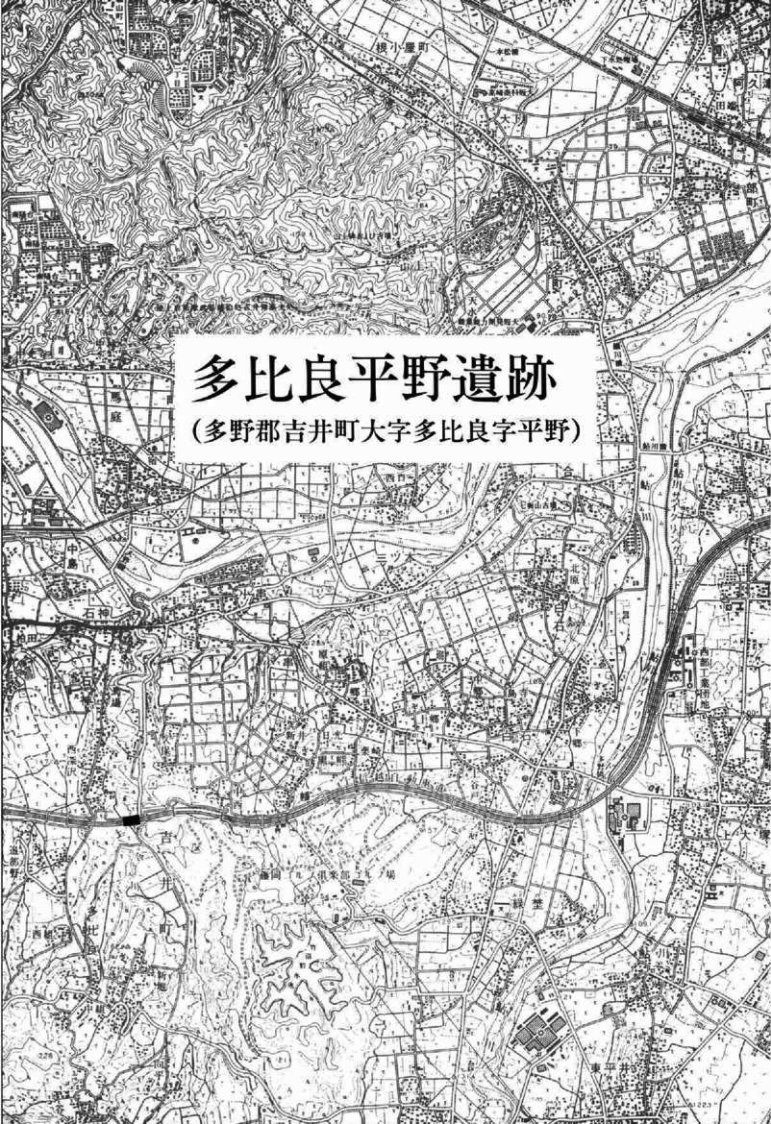
(台地上)

1. 淡褐色土 耕作土
 2. 褐色土 白色粒含む。
 3. 黄褐色土 ローム層位置
 4. 明黄褐色土 ソフト・ローム層
 5. 明茶褐色土 黒色鉱物粒若干含む。(BP層)
 6. 暗茶褐色土 黒色鉱物多量に含む。(BP層)
 7. 暗茶褐色土 暗色帯
 8. 橙色軽石層 (室田軽石層)
 9. 乳白色軽石層
 10. 白色粘土と褐色粘土の混土層 (沖積地)
- ①. 灰褐色土 耕作土
 ②. 淡灰色土 As-A 多量に含む。
 ③. 黄茶褐色土 As-A 含む。
 ④. 暗赤褐色土 鉄分沈着層
 ⑤. 暗黄灰色土
 ⑥. 黄褐色土と灰褐色土の混土
 ⑦a. 黄褐色土と明灰色土の混土
 ⑦b. 黄褐色土と灰色粘質土の混土
 ⑧. As-B層
 ⑨. 黒色粘質土 水田耕作土



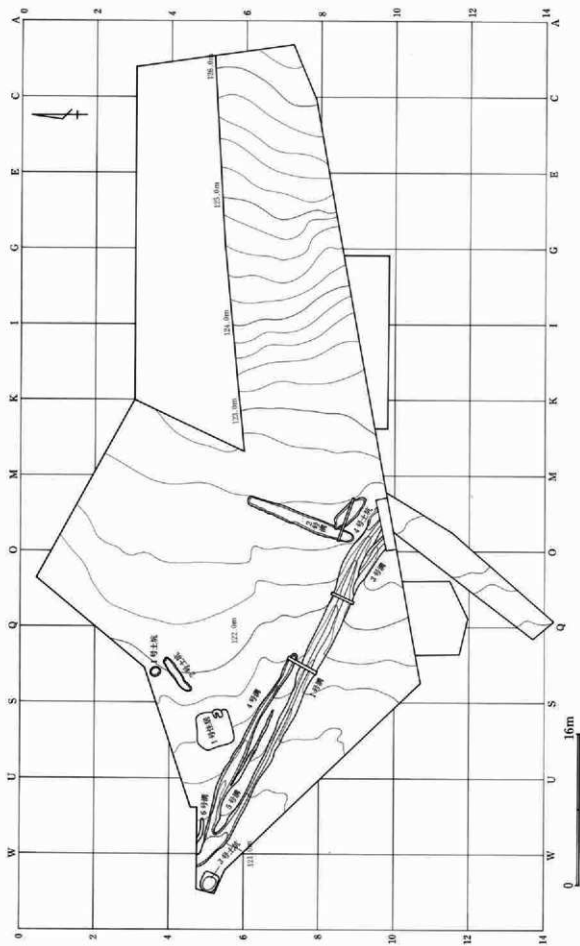
第7図 白石根岸遺跡基本土層図





多比良平野遺跡

(多野郡吉井町大字多比良字平野)



第 8 圖 多比良平原地形圖

第3章 多比良平野遺跡

第1節 遺跡の概要

本遺跡は、中西丘陵と多比良台地に挟まれた土合川の河岸段丘上に立地し、段丘面から河床面までは比高差10mを測る。また調査区も東から西にかけて5m程の傾斜を持つ。両側の丘陵及び台地上には黒熊中西遺跡、多比良追部野遺跡が存在する。

遺構は、調査区北西方向の台地縁辺部に10世紀中葉の竪穴住居跡1軒、土坑4基及び溝6条を検出した。竪穴住居跡内からは、須恵器坑や羽釜を主体とした多量の土器片が廃棄されたと思われる状態で出土している。

第2節 検出された遺構・遺物

1. 竪穴住居跡

1号住居跡 (P.L. 2・4～6)

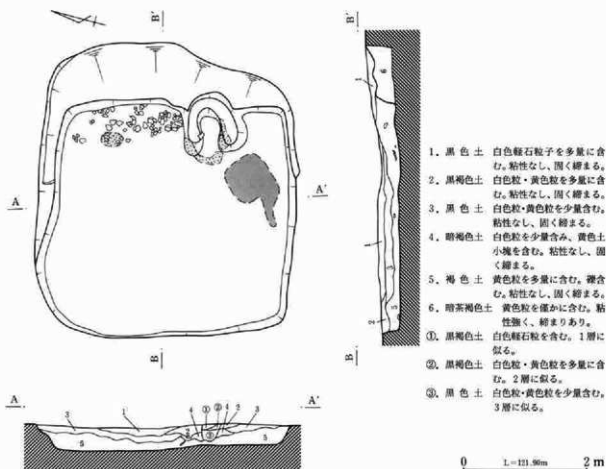
位置 S-5 床面積 7.0㎡

主軸方位 N-77°-E 残存壁高 0.34m

重複 無し

規模と形状 長辺3.90m、短辺3.80mの正方形のプランを呈するが、東壁壁外は1m程の幅でテラス状に掘り込まれている。

床面 床面は、小砂礫を僅かに含む粘性の強い地山暗黄褐色土の掘り方面をそのまま使用している。若干の起伏が認められ、床面精査ではかまど前から右前にかけて灰や焼土粒の広がりが見られた。



第9図 1号住居跡

第3章 多比良平野遺跡

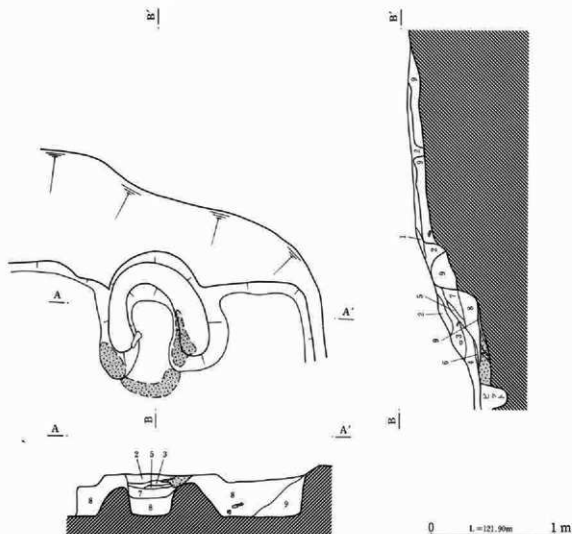
竈 東壁中央よりやや南側に袖を有する竈が築かれている。袖部分は地山掘り残しではなく、地山塊主体の粘性の強い淡褐色土を貼り付けている。炊き口部から燃焼部にかけて焼け込み焼土化している。覆土中の8層より上層は廃棄後の住居埋没過程による流入と考えられ、9層は天井部崩落土であり、間層の見られないことから廃棄時の崩落と考えられる。火焼面は床面と同レベルであり、下層に焼土層の堆積が見られた。煙道部は認められなかった。

貯蔵穴・壁下周溝・柱穴 検出されなかった。

出土遺物 覆土上層から中層にかけて多量の遺物が出土し、廃棄遺物と考えられる。

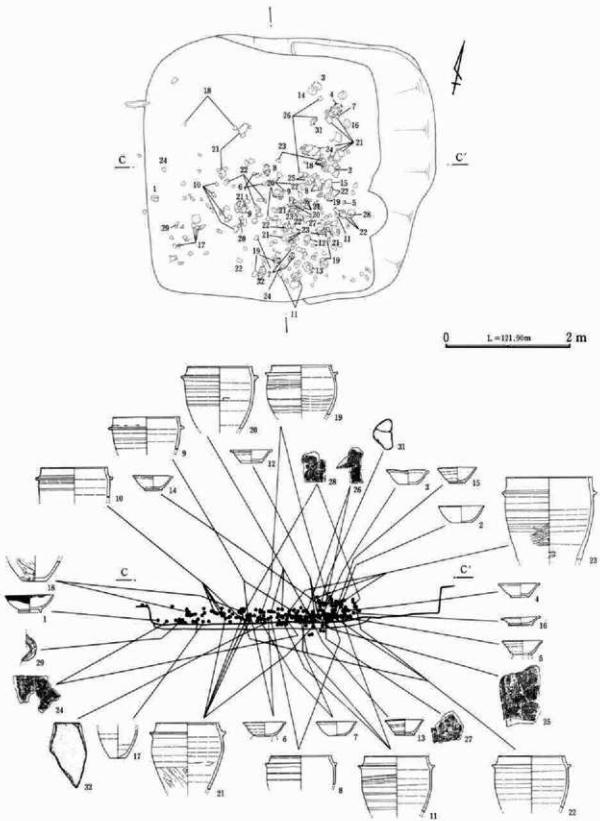
掘り方 床面と掘り方面がほぼ一致し、床面下からかまど前と南東隅に小ピットが検出された。

時期 出土遺物や住居形態から、10世紀中葉と考えられる。



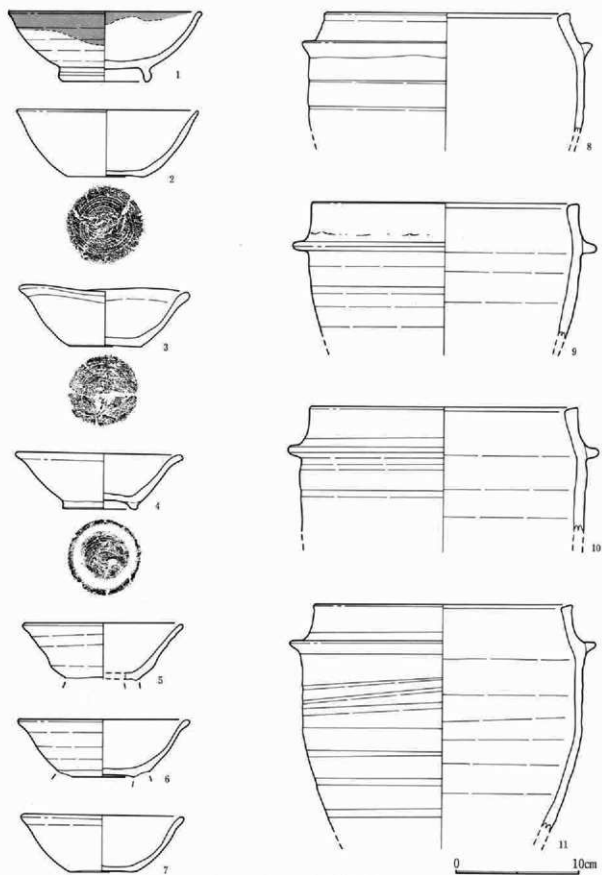
- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1. 黒色土 白色粒を多量に含む。粘性なし、固く締まる。 | 6. 淡褐色土 焼土・炭化材を含む。 |
| 2. 黒褐色土 白色粒、黄色粒を含む。粘性なし、固く締まる。 | 7. 淡褐色土 黄色粒含む。粘性ややあり、固く締まる。 |
| 3. 褐色土 焼土塊を多量に含む。粘性なし、固く締まる。 | 8. 褐色土 黄色粒・糖を多量に含む。粘性ややあり、締まりあり。 |
| 4. 褐色土 焼土塊を少量含む。粘性なし、固く締まる。 | 9. ツヤのある暗褐色土 |
| 5. 暗赤褐色土 焼土塊を多量に含む。 | 黄色粒傾かを含む。糖少量含む。粘性、締まり強い。 |

第10図 1号住居跡竈

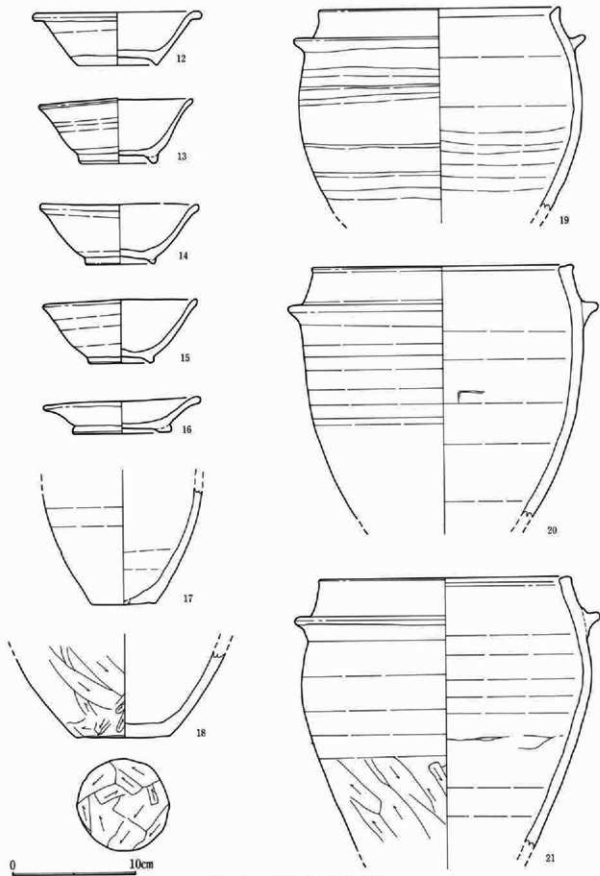


第11図 1号住居跡遺物出土状態

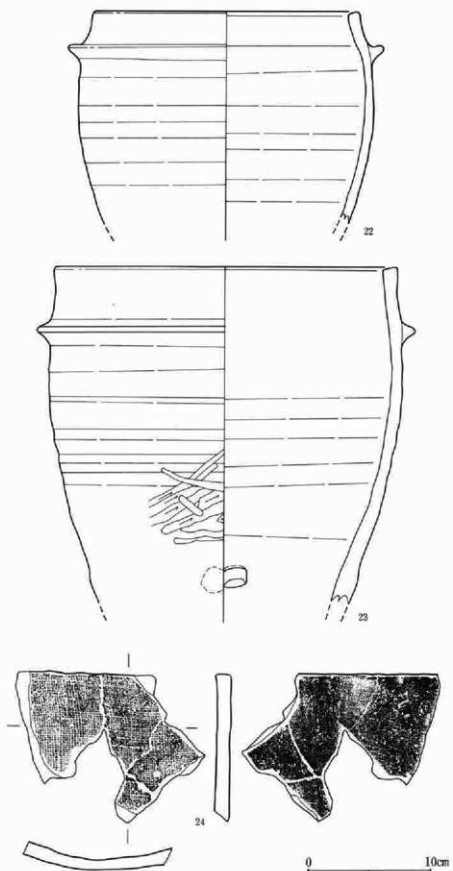
第3章 多比良平野遺跡



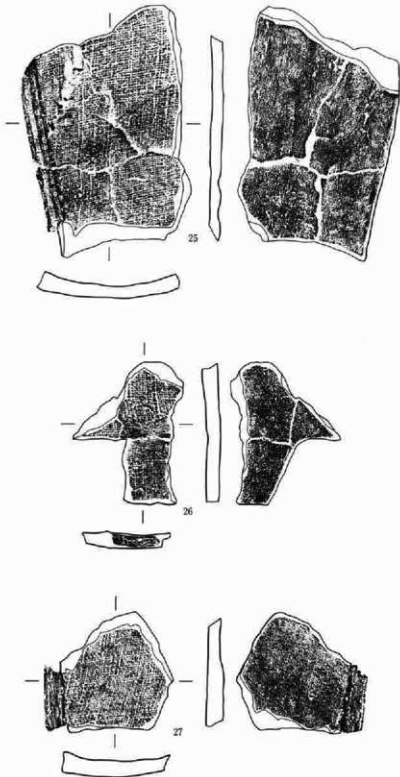
第12図 1号住居跡出土遺物(1)



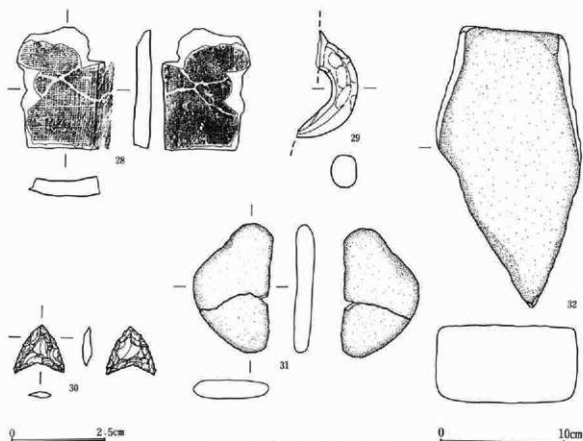
第13図 1号住居跡出土遺物(2)



第14図 1号住居跡出土遺物(3)



第15図 1号住居跡出土遺物(4)



第16図 1号住居跡出土遺物(5)

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法量 (cm)	①色調②構成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	灰陶器 埴	西 +6cm	口～底 片	口(15.7) 高 (5.5) 底(6.8)	①灰白②雲紋 ③白色細粒	楕圓形、軸線右回転。底部は回転ヘラナデ。 施釉方法は置き掛け。	大原2号壺 式刷
2	須恵器 坏	東付近 +8cm	口～底 片欠	口(14.0) 高5.2 底6.0	①橙②酸化焰 ③砂粒・粘土細粒含む	楕圓形、底部右回転糸切り未調整。	
3	須恵器 坏	北東 +20cm	口縁部 一部欠	口13.1 高4.2 底5.8	①褐色②中性焰 ③砂粒・粘土細粒含む	楕圓形、底部右回転糸切り未調整。口縁部僅 かに外反。	
4	須恵器 埴	北東 +8cm	完形	口12.9 高4.3 底5.5	①黄褐色②酸化焰 ③砂粒含む	楕圓形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。	
5	須恵器 埴	かまど前 +1cm	口～底 片	口(12.7) 高 (4.3) 底(5.0)	①灰黄褐色②還元焰 ③砂粒含む	楕圓形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。 接部やや膨らみを持つ。	
6	須恵器 埴	中央 +5cm	口～底 片	口(13.7) 高 4.5 底5.0	①黄褐色②酸化焰 ③砂粒含む	楕圓形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。	
7	須恵器 坏	南東 +8cm	口～底 片	口(12.5) 高 4.6 底5.0	①にぶい黄褐色②酸化焰 ③細砂粒含む。	楕圓形、底部回転糸切り未調整。	
8	須恵器 羽蓋	中央 +7cm	口～胴 破片	口(19.6)	①橙②酸化焰 ③砂粒含む。	楕圓形、口縁部から頂部にかけて強いナデ、胴 部貼り付け後、横ナデ断面上向き三角形。	
9	須恵器 羽蓋	中央南 +12cm	口～胴 1/10	口(21.6)	①灰白②還元焰 ③砂粒含む	楕圓形、口縁部から口縁頂部にかけて強いナ デ、胴部貼り付け後、強いナデ。	No.10と同一 個体か?
10	須恵器 羽蓋	南西 +9cm	口～胴 片	口(21.6)	①灰白②還元焰 ③砂粒含む	楕圓形、口縁部から口縁頂部にかけて強いナ デ、胴部貼り付け後、強いナデ。	No.9と同一 個体か?
11	須恵器 羽蓋	南東 +1cm	口～胴 片	口(21.0)	①にぶい橙②酸化焰 ③砂粒含む	楕圓形、口縁部から頂部にかけて強いナデ、胴 部貼り付け後、横ナデ断面上向き三角形	
12	須恵器 南付近	口縁部 +11cm 片欠	口縁部 1/10	口13.0 高4.2 底6.3	①にぶい黄褐色②中性焰 ③砂粒・粘土細粒含む	楕圓形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。 口縁部外反。	
13	須恵器 埴	南付近 +2cm	口縁部 一部欠	口12.4 高5.1 底5.9	①黄褐色②中性焰 ③細砂粒含む	楕圓形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。	

14	須志遺 塀	北東 +19cm	口縁部 瓦欠	口12.6 高5.0 底5.3	①にぶい黄褐色酸化焙 ②砂粒含む	輪縁整形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。
15	須志遺 塀	北東 +12cm	瓦形	口12.2 高5.0 底5.0	①酸化焙 ②砂粒含む	輪縁整形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。
16	須志遺 高台付塀	北東 +8cm	瓦形	口(12.5) 高 2.5 底7.6	①灰黄褐色酸化焙 ②砂粒含む	輪縁整形、底部回転糸切り後、高台部貼り付け。
17	土師器 甕	南西 +4cm	胴~底 破片	底(5.0)	①酸化焙 ②砂粒・粘土粒含む	胴部下半斜方向へ削り。底部割落の、底面杖状圧痕見られる。
18	須志器 羽釜	中央東 +10cm	胴~底 瓦	底7.3	①にぶい赤褐色酸化焙 ②砂粒含む	輪縁整形。胴部下半斜方向へ削り。底面へ削り。胴部貼り付け後、強いナデ。
19	須志器 羽釜	南東 +8cm	口~胴 破片	口(19.5)	①灰黄褐色中性焙 ②砂粒含む	輪縁整形。口縁部から口縁頂部強いナデ、胴部貼り付け後ナデ、断面上向き。
20	須志器 羽釜	南東 +10cm	口~胴 瓦	口(21.2)	①にぶい黄褐色中性焙 ③粗砂粒含む	輪縁整形。口縁部から口縁頂部にかけて強いナデ。胴部貼り付け後、強いナデ。
21	須志器 羽釜	中央 +4cm	口~胴 瓦	口(20.4)	①灰白②中性焙 ③砂粒・小粒含む	輪縁整形。口縁部から口縁頂部にかけて強いナデ。胴部貼り付け後、強いナデ。
22	須志器 羽釜	中央南 +10cm	口~胴 瓦	口(21.5)	①にぶい黄褐色酸化焙 ②砂粒含む	輪縁整形。口縁部から口縁頂部にかけて強いナデ。胴部貼り付け後、強いナデ。
23	須志器 羽釜	南東 +4cm	口~胴 瓦	口(27.8)	①灰白②還元焙 ③砂粒・小粒含む	輪縁整形。胴部下半横ナデ及び削り。口縁部から頂部にかけて強いナデ。胴部貼り付け。
24	平瓦	西 +4cm	狭端部 破片	厚1.3	①橙②普通 ③砂粒含む	外面縦方向ナデ(指?)。内面布目圧痕。側縁部面取り。
25	平瓦	中央東 +8cm	側縁部 破片	厚1.0	①明黄褐色②普通 ③砂粒含む	外面縦方向ナデ(指?)。内面布目圧痕。側縁部面取り。
26	平瓦	北東 +10cm	狭端部 破片	厚1.6	①にぶい橙②普通 ③粗砂粒含む	外面縦方向ナデ(指?)。内面布目圧痕。端部面取り。
27	平瓦	南東 +4cm	側縁部 破片	厚1.5	①橙②普通 ③粗砂粒含む	外面縦方向ナデ(指?)。内面布目圧痕。側縁部面取り。
28	平瓦	かまど前 +22cm	側縁部 破片	厚1.4	①橙②普通 ③砂粒含む	外面縦方向ナデ(指?)。内面布目圧痕。側縁部面取り。
29	肥手	南西 +4cm	瓦形	長8.4 幅2.1 厚2.0	①灰黄色酸化焙 ②砂粒含む	粘土紐をてづくぬ状に成形する。
30	石器 打製石鏝	覆土	瓦形	<計測値>長1.2、幅1.3、厚0.2、重0.3<石材>黒曜石<特徴>無黒凹基		
31	石製品?	北東 +24cm	瓦形	<計測値>長10.2、幅6.3、厚1.5、重113.6<石材>砂岩<特徴>加工痕等見られない。		
32	加工磚	南 -1cm	ほぼ瓦形	<計測値>長21.4、幅11.5、厚6.0、重117.7<石材>砂岩<特徴>砂岩を角柱状に面取りし、端部三角形に加工する。火熱を受け変色。		

2. 土 坑

1号土坑

R-3グリッド内に位置し、規模は、長辺1m、深さ24cmを測る。形状は、円形を呈する。重複は無し。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平らである。

2号土坑

R-4グリッド内に位置し、主軸方位はN-50°-Eに傾く。規模は、長辺約4.4m、短辺0.8m、深さ0.18mを測る。形状は、細長い溝状を呈する。重複は無し。壁面は緩やかに立ち上がり、断面舟底状を呈する。

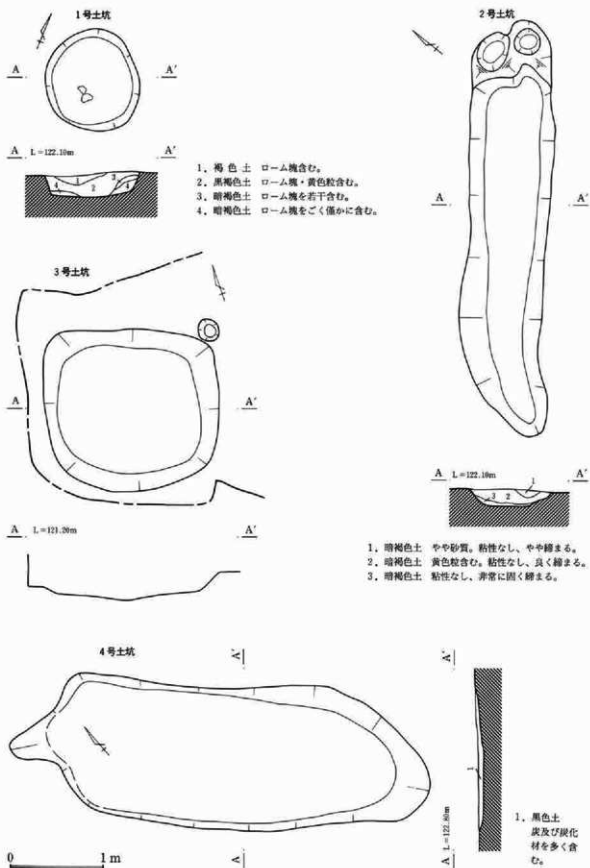
3号土坑

調査区北西端部、W-5グリッド内に位置し、主軸方位はN-110°-Eに傾く。規模は、長辺2m、短辺1.75m、深さ31cmを測る。形状は、正方形に近い長方形を呈する。重複は無し。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は若干起伏が見られる。

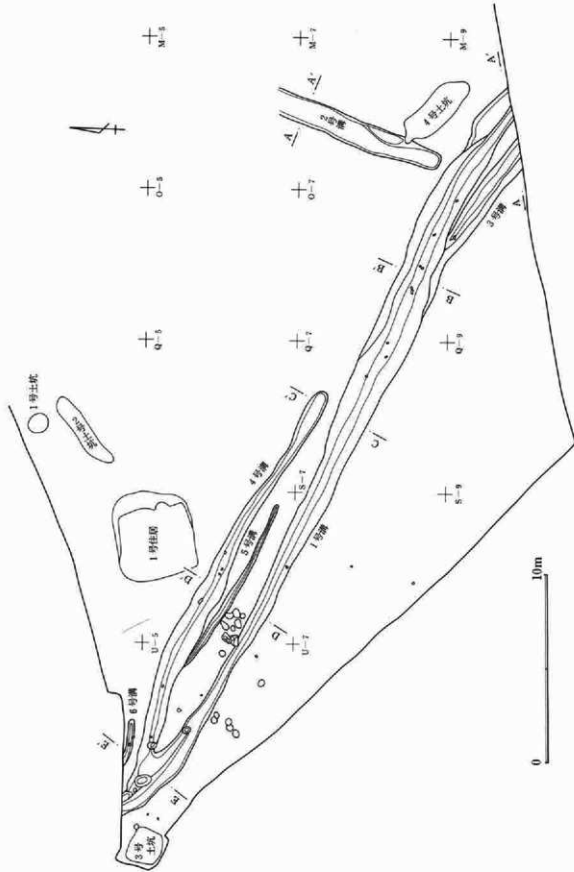
4号土坑 (P.L. 3)

N-8グリッド内に位置し、主軸方位はN-132°-Eに傾く。規模は、長辺4.5m、短辺1.5m、深さ10cmを測る。形状は、溝状を呈する。重複は、2号溝と接する。覆土全体に炭・炭化材等が多量に含まれる。

第3章 多比良平野遺跡



第17図 1~4号土坑跡



第19図 1~6号溝跡

3. 溝

1号溝 (P.L. 3)

調査区西縁部で検出した。確認全長約45mを測り、深さは18cm前後と浅い。南東方向から北西方向にかけて傾斜している。重複は、南東端で3号溝と重なり合い、また北西端で4号溝と接する。

2号溝 (P.L. 3)

調査区ほぼ中央部において、1号溝と直交する形で検出された。確認全長12mを測るが、北側は浅くなり消失する。掘り込みは浅く、深さは最大で9cmを測り、北から南にかけて若干傾斜している。

3号溝 (P.L. 3)

1号溝と南東端で重なり合う。確認全長7m、深さ11cmを測る。

4号溝

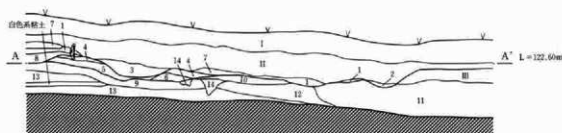
1号溝と北西端で重なり合うが、全体的には平行気味に掘削される。確認全長は22.5m、深さは最大で12cmを測る。傾斜は他の溝同様北西方向に傾く。

5号溝

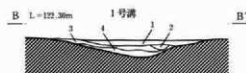
1号溝と4号溝に挟まれた地点で検出され、4号溝に吸収される。確認全長10m、深さは1～3cm前後を測る。

6号溝

調査区北西端に位置し、確認全長2.5m、深さ10cmを測る。



1. 現耕作土
- II. 淡褐色土 白色粒、黄色粒多量に含む。
- III. 灰褐色土 白色粒多く含む。やや砂質。
1. 暗灰褐色土 粒子の粗い砂質。黄色粒多く含む。粘性、締まりなし。
2. 暗褐色土 白色粒層かを含む。粘性なし、固く締まる。
3. 黒褐色土 白色粒、黄色粒少量含む。粘性なし、やや締まる。
4. 暗褐色土 白色粒、黄色粒僅かに含む。粘性ややあり、固く締まる。
5. 淡茶褐色土 黄色粒僅かに含む。粘性、締まり強い。
6. 暗褐色土 粒子やや粗い。粘性、締まりあり。
7. 黒褐色土 白色粒多量に含む。黄色粒も多く含む。
8. 暗灰褐色土 粒子の粗い砂質。黄色粒多量に含む。
9. 黄褐色粘質土
10. 暗茶褐色粘質土 黄色粒僅かに含む。粘性、締まりあり。
11. 暗茶褐色粘質土 黄色粒層かを含む。よく締まる。
12. 黄褐色粘質土 マンガン粒(黒色斑点)を多量に含む。締まり強い。
13. 明黄褐色粘土 白色粘土混じり。締まり強い。
14. 茶褐色土 粘性あり。しりなし。



4号溝土層説明

1. 暗褐色土 粘性なし、固く締まる。
2. 暗褐色土 粘性あり、固く締まる。
3. 暗褐色土 ローム塊混じり、固く締まる。



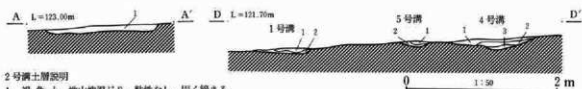
1号溝土層説明

1. 淡褐色土 白色粒混じる。粘性なし、固く締まる。
2. 褐色土 白色粒・黄色粒混じる。粘性なし、固く締まる。
3. 褐色土 白色粒混じる。
4. 暗褐色土 粗指大の砂粒混じる。粘性なし、固く締まる。
5. 暗褐色土 ローム混じり。固く締まる。(地山)

0 2m

第19図 1・4・6号溝跡土層

第2節 検出された遺構・遺物



2号溝土層説明

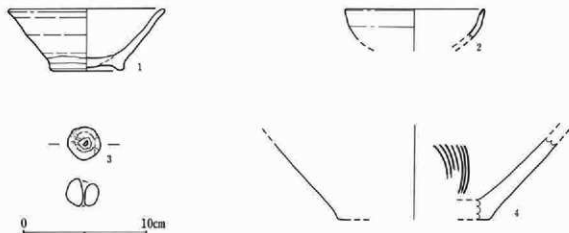
1. 褐色土 地山塊崩じり。粘性なし、固く締まる。

5号溝土層説明

1. 暗褐色土 粘性なし、固く締まる。

2. 褐色土 ローム塊を少量含む。粘性なし、固く締まる。

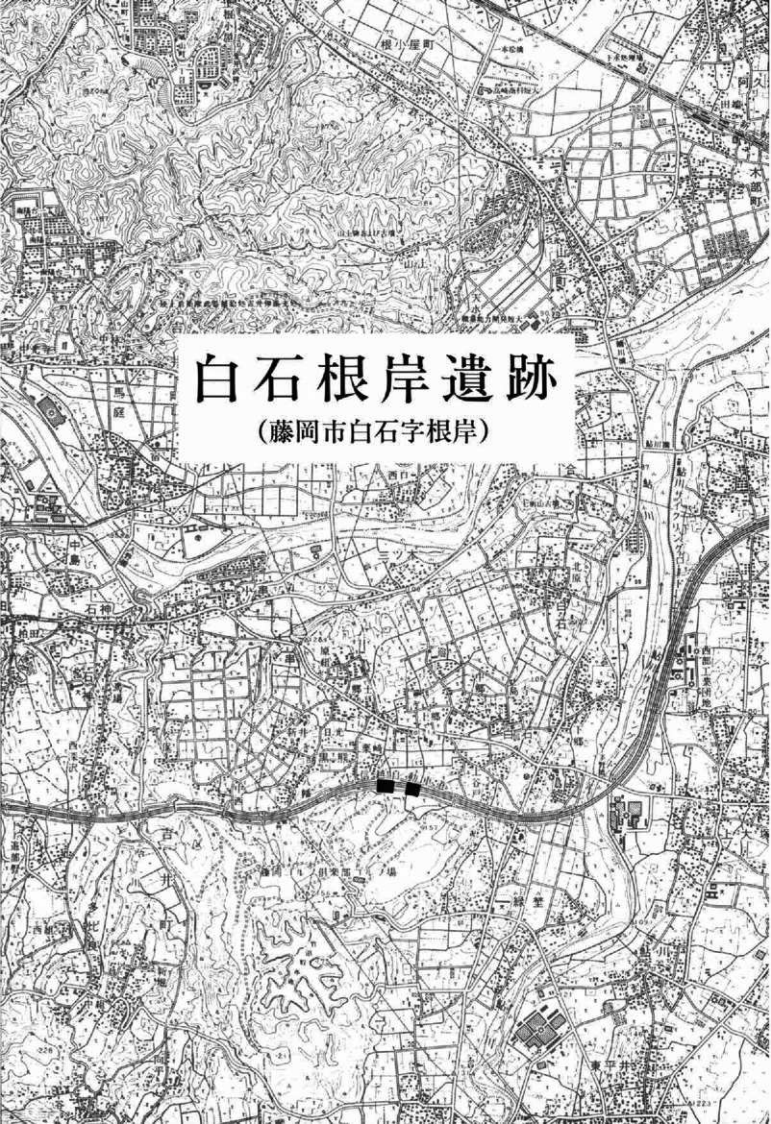
第20回 2・5号溝跡土層



第21回 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存 法 量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	須形 碗 埴	U-6	完形 口12.4 高4.8 底6.0	①明黄褐色②還元焰 ③砂粒含む	輪轆整形。底部回転糸切り後、高台部貼付。	
2	土師 器 環	N-4	口縁部 ～体部	①暗褐色炭化焰 ③砂粒含む	口縁部横ナズ。口縁直下未調整。体部から底部 へク削り。	
3	土製品 土器?	U-7	完形 幅2.6 厚2.1	①褐色炭化焰 ③砂粒含む	てづくね。土製品。中央円孔は、両側より円錐 状の刺突。	
4	軟質陶器 鏝 鉢	O-1	底部～ 胴部片 底(6.2)	①灰褐色②中性焰 ③砂粒含む	おろし目。7束。 櫛歯状工具による。	



白石根岸遺跡

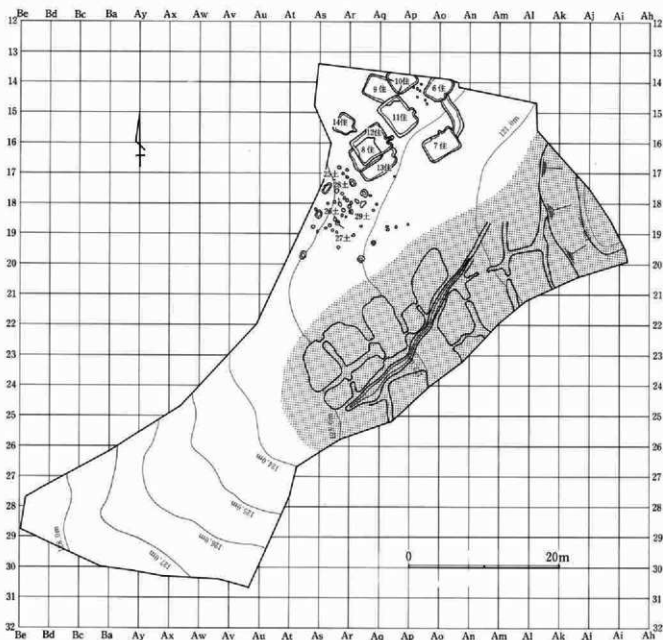
(藤岡市白石字根岸)

第4章 白石根岸遺跡

第1節 遺跡の概要

A区(東台地) 調査区は北に伸びる舌状台地東斜面部から低地部にかけての範囲であり、台地頂部にかけて遺構の存在は認められなかった。調査により、8世紀～10世紀にかけての竪穴住居跡9軒、土坑敷基、As-B降下により埋没した水田跡及び溝状遺構

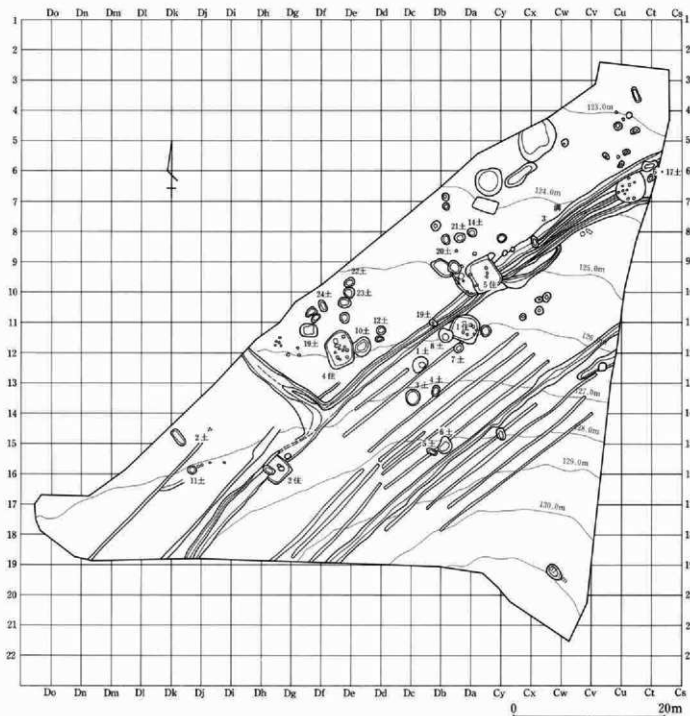
1条が検出された。竪穴住居跡は、台地の東斜面部にまとまり、谷地で検出されたAs-B埋没水田跡とは同時存在の可能性が考えられ、集落遺地の一端を伺うことができる。



第22図 白石根岸遺跡A区全体図

D区（西台地） 調査区は、北に伸びる舌状台地頂部から西側斜面部にかけての範囲であり、台地東側斜面部及び両側低地部には遺構の存在は認められなかった。調査により、縄文時代前期（諸磯式期）を中心とした竪穴住居跡3軒及び同期の土器破片を出土する土坑4基、10世紀代の竪穴住居跡1軒及び近

接する位置で墨書土器を数点出土した2号土坑、その他土坑19基、溝5条、集石遺構3カ所を検出した。



第23図 白石根岸遺跡D区全体図

第2節 検出された遺構・遺物

1. 竪穴住居跡

1号住居跡 (P.L. 9・21・22)

位置 Db-11 床面積 9.0m² 残存壁高 0.43m

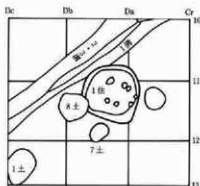
重複 1号溝、8号土坑に掘り込まれる。

規模と形状 長辺3.90m、短辺3.70mのやや東西方向に長い円形状を呈する。

床面 南東壁側から北西壁側にかけて緩やかな傾斜を持つ。生活面は掘り方面と一致する。

炉跡 住居中央西寄りに、長円形の焼土が混じる僅かな窪みを検出した。

周溝 一部南壁下のみ検出した。

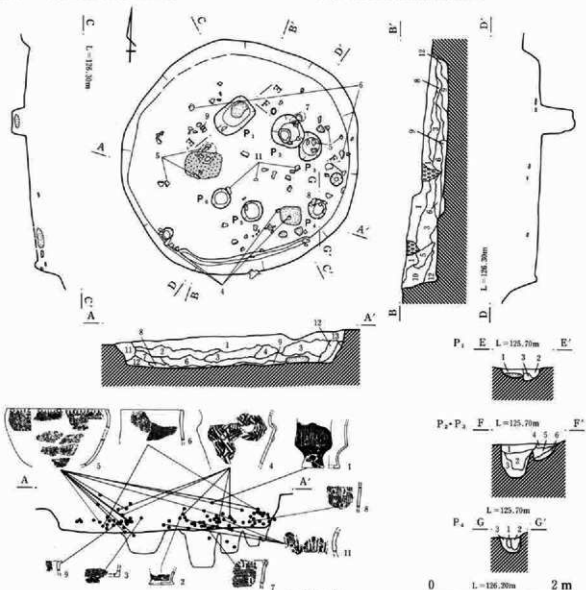


柱穴 8本検出。規模や配置に規則性は見られない。

出土遺物 破片類が覆土全体に散在する。

掘り方 床面と一致する。

時期 縄文時代前期(諸磯c式)



第24図 1号住居跡

第2節 検出された遺構・遺物

1. 明褐色土 1層より断く、YPを多く含む。暗褐色土塊を少量含む。締まり乏しい。
2. 褐色土 ローム粒を多く含む。暗褐色土塊を斑点状に含む。締まり良好。
3. 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む。炭化物を微量認められる。
4. 暗褐色土 YPを混入するローム塊を多く含む。締まりは乏しい。
5. 褐色土 ローム粒を少量含むが、比較的均質である。
6. 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む。締まりはやや乏しい。
7. 明褐色土 大型のローム塊を多く含む。締まりは良好。
8. 明褐色土 均質でローム粒主体の層。締まりは良好。
9. 黄褐色土 硬質ローム塊を多く含む。やや粘性を帯びる。
10. 暗褐色土 ローム粒を少量含むが、均質で粘性に富む。
11. 黄褐色土 YPを混入するローム塊が主体。炭化物を含む。
12. 黄褐色土 硬質ローム塊を主体とする。粘性を帯び、締まりは良好。
13. 黄褐色土 ローム層。

P₁(E-E')

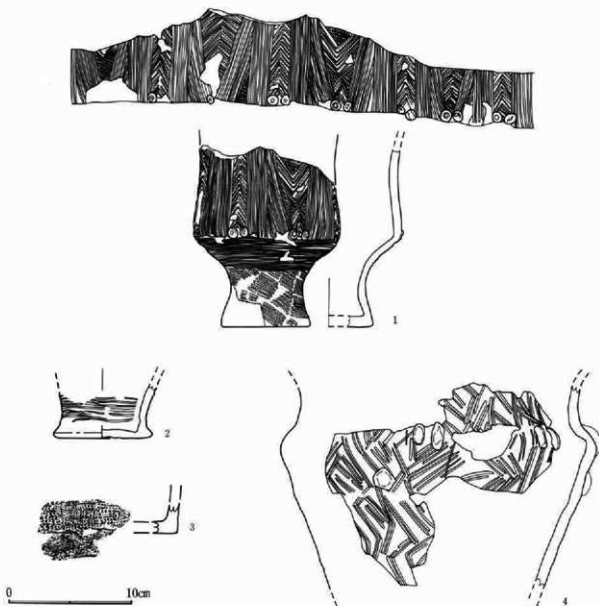
1. 明褐色土 YP含む。
2. 暗褐色土 YP・炭化物を含む。
3. 褐色土 ローム粒を多く含む。

P₂・P₃(F-F')

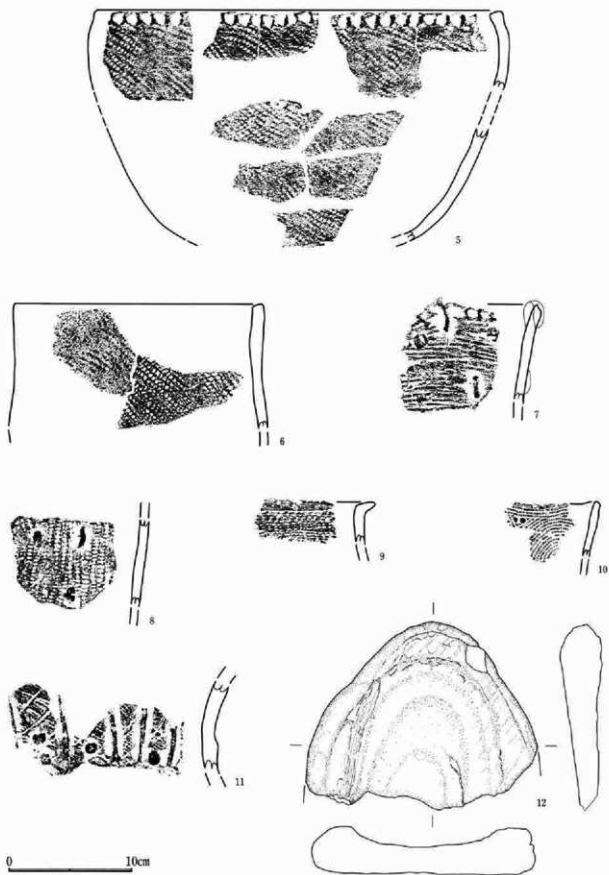
1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土 ローム塊を多く含む。
3. 褐色土 ローム粒主体。
4. 明褐色土 大型のローム塊を含む。
5. 褐色土 ローム粒子を少量含む。
6. 黄褐色土 ローム塊主体の層。

P₄(G-G')

1. 黄褐色土 ローム粒子主体の層。
2. 黒褐色土 ローム粒子を含む。
3. 暗褐色土 ローム塊を含む。



第25図 1号住居跡出土遺物(1)



第26图 1号住居跡出土遺物(2)

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	南東 +43cm	体下半 ~脚部	①橙赤堅緻 ③粗砂粒を含む	横位集合沈線による区分。体部は集合沈線による縦位構成。脚部はR L縄文陶。体面下半の屈曲部にボタン状貼付文。	諸磯c式
2	縄文土器 深鉢	北東 +30cm	底部	①浅黄②良好 ③粗砂粒を多く含む	器厚は薄手。底部端部は張る。横位集合沈線が比較的難に施文される。	諸磯c式
3	縄文土器 深鉢	北西 +22cm	底部破片	①明赤褐②良好 ③粗砂粒を多く含む	小型の「C」字状半圓竹管文が横位に連続する。密に施文されており下部にまで及ぶ。	諸磯c式併行
4	縄文土器 深鉢	南付近 +34cm	体部片	①にぶい橙②堅緻 ③粗砂粒を少量含む	屈曲部に2対の貼付文。下位には大型のボタン状貼付文。平行沈線による縦位矢羽状構成だが、疎らで難な施文。	諸磯c式
5	縄文土器 深鉢	東 +16cm	口縁部片	①明赤褐②やや軟質 ③粗砂粒を多く含む	器形は不明確。口唇部には起こし気味の刻みが連続する。地文はR L縄文陶が施される。	諸磯c式併行 美津式の影響
6	縄文土器 深鉢	北付近 +10cm	体部片	①橙②軟質 ③粗砂粒を多く含む	疑口縁か。緩やかに外反する体部器形。地文はR L縄文陶。器面は磨滅する。	諸磯c式併行
7	縄文土器 深鉢	北東 +2cm	口縁部破片	①にぶい橙②軟質 ③粗砂粒を多く含む	口唇部に刻みが連続し内側部には棒状貼付文を付す。ボタン状貼付文も付される。地文は横位集合沈線。	諸磯c式 美津式の影響
8	縄文土器 深鉢	南東 +8cm	体部破片	①にぶい赤褐②良好 ③粗砂粒を少量含む	小型の棒状貼付文が付され、地文はL R縄文陶の斜位・縦位施文。	諸磯c式
9	縄文土器 深鉢	北西 +14cm	口縁部破片	①にぶい橙②やや軟質 ③粗砂粒を含む	外屈する口縁部。2個一組の横位連続刺突文が施される。三角印刻文も下部に看取できる。	十三番提式
10	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	①暗赤褐②堅緻 ③粗砂粒を含む	結節沈文が円環状に集合し、隙間に2対の小貼付文が付される。器厚は薄手。	十三番提式
11	縄文土器 深鉢	中央東 +7cm	底部破片	①灰褐②堅緻 ③粗砂粒を含む	懸垂状貼付文間にボタン状貼付文が付される。地文に平行沈線により難な格子目文。	諸磯c式
12	石製品 石皿	覆土	片	<計測値>長14.8、幅18.7、厚3.7、重2300g<石材>緑色片岩<特徴>磨面粗く、磨り込まれた痕跡乏しい。		

2号住居跡 (P.L. 9・22)

南東壁部分を残し大半は削平を受けている。

位置 Dg-15 床面積 (5.2) m²

主軸方位 N-140°-E 残存壁高 0.14m

重複 4号溝及び電右前を長円形土坑が掘り込む。

規模と形状 南東壁長4.80m内外を測る。

床面 掘り方面と一致する。

竈 南東壁部の中央に位置し、壁を掘り込み燃焼部が構築される。燃焼部壁面の焼土化は弱い。火床面は床面より低く楕円状を呈する。電前には径45cm、深さ33cm程のビツがある。

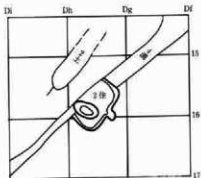
貯蔵穴 北東隅部で検出した。規模は、長さ90cm、短辺65cm、深さ45cm程の長円形状を呈する。覆土上面に須恵器境が出土。

周溝 電右袖脇で検出できた。

柱穴 無し。

出土遺物 大半の土器が床面直上で出土している。

№1の墨書土器「尊？」は北壁際溝との重複部分に

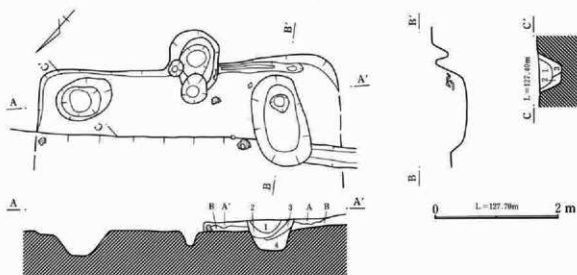


て出土。電前より刀子出土。№3・4は住居を掘り込む土坑内より重なった状態で出土しており、本住居の所属かどうか不明確である。

掘り方 床面と掘り方面がほぼ一致し、床面下から遺構は検出されなかった。

時期 出土遺物や住居形態から、10世紀代の所産と考えられる。

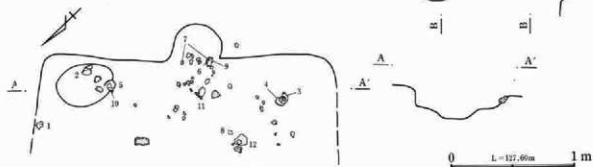
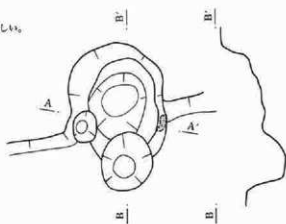
第4章 白石根岸遺跡



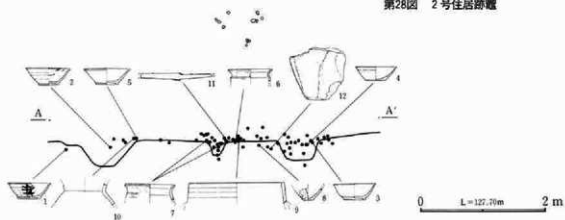
1. 褐色土 少量の炭化物・焼土粒を含む。締まりは著しく乏しい。
2. 褐色土 水性ローム塊を少量含み、黒色土塊を含む。締まりは乏しい。
3. 暗褐色土 少量の焼土粒・YPを含む。締まりは乏しい。
4. 暗褐色土 YPを含むローム塊・黒褐色土塊を斑状に含む。
- A. 暗褐色土 黒色土塊を含む。締まりは著しく乏しい。
- A'. 暗褐色土 焼土粒が認められる。
- B. 明褐色土 ローム層移層
- C-C'

1. 黄褐色土 やや締まりなく、サクサクした感じ。
2. 明黄褐色土 ロームを主体とし、YPを混入する。
3. 2層と暗オリーブ褐色土の混土。

第27図 2号住居跡

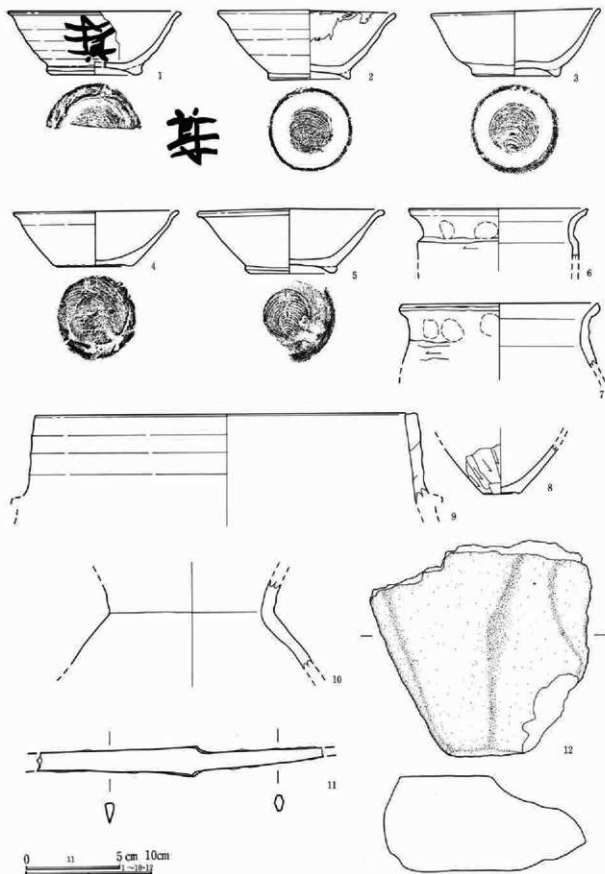


第28図 2号住居跡竈



第29図 2号住居跡遺物出土状態

第2節 検出された遺構・遺物



第30図 2号住居跡出土遺物

第4章 白石根岸遺跡

2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存 法	量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 壺	東壁 -7cm	片欠	口(13.6) 高 5.0 底(6.6)	①褐色②還元焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	横楕圓形、底部回転糸切り未調整。高台部貼付後ナデ。墨書「尊?」	墨書土器
2	須恵器 壺	第2貯蔵穴 内+29cm	ほぼ完 形	口(14.2) 高5.9 底6.4	①灰黄②還元焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	横楕圓形、底部回転糸切り未調整。高台部貼付後ナデ。	口縁内側備付倉
3	須恵器 壺	第1貯蔵穴 内+30cm	片欠	口(13.5) 高5.3 底6.7	①灰白②還元焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	横楕圓形、底部回転糸切り未調整。高台部貼付後ナデ。	
4	須恵器 壺	第1貯蔵穴 内+24cm	片欠	口(13.2) 高 4.3 底6.2	①淡黄②還元焰、良好 ③砂粒含む	横楕圓形、底部回転糸切り未調整。	
5	須恵器 壺	第2貯蔵穴 内+4cm	片欠	口(14.7) 高5.1 底6.7	①鈍い黄②還元焰、良 好③細砂粒僅かに含む	横楕圓形、底部回転糸切り未調整。高台部貼付後ナデ。	
6	土師器 壺	壺+2cm	口縁部 破片	口(14.1)	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒含む	口縁部から頸部横ナデ。口唇部僅かに凹縁有り。頸部指痕直見られる。内面丁寧ナデ。	
7	土師器 壺	壺+2cm	口縁部 破片	口(15.6)	①明赤褐②酸化焰、良 好③砂粒含む	口縁部から頸部横ナデ。口唇部僅かに内傾。凹縁有り。頸部指痕直見られる。内面丁寧ナデ。	
8	土師器 壺	南西 壁 -5cm	底部破 片	底(2.9)	①にぶい赤褐②酸化 焰、良好③砂粒含む	底面へう削り。胴下部縦方向へう削り。内面丁寧ナデ。	
9	須恵器 羽釜(楕 圓)	壺+4cm	口縁部 破片	口(31.0)	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒、粘土粒含む	横楕圓形。口唇頂部ナデにより平坦。	
10	須恵器 壺	第2貯蔵穴 内+5cm	頸部~ 胴部	口一 高一 底一	①鈍い黄②還元焰、良 好③砂粒、粘土粒含む	頸部「く」の字に屈曲。内外面ナデ。	
11	鉄製品 刀子	電筒 +6cm	周端部 欠	<計測値>長15.2、幅1.6、厚0.5、重15.7<特徴>肉肉。横直線。刃部やや内曲。茎、直線的。			
12	石製品 石皿?	南西 -11cm	片	<計測値>長16.9、幅17.3、厚7.7、重3150.0<石材>粗粒安山岩<特徴>上部水平面が平磨であり、磨面と考えられる。凹面無い。			

3号住居跡 (P.L.10・23)

位置 Ct-6 床面積 7.8㎡ 残存壁高 0.19m

重複 1, 2, 3号溝に掘り込まれる。

規模と形状 長辺3.84m、短辺3.09mを測る。東西方向にやや長い円形状を呈する。

床面 掘り方面と一致し、起伏が大きい。床面精査では、かたく踏み締められるなどの顕著な傾向は確認できなかった。

炉跡 焼土、灰、炭化物等の集中する部分は認められなかった。

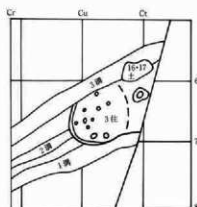
貯蔵穴・周溝 検出されなかった。

柱穴 小ビットを12穴検出したが、住居中央から西寄りに集中する。

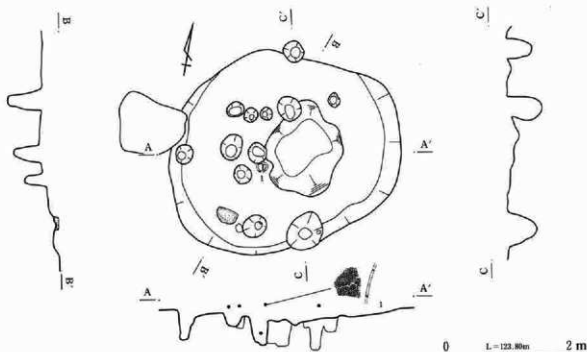
出土遺物 土器小破片及び石が数点出土した。

掘り方 床面と一致する。

時期 出土遺物や住居形態から、縄文時代の所産と考えられる。



第31図 3号住居跡出土遺物



第32図 3号住居跡

3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	中央 +24cm	体部破 片	①および②良好 ③細砂粒を含む	R L縄文の横位施文。	諸磯式

4号住居跡 (P.L. 10・22・23)

位置 De-11 床面積 12.4m²

主軸方位 N-18°-W 残存壁高 0.31m

重複 10号土坑と接する。

規模と形状 長辺4.20m、短辺3.70mを測り、南北方向に長い隅丸台形状を呈する。

床面 台地の傾斜に沿い、床面も南西から北東にかけて緩やかな傾斜を持つ。

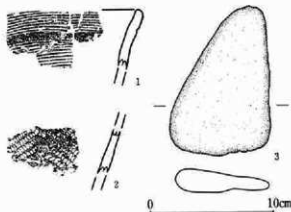
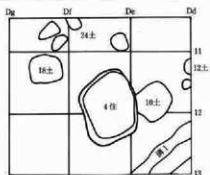
炉又は竈・貯蔵穴・周溝 検出されなかった。

柱穴 南東隅に段を有する径50cm、深さ16cm程の掘り込みあり。また小ピットを11ヶ検出したが、配置や規模等にばらつきが見られ柱穴と認定しがたい。

出土遺物 南西壁際で数点の出土遺物があるがすべて小破片である。

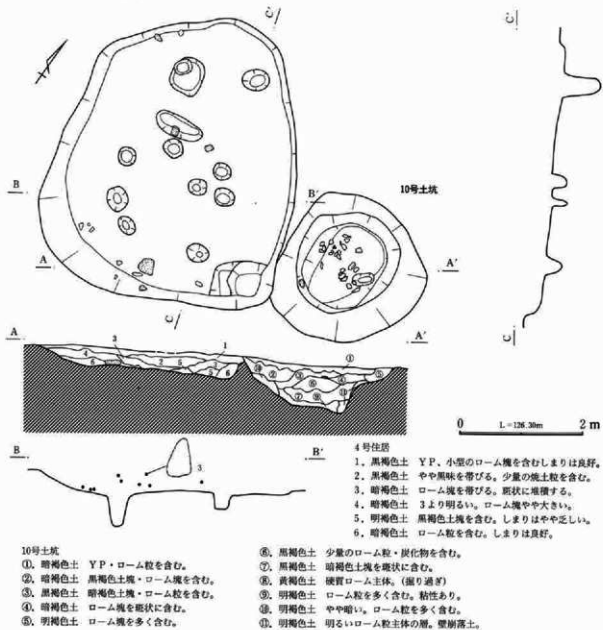
掘り方 床面と一致する。

時期 出土遺物や住居形態から、縄文時代の所産と考えられる。



第33図 4号住居跡出土遺物

第4章 白石根岸遺跡



第34図 4号住居跡

4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	覆土	体部破片	①によい赤褐色②灰緑 ③粗砂粒を少量含む	覆口縁か。横位平行沈線の集合施文。地文はR L 縄織文が施される。	請磯b式
2	縄文土器 深鉢	覆土	体部破片	①明赤褐色②灰緑 ③粗砂粒を少量含む	地文はR L 縄文の横位・縦位施文。	
3	礎	南壁 +26cm	完形	<計測値>長11.8、幅8.3、厚1.9、重158.0<石材>砂岩<特徴>側平な三角形形状を施し磨面、加工痕等は見られない。火熱を受ける。		

5号住居跡 (PL.11・23)

位置 Cy-9 床面積 9.5㎡

主軸方位 N-28°-W 壁高 0.25m

重複 1号集石遺構及び1号溝と重なる。

規模と形状 長辺4.40m、短辺3.35mの南北方向に

長い長方形のプランを呈する。西壁側は1~2m

程外側にテラス状の段を有する。

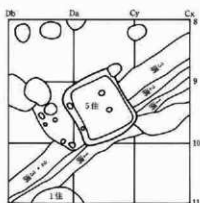
床面 北西から南東方向に傾斜を持つ。

炉又は竈・貯蔵穴 いずれも検出されなかった。

周溝 西壁から北壁にかけて、幅30cm、深さ2～6cm程度の規模で検出された。

柱穴 住居内及び壁際から小ピット11ヶ検出されている。住居内のNo.1～No.6は1間×2間と整然と並ぶが、No.3は1号集石遺構を掘り込んでいることから後出する掘立柱建物跡の可能性が考えられる。また、No.8とNo.9はコーナー部に位置し、No.10・No.11は壁を掘り込み作られる。

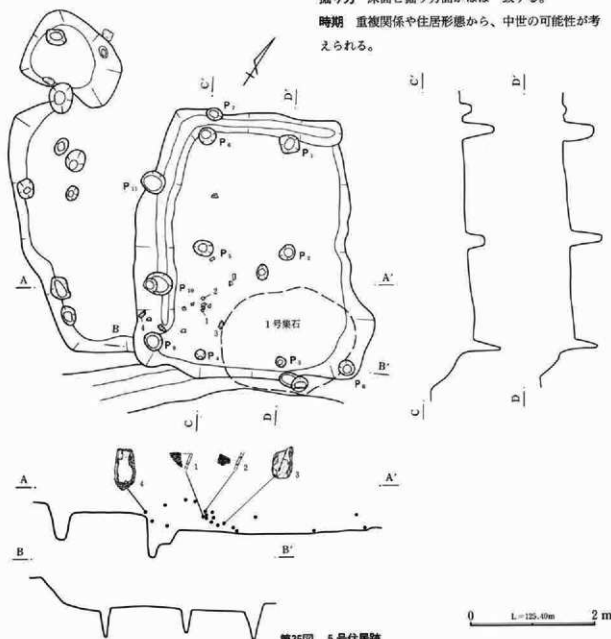
出土遺物 縄文土器及び石器が南西隅部で出土した



が、流れ込みの可能性が考えられる。

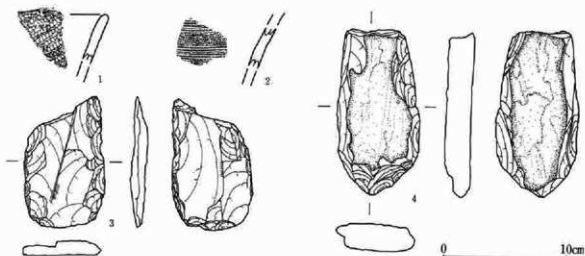
掘り方 床面と掘り方向がほぼ一致する。

時期 重複関係や住居形態から、中世の可能性が考えられる。



第35図 5号住居跡

第4章 白石根岸遺跡



第36図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	南西 +21cm	口縁部 破片	①にぶい地②灰緑 ③繊維を含む	0段多糸のRL縄文を縦位に施文する。	黒浜式
2	縄文土器 深鉢	南西 +30cm	体部破 片	①灰黄褐②灰緑 ③粗砂粒を少量含む	横位平行沈線間に地文のRL細縄文が残る。	諸磯b式
3	石製品 打製石斧	南西 +12cm	欠	<計横径>長10.4、幅6.3、厚1.3、重108.7<石材>熱変成岩<特徴>短冊状を呈すと思 われる。刃部やや磨滅。		
4	石製品 打製石斧?	西壁 +5cm	欠	<計横径>長13.0、幅6.7、厚2.2、重300.0<石材>前背母緑泥片岩<特徴>片側のみ打 痕がみられる。打製石斧の未製品か。刃部など片岩特有の剝離による段を有する。		

6号住居跡 (P.L.11・23)

位置 Ag-14 床面積 (7.9) m²

主軸方位 N-137°-E 壁高 0.10m

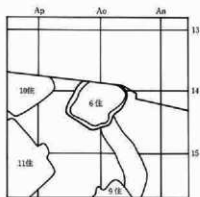
重複 無し。北壁部分調査区域外にのびる。

規模と形状 東西辺3.20m、南北辺3.00mを測り、
やや南北方向に長い横長形状のプランと推定さ
れる。東壁はやや丸味を持ち張り出す。

床面 床面の精査では、かたく踏み締められるなど
の顕著な傾向は確認できなかった。

竈 東壁南東隅寄りに僅かに壁を掘り込み燃焼部を
構築する。袖部分は僅かに地山掘り残しの袖のみが
残り、竈前には天井部材の跡が脱落する。壁面の焼
土化は弱く、火床面は床面より窪む。

貯蔵穴 竈正面西壁際に長径1.1m、短径0.7mの長
円形の土坑を検出した。土坑内より土器片が出土し、
貯蔵穴の可能性が考えられる。

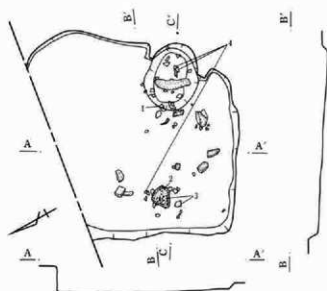


周溝・柱穴 いずれも検出されなかった。

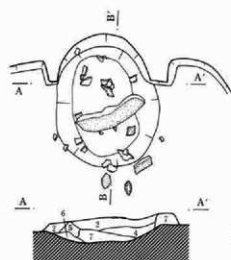
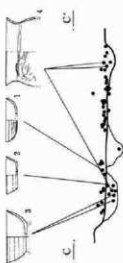
出土遺物 出土遺物は床面直上で出土している。

掘り方 南壁中央部では50cm前後の2基の小ビット
を検出し、入口部の小穴の可能性が考えられる。

時期 出土遺物や住居形態から、8世紀後半と考
えられる。

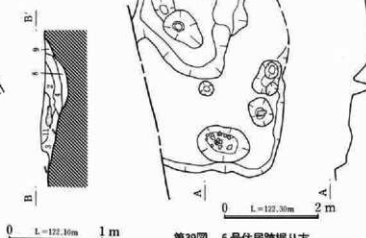


第37図 6号住居跡



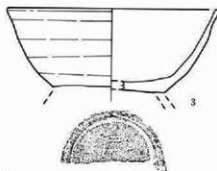
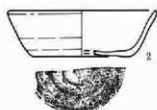
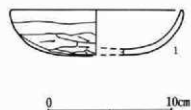
第38図 6号住居跡概

1. 暗褐色土 少量の焼土粒を含む。締まりは乏しい。
2. 暗褐色土 やや暗く、焼土塊を多く含む。
3. 暗褐色土 やや暗く、少量の焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む。
5. 淡褐色土 やや焼土化したローム塊。

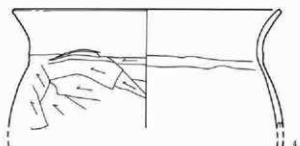


第39図 6号住居跡掘り方

6. 黒褐色土 黒色灰を混入する粘質土。
7. 暗褐色土 1層に似る。
8. 暗褐色土 大型の焼土粒・炭化物を含む。締まりは乏しい。
9. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



第40図 6号住居跡出土遺物(1)



第41図 6号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法 業 (cm)	①色調②硬成③胎土	器形・整形の特徴	備 考
1	土師器 罎	竈+4cm	瓦	口(14.0)	①によい赤褐色②酸化 弱、良好③細砂粒含む	口縁部横ナデ。体部から底部手持ちへう閉り。 内面丁寧なナデ。	
2	須恵器 罎	床下土坑 内+14cm	ほぼ瓦	口(12.0)	①灰②還元弱、良好 ③精選、緻密	輪軸整形、底部回転糸へう調整。断面小豆色。	
3	須恵器 罎	床下土坑 内+5cm	ほぼ瓦	口(16.8)	①灰②還元弱、良好 ③粗砂粒含む	輪軸整形、底部回転糸切り未調整。高台部刺高。	
4	土師器 罎	竈内 +12cm	口縁～ 胴部片	口(21.6)	①地②酸化弱、良好 ③細砂粒含む	口縁部から頸部にかけて横ナデ。胴上端部横方 向、上半部斜方向へう閉り。内面丁寧なナデ。	

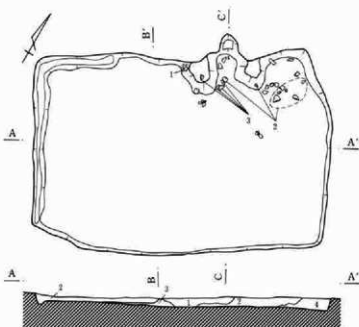
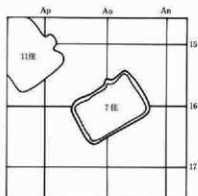
7号住居跡 (P.L.12・23)

位置 Am-15 床面積 12.4㎡

主軸方位 N-30°-W 残存壁高 0.54m

重複 北隅部で溝状遺構と重なる。

規模と形状 長辺4.68m、短辺3.12mを測る東西方向に長い横長長方形形状を呈する。東壁及び南壁部分は削平を受ける。



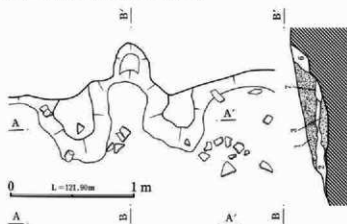
1. 黒褐色土 大型のローム塊を含む。比較的締まりは良好である。
2. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。締まりはやや乏しい。
3. 黒褐色土 均質で含有物も極小、締まりも良好。
4. 黒褐色土 ローム塊を散在状に含む。締まりは良好。

第42図 7号住居跡

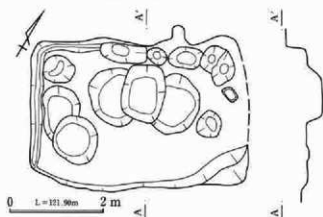
0 L=121.90m 2 m

床面 住居北西寄りがやや高まる。竈前から住居中央部にかけて僅かに踏み締められた面が確認できた。

竈 北壁北東隅寄りに燃焼部を住居内に有する竈が構築される。袖は地山塊の混土を貼り付け作られ、壁面の焼土化は弱い。竈内覆土は焼土混じりの天井部崩落土が見られる。火床面は灰の堆積も薄い。煙道部へは小さな段を持ち立ち上がる。



第43図 7号住居跡竈



第44図 7号住居跡掘り方

貯蔵穴・柱穴 いずれも検出されなかった。

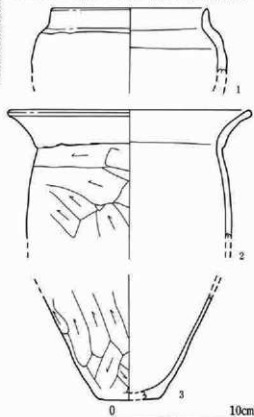
周溝 西壁部から北壁隅部にかけて検出された。

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、竈周辺部のみ集中する。

掘り方 床面下から大小様々な土坑が検出された。

時期 出土遺物や住居形態から、8世紀代と考えられる。

1. 淡褐色土 ロームの焼土化した層、天井部崩落土か。
2. 黒褐色土 ローム塊・焼土粒・炭化物を多く含む。
3. 淡褐色土 1層より焼土化が著しくブロック状に堆積する。下面に黒色灰。
4. 暗褐色土 焼土粒を混入する。
5. 褐色土 ロームの焼土塊が現状に堆積する。
6. 褐色土 焼土粒を多く含む。ローム塊を含む。
7. 黒褐色土 大型のローム塊・黒色灰・焼土粒を含む。



第45図 7号住居跡出土遺物

7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	保存 状態	法 量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	土器 壺	竈左袖 +3cm	口縁～ 胴部片	口(12.6)	①明褐色酸化焰、普通 ③粗砂粒含む	口縁部やや内傾気味に短く立ち上がる。胴部内 表裏面崩落し、調整不明。	
2	土器 壺	北東隅 -2cm	口縁～ 胴部片	口(19.5)	①鈍い褐色酸化焰、良 好③細砂粒僅かに含む	口縁部傾ナダ。やや外反気味に立ち上がる。胴 上端部横方向へラ削り、上半部斜方向へラ削り。	
3	土器 壺	竈左袖 +3cm	胴部～ 底部片	底(4.8)	①褐色酸化焰、普通 ③砂粒含む	底面未調整。胴部縦方向へラ削り、下端部横方 向へラ削り。	

第4章 白石根岸遺跡

8号住居跡 (P.L. 12・14・23・24)

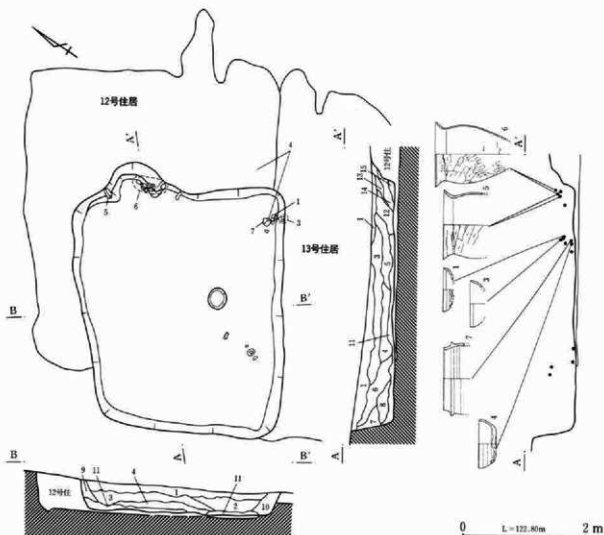
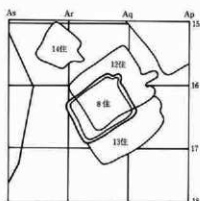
位置 Aq-16 床面積 10.5m²

主軸方位 N-59°-E 残存壁高 0.45m

重複 12・13号住居を掘り込む。

規模と形状 長辺3.66m、短辺3.20mを測り、北壁のやや短い台形状を呈する。

床面 本住居の掘り込みは12号住居床面まで達せず、僅かに上の部分で暗褐色の貼床面を確認した。



1. 暗褐色土 ローム粒、少量の砂粒を含む。比較的均質。
2. 暗褐色土 小型のローム塊を含む。締まりは乏しい。
3. 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む。炭化物も認められる。
4. 暗褐色土 やや明るいローム粒を多く含む。やや粘性を帯びる。
5. 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む。締まりは乏しい。
6. 黒褐色土 ローム塊を少量含む。やや粘性を帯びる。
7. 褐色土 大型のローム塊を主体とする。締まりは乏しい。
8. 暗褐色土 均質で締まりも良好な層。含有物も少ない。

9. 暗褐色土 8層に類似。締まりやや乏しい。
10. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。締まり良好。
11. 黒褐色土 土質均質。粘性を帯び、締まり良好。
12. 暗褐色土 ローム塊、焼土粒を少量含む。締まり乏しい。
13. 暗褐色土 ローム粒を少量、焼土粒・炭化物を微量含む。
14. 暗褐色土 焼土塊を含む。黒色灰も認められる。
15. 黒褐色土 黒色灰を主体とする。

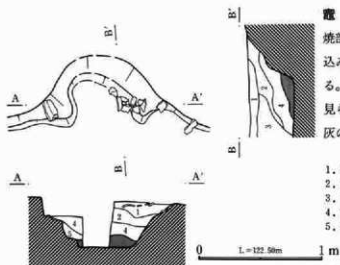
第46図 8号住居跡

貯蔵穴・壁下周溝 いずれも検出されなかった。
 柱穴 住居中央南で、小ピット1基が検出された。
 出土遺物 竈及び兩壁重複部分で土師器・甕等が

出土している。羽釜の所属については不確定である。
 掘り方 掘り方面と床面は一致する。

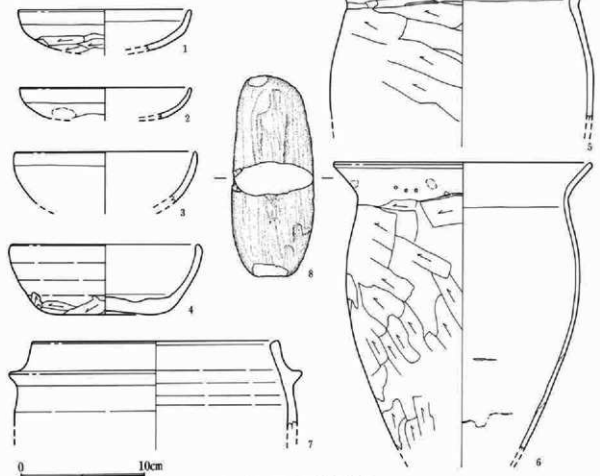
時期 出土遺物や住居形態より8世紀代と考えられる。

竈 東壁北隅寄りの壁を掘り込みU字状を呈する燃焼部が築かれているが、12号住居内の埋設土を掘り込み粘土を貼らずそのまま構築材として利用している。竈の残存状況は悪く、僅かに袖らしき突出部が見られる。燃焼部壁面の焼けは弱い。火床面は薄く灰の堆積が見られるが不明瞭であった。



1. 暗褐色土 ローム粒・微量の焼土粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム小塊を含む。
3. 暗褐色土 焼土塊を含む。やや暗い。
4. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・ローム塊含む。黒色灰少量含む。
5. 暗褐色土 焼土粒含む。

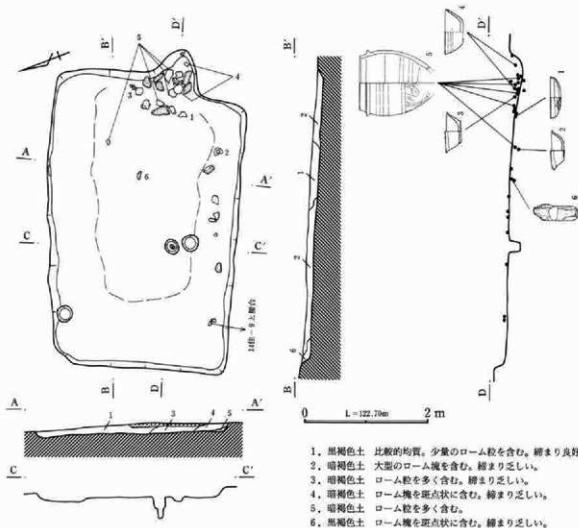
第47図 8号住居跡竈



第48図 8号住居跡出土遺物

8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法量 (cm)	①色調整焼成②粘土 ③砂粒含む	器形・整形の特徴	備考
1	土器器 環	南隅 +16cm	片	口(14.0)	①にぶい②酸化焰 ③砂粒含む	口縁部横ナデ。体部未調整。体部から底部ヘラ削り。	
2	土器器 環	覆土	片	口(13.9)	①酸化焰 ③細砂粒含む	口縁部横ナデ。体部未調整。体部から底部にかへヘラ削り。	
3	土器器 環	南隅 +21cm	破片	口(14.6)	①酸化焰 ②粘土塊含む	表面磨耗。口縁部横ナデ。体部から底部調整不明。	
4	須恵器 鉢	南隅 +5cm	片	口(15.0) 高5.6 底7.8	①灰白雲泥元焰、良好 ②白色砂粒多く含む	輪縁整形。ヘラ切り放し後、底部ヘラ調整。口縁部内湾。底部肥厚。	29住出土遺物と接合
5	土器器 壺	竈左脇 +22cm	口~胴 片	口(22.2)	①酸化焰 ③砂粒含む	口縁部外反。胴上半斜め方向ヘラ削り。頸部ヘラ当痕残る。	
6	土器器 壺	竈+30cm	口縁~ 胴部片	口(20.8)	①酸化焰 ③砂粒含む	口縁部横ナデ。部分的に指摺圧痕残る。胴上部、横及び斜め方向、下半縦方向ヘラ削り。	
7	須恵器 羽蓋	南隅 +6cm	口~胴 片	口(20.0)	①にぶい黄褐色酸化焰 ②細砂粒含む	輪縁整形。断面三角形鈎貼付。口縁から胴部横ナデ。	
8	棒状器	覆土	完形	<計測値>長15.8、幅6.7、厚2.6、重465.9<石材>緑泥片岩<特徴>両端部に打痕みられる。中央片側にエグリ込み状の刺痕あり。			



第49図 9号住居跡

9号住居跡 (P.L. 13・24)

位置 Ap-14 床面積 12.7m²

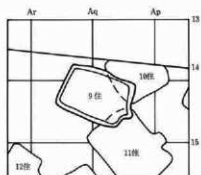
主軸方位 N-110°-E 残存壁高 0.12m

重複 10・11号住居を掘り込む。

規模と形状 長辺4.60m、短辺3.00mを測り、東西に長い縦長方形を呈する。

床面 掘り方面と一致し、地山上面が踏まれ変色し、竈前から中央部にかけて、硬化面を確認した。

竈 東壁南寄りの壁面を掘り込みV字状の燃焼部が構築されている。燃焼部内から竈前方にかけて大礫や土器片が散乱し、構築材の一部と考えられる。また燃焼部両壁面に28cm程の大礫が直立状態で埋め込まれ補強材として利用されている。壁面や底面から



は顕著な焼土・灰面などは確認されなかった。

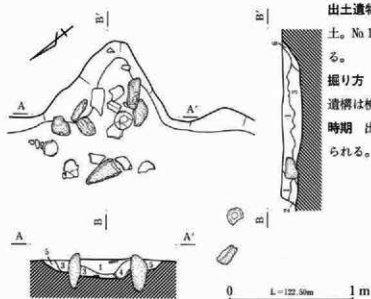
貯蔵穴・壁下周溝 いずれも検出されなかった。

柱穴 3基の小穴が検出された。住居中央南寄りの小穴は掘り込みも深く柱穴と考えられる。

出土遺物 竈内及び周辺部や住居南壁付近から出土。No 1土師器坏は11号住居に所属すると考えられる。

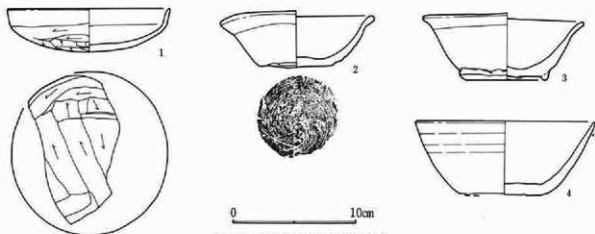
掘り方 床面と掘り方面がほぼ一致し、床面下から遺構は検出されなかった。

時期 出土遺物や住居形態から、10世紀前半と考えられる。



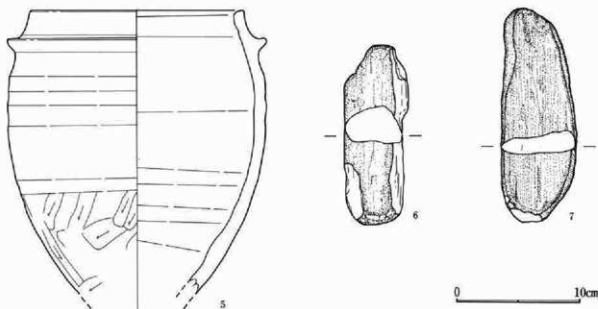
第50図 9号住居跡竈

1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- 1'. 暗褐色土 住居覆土1層に類似。
2. 暗褐色土 比較的均質。やや粘性あり。
3. 暗褐色土 焼土粒・炭化物を含む。
4. 暗褐色土 少量の焼土粒含む。
5. 暗褐色土 ローム塊を含む。締まり良好。
6. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



第51図 9号住居跡出土遺物(1)

第4章 白石根岸遺跡



第52図 9号住居跡出土遺物(2)

9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存 法	量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	土器 環	甕前 -2cm	口縁~ 割断片	口(13.2) 高3.4	①鈍い褐色酸化層、良好 ②粗砂粒含む	口縁部短く直立。内外面横ナデ。胴部から底部にかけて手持らへり削り。内面丁寧ナデ。	11号住居所 属か?
2	須恵器 埴	南隅 -10cm	口縁部 一部欠	口12.3 高4.4 径6.1	①灰黄②還元層、良好 ③砂粒含む	楕圓整形。底部回転糸切り未調整。口縁部僅かに外反。	
3	須恵器 埴	東壁 +4cm	口縁部 一部欠	口12.8 高5.2 径6.4	①淡黄②還元層、良好 ③砂粒含む	楕圓整形。底部回転糸切り未調整。高台部種、貼付後ナデ。口縁部僅かに外反。	
4	須恵器 埴	甕内 +2cm	ほぼ完 形	口(14.3)	①灰黄②酸化層、普通 ③粗砂粒含む	楕圓整形。底部回転糸切り未調整。高台部脱落。	
5	須恵器 羽 釜	甕内 +6cm	口縁~ 割断部	口16.6	①灰黄褐色酸化層、良好 ②粗砂粒含む	楕圓整形。口縁部短く直立。胴部下半部左下方向にへり削り。鈎貼付後、横ナデ。	
6	棒状礫	中央東 -2cm	完形	<計測値>長14.0、幅4.7、厚2.8、重330.0<石材>	緑泥片岩<特徴>	端部打痕見られる。	
7	板状礫	覆土	完形	<計測値>長16.8、幅6.1、厚1.9、重280.0<石材>	緑泥片岩<特徴>	片面、長軸中央部磨面らしき磨耗した凹面見られる。端部打痕あり。	

10号住居跡 (P.L.13・24)

位置 Ap-13 床面積 (6.6) m²

主軸方位 N-54°-E 残存壁高 0.34m

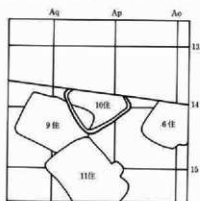
重複 9号住居に南壁部分を掘り込まれる。

規模と形状 長辺3.88m、短辺3.00mを測るが、北壁隅寄り1/6は調査区外に伸び、未調査。

床面 ローム・黒色土の混土を互層に踏み締められた貼床面が貼られる。

竈 未検出。北壁に作られた可能性が考えられる。

貯蔵穴・周溝・柱穴 いずれも検出されなかった。

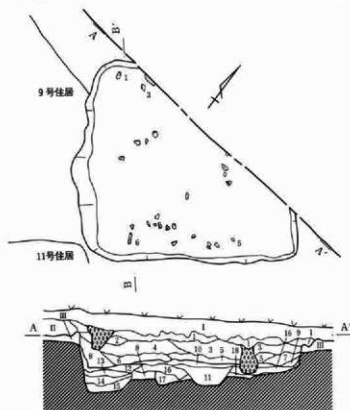


出土遺物 中層から下層に土器片が散乱する。

掘り方 各隅に1m前後の床下土坑が検出され、南壁下では周溝状の掘り込みが検出された。

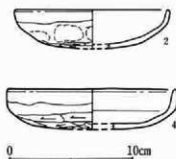
時期 出土遺物や住居形態から、9世紀代と考えられる。

備考 覆土中に多量のローム塊を含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

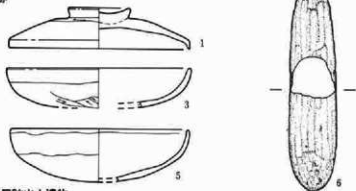


- I. 現耕作土
- II. ローム混じりの耕作土
- III. 軟質ローム
1. 茶褐色土 砂粒が混在する。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。
3. 暗褐色土 ローム塊を少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
5. 暗褐色土 ローム塊を多く含む。
6. 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む。
7. 黄褐色土 大型のローム塊を含む。
8. 暗褐色土 大型のローム塊を含む。
9. 暗褐色土 ローム粒を主体とする。締まり良好。
10. 粘床 黒色土・ロームを糊状に粘る。上面は硬く締まる。
11. 黒褐色土 床下土坑覆土。単層で粘土・炭化物を含む。
12. 暗褐色土 床下土坑覆土。ローム粒を多く含む。

第53図 10号住居跡



第55図 10号住居跡出土遺物



第54図 10号住居跡掘り方

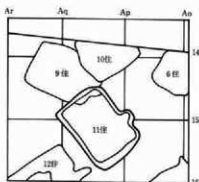
13. 暗褐色土 床下土坑覆土。小型のローム塊を含む。
14. 黄褐色土 床下土坑覆土。ローム塊を多く含む。
15. 黄褐色土 床下土坑覆土。ローム塊主体。
16. 暗褐色土 小型のローム塊・粒に暗褐色土の混土。
17. 黒褐色土 比較的均質。
18. 黄褐色土 大型のローム塊、少量の暗褐色土の混土。

第4章 白石根岸遺跡

10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存 法 量 (cm)	①色調②構成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 蓋	北西 +12cm	片 □(14.6)	①灰白②還元焰、良好 ③砂粒、粘土粒含む	縦楕圓形。口縁部端部内屈。頂部回転ヘラ削り。 底部ボタン状を呈する。	
2	土師器 坏	覆土	片 □(12.6)	①薄い赤褐色酸化焰、 良好③細砂粒僅かに含	口縁部内外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。体 部未調整部分見られる。内面ナデ。	
3	土師器 坏	北西 +6cm	ほぼ片 □(15.0)	①よい褐色酸化焰、 良好③細砂粒僅かに含	口縁部内外面横ナデ。 口縁部内外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。体 部未調整部分見られる。内面ナデ。	
4	土師器 坏	覆土	片 □(13.4)	①褐色酸化焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	口縁部内外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。体 部未調整部分見られる。内面ナデ。	
5	土師器 坏	南東 +5cm	ほぼ片 □(14.2)	①薄い橙黄色酸化焰、良 好③細砂粒僅かに含む	口縁部内外面横ナデ。体部未調整。底部手持ち ヘラ削り。内面網毛状工具による横ナデ。	
6	棒状礫	南東 +1cm	完形 <計測値>長16.5、幅3.9、厚3.2、重346.0<石材>緑泥片岩<特徴>つかつ節状を呈し、 両端部打収られる。			

11号住居跡 (P.L. 14・24・25)



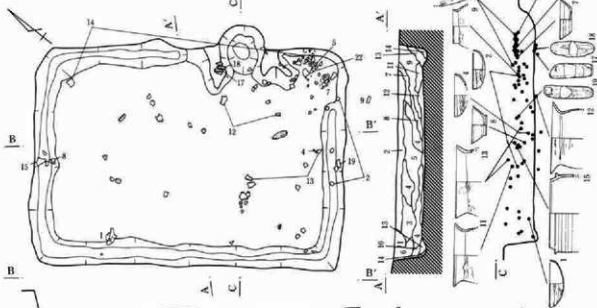
位置 Ap-15 床面積 12.0㎡

主軸方位 N-55°-E 残存壁高 0.40m

重複 9号住居に北壁隅部を掘り込まれる。

規模と形状 長辺4.85m、短辺3.40mを測る。南北
に長い横長長方形を呈する。

床面 中央部から竈前にかけて踏み締められる。



- 黒褐色土 ビット状遺構埋土。
- 暗褐色土 ローム粒、砂粒を多く含む。
- 暗褐色土 小型のローム塊を含む。
- 明褐色土 小型のローム塊を多量に含む。炭化物を少量含む。
- 黒褐色土 小型のローム塊少量含む。
- 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 明褐色土 ローム粒を多量に含む。微量の焼土粒認められる。
- 黒褐色土 ローム塊・炭化物・黒色灰を含む。焼土粒わずかに含む。
- 暗褐色土 焼土化したローム粒を多く含む。
- 黒褐色土 均質。粘性を帯びる。
- 黒褐色土 大型のローム塊・炭化物を含む。
- 暗褐色土 ローム塊を多く含む。やや粘質。
- 暗褐色土 ローム塊を斑点状に含む。
- 黒褐色土 小型のローム塊を含む。

第56図 11号住居跡

第2節 検出された遺構・遺物

竈 東壁南寄り壁面をU字状に掘り込み燃焼部を構築する。袖の芯に地山を薄く掘り残し、全体にローム混土を貼り付け作られる。燃焼部内には構築材の焼土化したローム塊が崩落状態で検出された。

貯蔵穴・柱穴 いずれも検出されなかった。

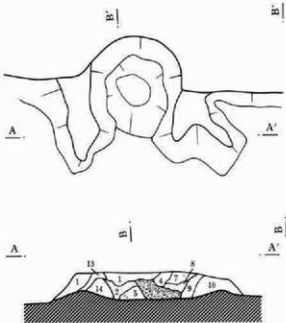
周溝 幅20cmの規模で、東隅部を除き全周する。

出土遺物 覆土全体に土器片が分布するが、東隅部に特に集中する。No.8・15・16は9号住居に所属すると考えられる。

掘り方 住居中央部に2m×1.3m、深さ30cm程の床下土坑と南壁下に掘り込みが見られる。

時期 出土遺物や住居形態から、8～9世紀代と考えられる。

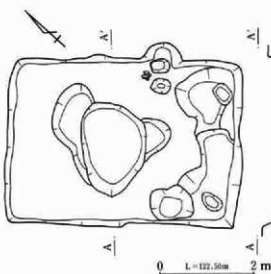
備考 覆土中に多量のローム塊を含み、また東壁寄りでは中層に竈構築材と思われるローム塊、焼土等が見られ、竈を壊しながら人為的に埋め戻されたと考えられる。



1. 暗褐色土 焼土化したローム塊を含む。締まりが悪い。
2. 赤褐色土 焼土塊を多く含む。炭化物も認められる。
3. 黒褐色土 少量の焼土粒を含む。
4. 黒褐色土 焼土塊、炭化物を含む。
5. 淡黄褐色土 焼土化したローム塊を主体とする。構築材崩落土。
6. 赤褐色土 焼土塊・ローム塊を主体とする。構築材崩落土。
7. 淡黄褐色土 5層に類似。炭化物認められる。構築材崩落土。
8. 暗褐色土 小型のローム塊、炭化物を多く含む。
9. 暗褐色土 砂粒含む。締まり良く、袖の一部か。
10. 暗褐色土 ローム塊を混在。袖と思われる。
11. 赤褐色土 焼土粒・ローム粒を多く含む。
12. 暗褐色土 焼土塊、炭化物を多く含む。
13. 暗褐色土 ローム粒、炭化物を含む。
14. 暗褐色土 ローム塊を含む。袖の崩落土。

0 L=122.30cm 1 m

第57図 11号住居防竈

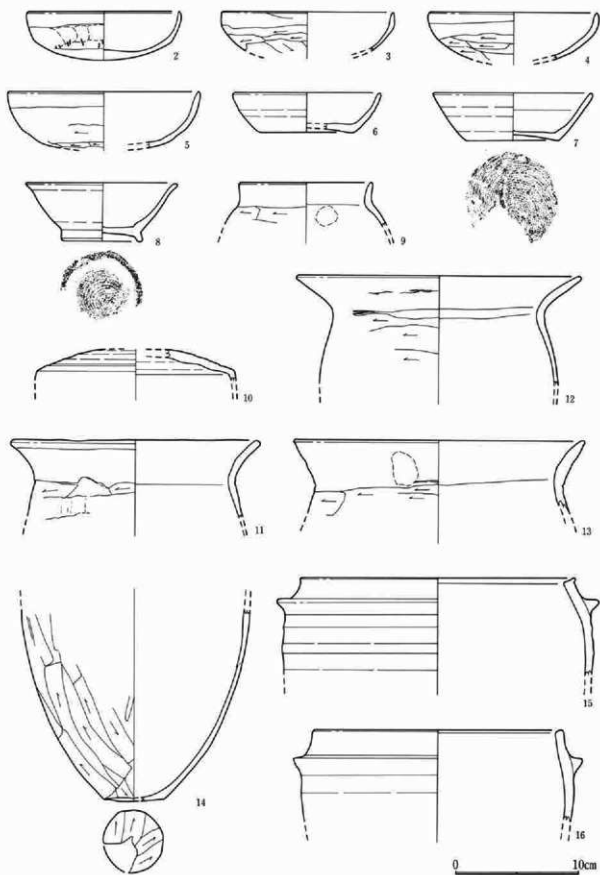


第58図 11号住居跡掘り方

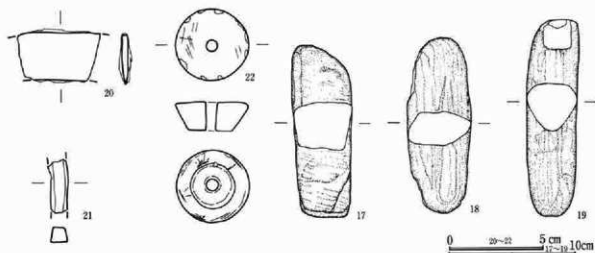


第59図 11号住居跡出土遺物(1)

第4章 白石根岸遺跡



第60図 11号住居跡出土遺物(2)



第61図 11号住居跡出土遺物(3)

11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法 量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	土師器 坏	西壁 +7cm	口縁部 一部欠	□14.8 高4.6	①にぶい橙②酸化焰、 良好③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ、直立。体部から底部手持ちへラ削り。	
2	土師器 坏	南壁 +26cm	写	□(12.2) 高3.8	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	口縁部内外面横ナデ。体部未調整。底部手持ちへラ削り、内面平底状を呈する。内面ナデ。	
3	土師器 坏	覆土	底部欠 損	□14.0 高4.0	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ、直立。体部から底部手持ちへラ削り。内面ナデ。	
4	土師器 坏	東壁 +9cm	口縁部 破片	□(13.6)	①にぶい梅②酸化焰、 良好③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。体部僅かに未調整部分見られる。底部手持ちへラ削り。内面ナデ。	
5	土師器 坏	南東隅 +31cm	口縁部 破片	□15.4	①黄い梅②酸化焰、良 好③細砂粒僅かに含む	口縁部内外面横ナデ。体部未調整。底部手持ちへラ削り。内面ナデ。	
6	須恵器 坏	覆土	写	□(11.8) 高 3.1 底(7.4)	①灰②還元焰、良好 ③砂粒含む	楕圓整形。底部回転糸切り未調整。底面自然軸付着。断面小豆色。	
7	須恵器 坏	南東隅 +27cm	写欠損	□(12.7) 高3.7 底7.3	①黒②還元焰、良好 ③砂粒含む	楕圓整形。底部回転糸切り未調整。口縁部から体部直線的に開く。	
8	須恵器 坏	北壁 +16cm	写	□12.2 高4.6 底6.4	①淡黄褐色②還元焰、良 好③細砂、粘土粒含む	楕圓整形。底部回転糸切り未調整。高台部貼付後横ナデ。	
9	土師器 坏	住居外	口縁部 破片	□(19.6)	①明赤褐色②酸化焰、良 好③砂粒含む	口縁部短く直立、横ナデ。胴部上端部横方向へラ削り。	
10	須恵器 坏	覆土	体部へ 口縁部 破片	□一 高一 底一	①灰②還元焰、良好 ③砂粒含む	楕圓整形。口縁部内屈。頂部回転へラ削り。断面灰色と黄褐色の縞状を呈する。	
11	土師器 坏	南西 +34cm	口縁部 破片	□(19.8)	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒含む	口縁部横ナデ、外反。胴部上端部横方向へラ削り。	
12	土師器 坏	南東隅 +9cm	口縁部 破片	□(22.6)	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒含む	口縁部横ナデ、「く」の字に外傾。胴部上半部斜縦方向へラ削り。内面丁寧ナデ。	
13	土師器 坏	南東隅 +41cm	口縁部 破片	□(23.4)	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒含む	口縁部横ナデ、外反。胴部上端部横方向へラ削り。	
14	土師器 坏	南東隅 +33cm	胴部へ 底部片	底(4.8)	①梅②酸化焰、良好 ③砂粒含む	胴下半部、斜縦方向へラ削り。底面へラ削り。内面丁寧ナデ。	
15	須恵器 坏	北壁 +31cm	口縁部 破片	□(22.0)	①灰黄②還元焰、良好 ③砂粒含む	口縁部短く直立。口縁部頂部ナデにより平直面作る。胴部貼付、断面三角形状を呈する。	
16	須恵器 坏	覆土	口縁部 破片	□(20.0)	①にぶい黄褐色②酸化 焰、良好③細砂粒含む	口縁部短く直立。口縁部頂部ナデにより平直面作る。胴部貼付、断面三角形状を呈する。	
17	棒状礫 電圧地土		写	<計測値>長13.5、幅4.7、厚3.7、重400.0<石材>点文割雲母片岩<特徴>角柱状。		こもあみ石	
18	棒状礫 電圧地土		写	<計測値>長13.8、幅5.2、厚3.7、重320.0<石材>緑泥片岩<特徴>両端部打痕。		こもあみ石	
19	棒状礫 電圧地土		写	<計測値>長15.5、幅4.0、厚3.7、重356.0<石材>雲母片岩<特徴>片端部打痕。		こもあみ石	
20	鉢	覆土	写	<計測値>長4.4、幅2.5、厚0.3、重13.2<特徴>両端欠損。			
21	釘	覆土	写	<計測値>長2.8、幅0.9、厚0.8、重5.9<特徴>両端部欠損、角柱状を呈する。			
22	石製品 紡車	南東隅 +28cm	写	<計測値>上3.8、下2.4、厚1.4、重32.1、円孔径0.5<石材>磨石<特徴>断面台形を呈する。裏面、円孔周辺部磨耗。			

第4章 白石根岸遺跡

12号住居跡 (P.L. 14・15・25・26)

位置 Aq-16 床面積 14.7㎡

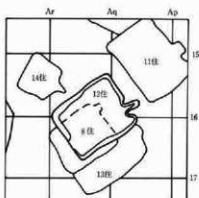
主軸方位 N-59°-E 残存壁高 0.45m

重複 8号住居に壊され、13号住居を掘り込む。

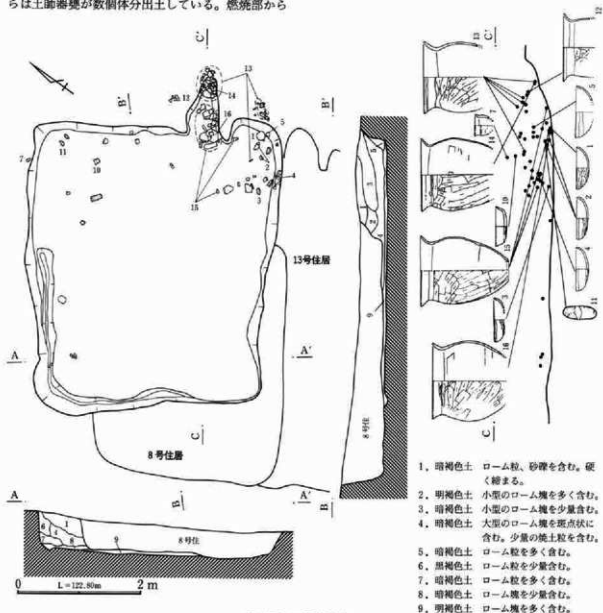
規模と形状 長辺4.46m、短辺3.80mを測る。東西に長い縦長長方形を呈する。

床面 ローム塊を含む褐色土を床面として貼る。

竈 東壁南隅寄りの壁を掘り込み住居外に燃焼部が構築される。右袖は隅部が張り出すために、地山掘り残し部分が袖状になる。燃焼部内の壁面の焼けは弱く、火床面には灰の堆積が見られる。燃焼部内からは土師器甕が数個体分出土している。燃焼部から



煙道部へは緩やかに変換し、煙道部には土師器甕が埋置され煙道に利用されている。



1. 暗褐色土 ローム粒、砂礫を含む。硬く締まる。
2. 明褐色土 小型のローム塊を多く含む。
3. 暗褐色土 小型のローム塊を少量含む。
4. 暗褐色土 大型のローム塊を斑点状に含む。少量の焼土粒を含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
6. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
7. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
8. 暗褐色土 ローム塊を少量含む。
9. 明褐色土 ローム塊を多く含む。

第62図 12号住居跡

第2節 検出された遺構・遺物

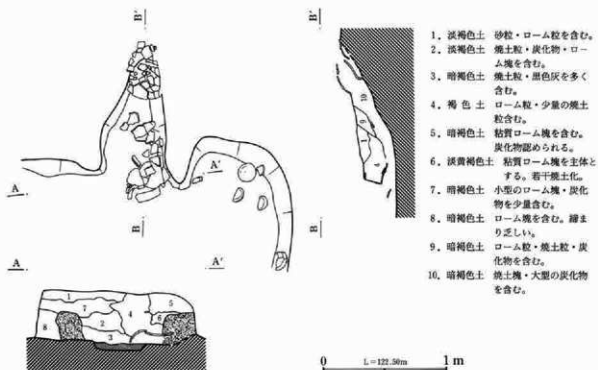
貯蔵穴・柱穴 いずれも検出されなかった。

周溝 北壁下中央部から西壁下にかけて乱れた状態で検出された。

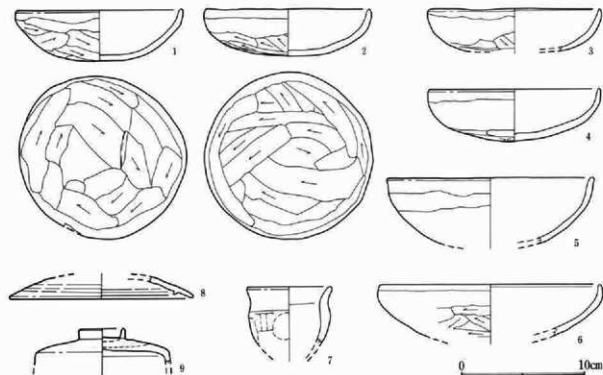
出土遺物 竈内及び周辺部にかけて集中する。

掘り方 南壁両隅と住居北寄りに土坑を検出した。

時期 出土遺物や住居形態から、8～9世紀代と考えられる。

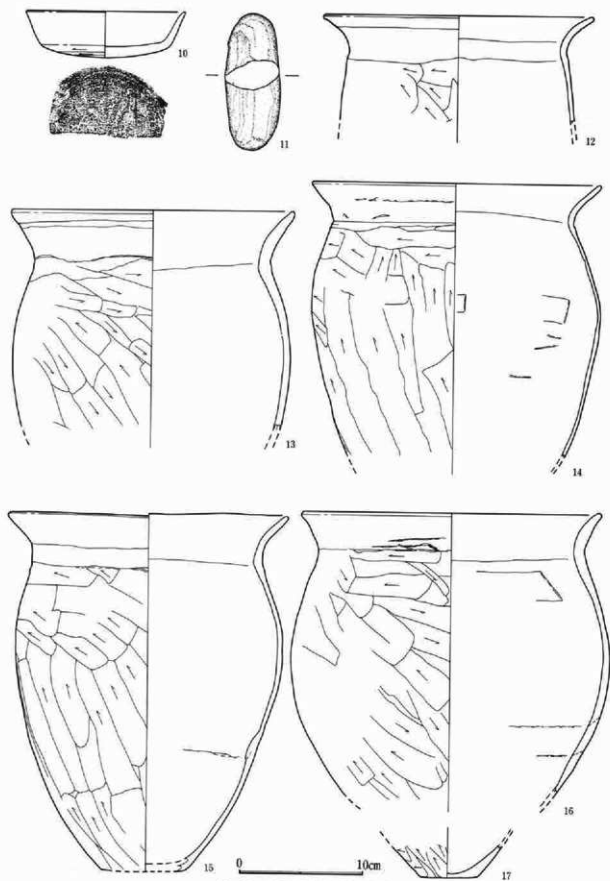


第63図 12号住居跡竈



第64図 12号住居跡出土遺物(1)

第4章 白石根岸遺跡



第65図 12号住居跡出土遺物(2)

12号住居跡出土遺物観察表

番号	器類	出土位置 (cm)	残存 法	量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	土師器 土師器 土師器	東隅 +2cm	完形	□13.6 高4.0	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。体部一部未調整。底面手持ちへ削り。	
2	土師器 土師器	東隅 +4cm	完形	□13.0 高3.8	①にぶい橙②酸化焰、 良好③細砂粒含む	口縁部僅かに内湾す。内外面横ナデ。体部一部未調整。底部手持ちへ削り。	
3	土師器 土師器	東隅 +8cm	口縁部 破片	□(13.8)	①にぶい橙②酸化焰、 良好③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。体部一部未調整。底部手持ちへ削り。	
4	土師器 土師器	東隅 +22cm	3/4欠	□13.2 高4.0	①にぶい橙②酸化焰、 良好③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。体部一部未調整。底部やや平底状を呈する。手持ちへ削り。	
5	土師器 土師器	東隅 +28cm	口縁部 破片	□(16.6)	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。体部一部未調整。底部手持ちへ削り。	
6	土師器 土師器	覆土	口縁部 破片	□(19.8)	①にぶい赤褐色②酸化焰 良好③細砂粒僅かに含	口縁部内外面横ナデ。体部一部未調整。底部手持ちへ削り。	
7	土師器 小型壺	住居外 口へ削り	□(6.6)	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部から頸部にかけて横ナデ。胴部横及び斜め方向へ削り。内面丁寧ナデ。		
8	須恵器 須恵器	覆土	口縁部 破片	□(15.0)	①灰②還元焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	楕圓形。内面シャープなカエリを有する。	
9	須恵器 須恵器	覆土	瓦	楕3.5	①灰オリブ②還元焰 良好③白・黒色細粒含	楕圓形。口縁部垂直に屈曲。表面自然輪付着。リング状紐。器内厚い。	
10	須恵器 土師器	南付近 +28cm	瓦	□(12.8)	①黄灰②還元焰、良好 ③白色細粒混じる	楕圓形。底部凹陥へ削り調整。底面広く、厚みを持つ。	
11	棒状鏢	北隅 +9cm	完形	<計測値>長10.8、幅4.5、厚2.3、重189.0<石材>磨き得る剥片弱く特徴>両端部打痕みられる。			
12	土師器 壺	住居外 口へ削り	瓦	□(21.6)	①にぶい黄色②酸化焰 ③細砂粒含む	口縁部外反、頸部にかけて横ナデ。胴上平及び斜め方向へ削り。	
13	土師器 壺	壺内 +6cm	口縁部 割部	□(22.6)	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部から頸部にかけて横ナデ。縦やかに外反する。胴上部横方向、中位斜方向へ削り。	
14	土師器 壺	壺内 +6cm	口縁部 割部5%	□22.6	①明赤褐色②酸化焰、良 好③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。胴上部横方向、上半部斜方向、下半部縦方向へ削り。	
15	土師器 壺	壺内 ±0	瓦	□121.9 高28.6 底(6.8)	①明赤褐色②酸化焰、良 好③細砂粒含む	口縁部から頸部にかけて横ナデ。縦やかに外反する。胴上半部斜方向、下半部縦方向へ削り。	
16	土師器 壺	壺内 +4cm	瓦	□(24.2)	①にぶい橙②酸化焰、 良好③細砂粒含む	口縁部内外面横ナデ。胴部球形状を呈する。胴上半部斜方向へ削り。	
17	土師器 壺	覆土	底部瓦	底4.7	①明赤褐色②酸化焰 ③砂粒含む	底面へ削り。胴下端、斜方向へ削り。	

13号住居跡 (P L. 14・15・27)

位置 Aq-16 床面積 (9.5) m²

主軸方位 N-58°-E 残存壁高 0.20m

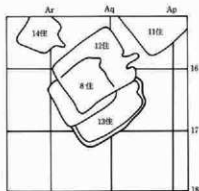
重複 大半を8・12号住居に掘り込まれる。

規模と形状 長辺5.40m、短辺(2.00)mの東西に長い縦長長方形形状を呈すると考えられる。

床面 ローム塊を多量に含む暗褐色の粘床面確認。

竈 東壁南側寄りに、住居内に燃焼部を有する竈が構築される。左袖部分は12号住居に壊される。残存する右袖は地山を芯に利用し、ローム塊の混土を貼り付け構築されている。覆土中には焼土塊や炭化物塊が多く含まれ破壊された状況が伺える。火床面は床面と同レベルであり灰の堆積が見られた。

貯蔵穴・周溝・柱穴 いずれも検出されなかった。

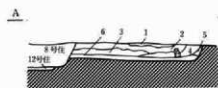
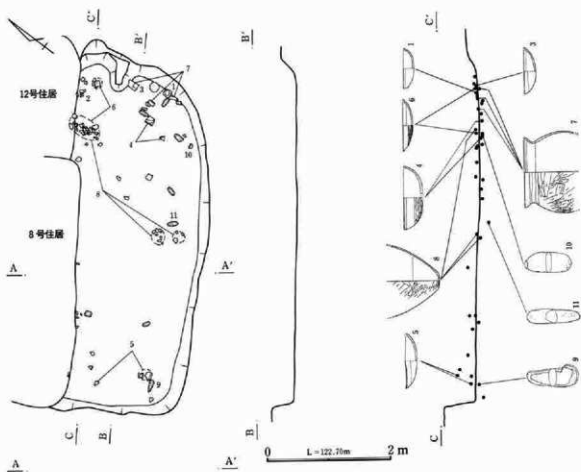


出土遺物 甕右袖から前方にかけて遺物が集中する。

掘り方 小穴が数基検出されたのみである。

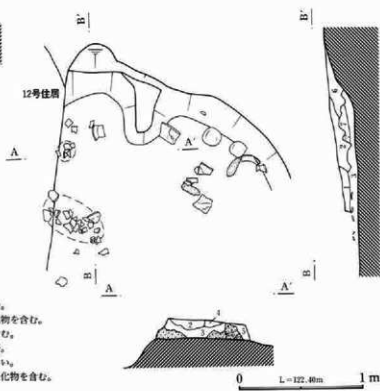
時期 出土遺物や住居形態から、8世紀代と考えられる。

第4章 白石根岸遺跡



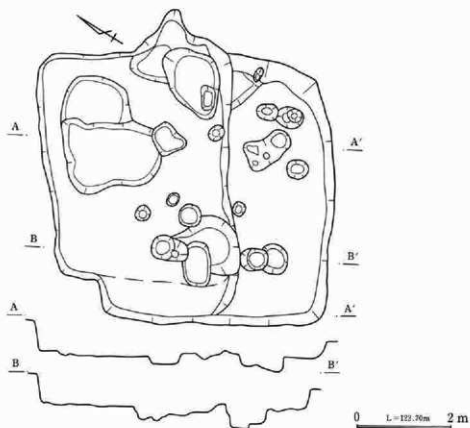
1. 暗褐色土 少量のローム粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
3. 黒褐色土 大型のローム塊を含む。
4. 黒褐色土 比較的均質。やや粘質。
5. 暗褐色土 ローム粒多く含む。
6. 暗褐色土 ローム塊を多く含む。

第66図 13号住居跡

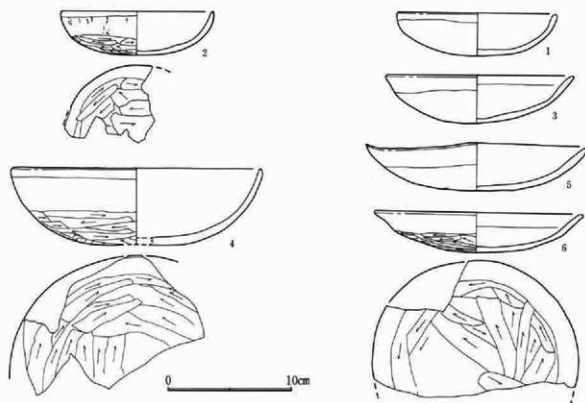


1. 赤褐色土 淡褐色土塊と焼土塊を含む。
2. 淡褐色土 焼土化したローム塊、炭化物を含む。
3. 黒褐色土 大型の炭化物、焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 焼土粒を含む。細まり良好。
5. 暗褐色土 焼土塊を含む。細まり乏しい。
6. 褐色土 赤味を帯びる。焼土塊・炭化物を含む。
7. 褐色土 大型の焼土塊を含む。

第67図 13号住居跡電

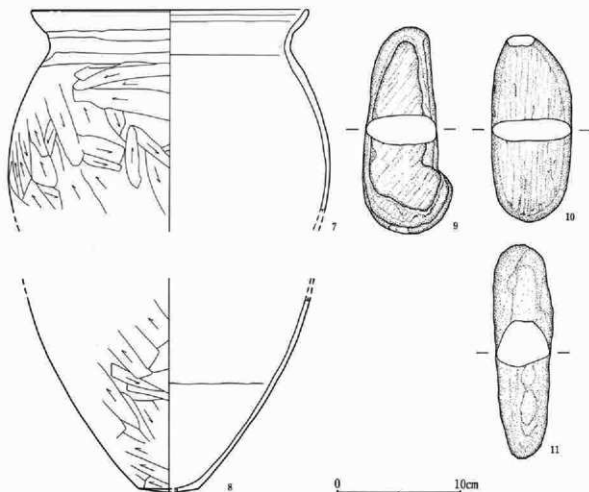


第68図 13号住居跡掘り方



第69図 13号住居跡出土遺物(1)

第4章 白石根岸遺跡



第70図 13号住居跡出土遺物(2)

13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法 量 (cm)	①色調②構成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	土器 壺	東壁 +2cm	完形	口12.6 高3.4	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒含む	口縁部横ナゲ。体部未調整。底部手持ちヘラ削り。内面ナゲ。	
2	土器 壺	覆土	口縁部 破片	口(12.2) 高(3.4)	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	口縁部内外面横ナゲ。体部未調整。底部手持ちヘラ削り。	
3	土器 壺	東壁 +2cm	完形	口14.7 高3.8	①明赤褐②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部短く外反。内外面横ナゲ。底部手持ちヘラ削り。	やや盤状気味
4	土器 壺	東隅 -4cm	片	口(19.7)	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒僅かに含む	口縁部横ナゲ。体部未調整。底部手持ちヘラ削り。内面丁寧ナゲ。	
5	土器 壺	南隅 +28cm	片	口(17.7) 高(3.8)	①橙②酸化焰、普通 ③砂粒含む	口縁部短く外反。内外面横ナゲ。底部手持ちヘラ削り。表面磨耗。体部弱い稜をもつ。	
6	土器 壺	壺+4cm	片	口(16.5) 高3.7	①橙②酸化焰、良好 ③細砂粒含む	口縁部短く外反。内外面横ナゲ。底部手持ちヘラ削り。体部弱い稜をもつ。	
7	土器 壺	東隅 -2cm	片	口(22.2)	①橙②酸化焰、良好 ③砂粒、粘土粒含む	口縁部内外面横ナゲ。頸部強い横ナゲ。胴上端部横方向、上半部斜方向ヘラ削り。内面ナゲ。	
8	土器 壺	南付近 +3cm	胴部～ 底面片	底(5.0)	①明赤褐②酸化焰、普通 ③細砂粒含む	胴部斜方向ヘラ削り。底面ヘラ削り。内面ナゲ。	
9	棒状 礫	東隅-5cm	完形	<計測値>長16.2、幅6.1、厚2.2、重400.0<石材>黒色片岩<特徴>板状を呈する。			こもあみ石
10	棒状 礫	東隅-6cm	完形	<計測値>長14.6、幅6.4、厚1.7、重319.0<石材>黒母石英片岩<特徴>板状を呈する。			こもあみ石
11	棒状 礫	南-15cm	完形	<計測値>長16.8、幅4.4、厚3.3、重430.0<石材>緑色片岩<特徴>柱状を呈する。			こもあみ石

14号住居跡 (P L, 15・27・28)

調査時点では31号土坑として扱われていたが、東壁部分に焼土、灰等を含む張り出し部分が見られ、これを竈の残骸と考え、報告書では竪穴住居跡として扱うこととした。

位置 Ar-15 床面積 5.0m²

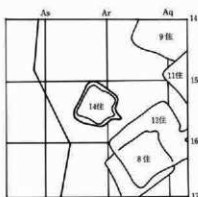
主軸方位 N-110°-E 残存壁高 0.20m

重複 無し。

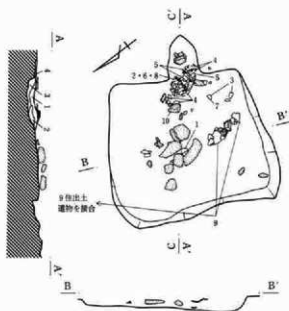
規模と形状 全体に削平を受け、西壁と南壁部分が僅かに残り、東壁部分については竈の状況より推定した。長辺2.60m、短辺2.20mを測り、やや隅丸の方形を呈する。

床面 掘り方面と一致し、多少の凹凸見られる。

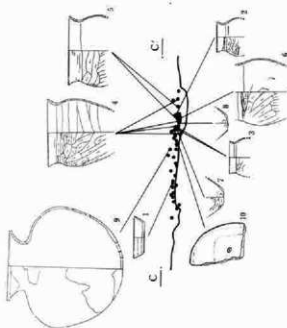
竈 火床面のみ確認できず、更に焼土、炭化物の範囲からの推定である。位置は東壁ほぼ中央部の壁面を掘り込み燃焼部が構築されていたと考えられる。火床面は床面と同レベルであり焼土、炭化物を僅かに含む。竈内から前方にかけて礫が散乱し、土師器破片が多量に出土している。



貯蔵穴・周溝・柱穴 いずれも検出されなかった。
 出土遺物 住居中央部に20~40cm大の礫群と9号住居と接合する須恵器大甕が出土している。
 掘り方 床面を共有する。
 時期 出土遺物や住居形態から、9世紀代と考えられる。

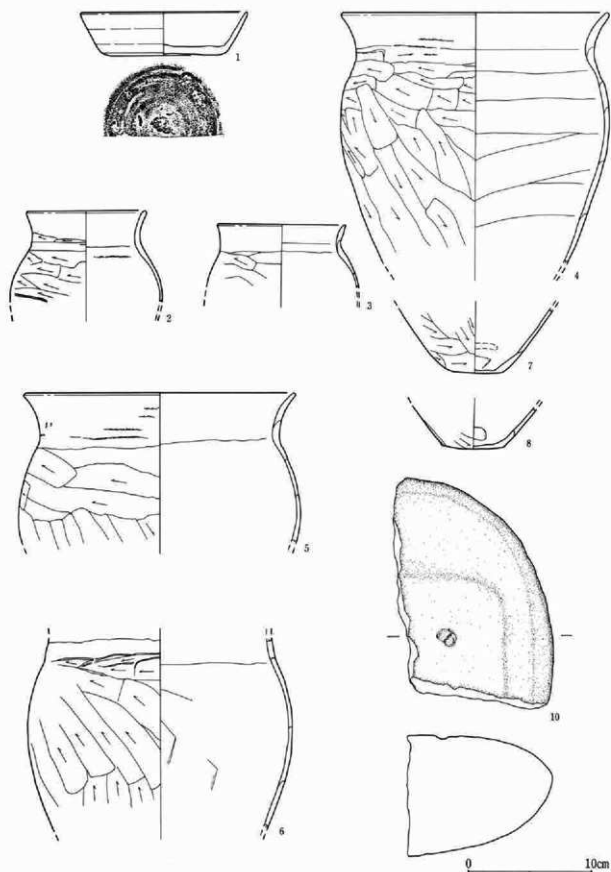


1. 暗褐色土 焼土粒、炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 大型のローム塊を含む。締まり足りない。
3. 黄褐色土 ローム塊主体の層。締まり足りない。
4. 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒を多く含む。

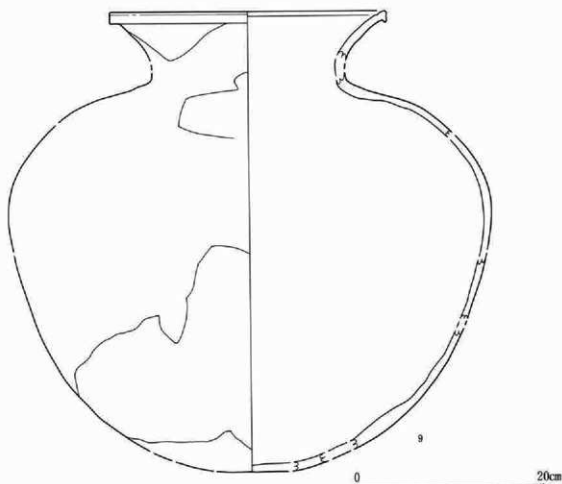


第71図 14号住居跡

第4章 白石根岸遺跡



第72圖 14号住居跡出土遺物(1)



第73図 14号住居跡出土遺物(2)

14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	中央 +5cm	片	口(13.4) 底3.5 底8.7	①灰白②還元焰 ③白色細粒含む	楕圓整形。底部回転ヘラ切り摩し。	
2	土師器 甕	竈前 +14cm	口~胴 破片	口(9.6)	①明赤褐色酸化焰 ③細砂粒含む	口縁部短く外反、横ナデ。頸部下、横方向ヘラ削り。	
3	土師器 小型甕	南隅 +10cm	口~胴 片	口10.3	①橙②酸化焰 ③細砂粒含む	口縁部短く僅かに外反、横ナデ。胴上部横及び斜め方向ヘラ削り。	
4	土師器 甕	竈前 +10cm	口~胴 片	口21.4	①にぶい黄褐色酸化 ③細砂粒含む	口縁部緩やかに外反、頸部にかけて横ナデ。頸部ヘラ当直胴上半横及び斜方向、下半斜縦方向ヘラ削り。	
5	土師器 甕	竈内 +14cm	口~胴 片	口(21.5)	①にぶい褐色酸化焰 ③細砂粒含む	口縁部緩やかに外反、頸部にかけて横ナデ。頸部ヘラ直。胴上半横方向、中位斜縦方向ヘラ削り。	
6	土師器 甕	竈内 +10cm	胴~底 片	口一 高一 底一	①橙②酸化焰 ③細砂粒含む	頸部横ナデ。胴上半横方向ヘラ削り。胴上半斜方向ヘラ削り、下半縦方向ヘラ削り。	
7	土師器 甕	南付近 +10cm	胴~底 片	底4.2	①橙②酸化焰 ③細砂粒含む	底面ヘラ削り。胴下端斜め方向ヘラ削り。内面丁寧ナデ。	
8	土師器 甕	竈前 +10cm	胴~底 片	底5.0	①にぶい褐色②酸化焰 ③細砂粒含む	底面ヘラ削り。胴下端斜め方向ヘラ削り。	
9	須恵器 甕	南付近 +9cm	口~底 片	口(29.0)	①にぶい褐色②酸化焰 ③白色細粒・砂粒含む	器表面全体剥落し、胴下半部にナデ直見られる。	
10	石製器 石皿	中央東 +4cm	片	<計測値>長18.7、幅12.6、厚10.1、重3345.0<石材>粗粒安山岩<特徴>1ヶ所凹み見られ周囲がやや磨耗する。			

2. 土 坑

1号土坑 (P.L.16・28)

Db-12グリッド内に位置し、主軸方位はN-40°-Eに傾く。規模は、長辺2.2m、短辺1.6m、深さ1.1mを測る。形状は、楕円形を呈する。重複は無し。壁面は一部やや決り込まれる。埋土は人為的な様相を呈する。出土遺物には、諸磯c式土器片がある。

6号土坑 (P.L.16・28・29)

Da-15グリッド内に位置し、主軸方位はN-49°-Eに傾く。規模は、長辺2.3m、短辺1.8m、深さ80cmを測る。形状は不整楕円形を呈する。重複は無し。壁面は緩やかに立ち上がり、底面も舟底状を呈

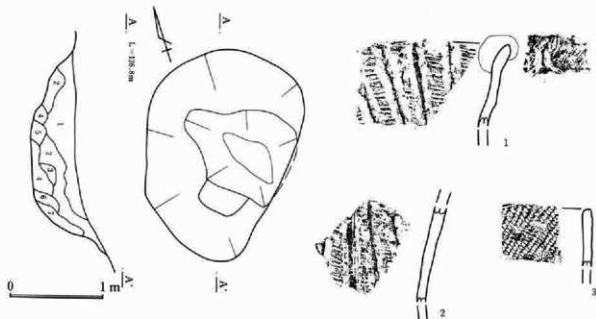
する。出土遺物には、諸磯c式土器片がある。

8号土坑 (P.L.28)

Da-11グリッド内に位置し、主軸方位はN-40°-Wに傾く。規模は、長辺1.7m、短辺1.2m、深さ48cmを測る。形状は長円形を呈する。重複は北側を溝に切られる。

18号土坑 (P.L.17・28)

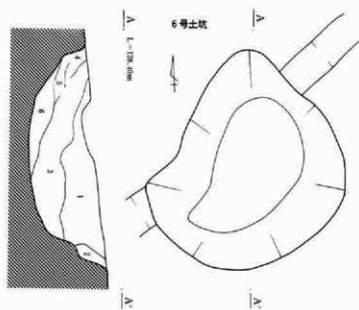
Df-18グリッド内に位置し、主軸方位はN-23°-Eに傾く。規模は、長辺2.4m、短辺1.3m、深さ41cmを測る。形状は、アメーバ状を呈する。重複は無し。



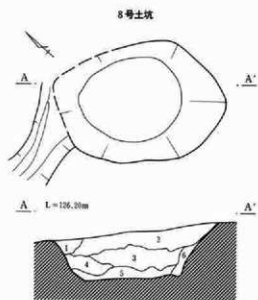
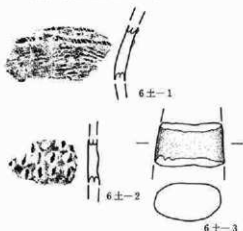
1. 暗褐色土 小型のローム塊・粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム塊・黒色土塊の形状地塊。微量の炭化物を含む。
3. 暗褐色土 均質でブロック状の堆積を呈する。
4. 黒褐色土 少量のローム塊、炭化物を含む。
5. 暗褐色土 3層と同様にブロック状の地塊。少量のローム塊含む。
6. 明褐色土 Y Pの混入するローム塊を多く含む。
7. 黄褐色土 ローム塊を主体とする。

第74図 1号土坑跡平面図及び出土遺物

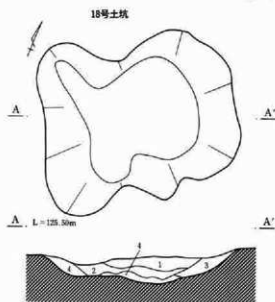
第2節 検出された遺構・遺物



1. 褐色土 ローム粒を多く含む。
 2. 明褐色土 ローム塊を含む。
 3. 暗褐色土 褐色土と暗褐色土の斑状堆積。
 4. 明褐色土 ローム粒と少量の炭化物を含む。
 5. 明褐色土 ローム粒を多く含む。
 6. 暗褐色土 褐色土塊を多く含む。
- 備考 全体に締まりは乏しい。



1. 黄褐色土 ローム粒主体の層。
2. 明褐色土 YP・ローム粒を多く含む。締まりは乏しい。
3. 明褐色土 小型のローム塊、YP・炭化物を含む。
4. 暗褐色土 大型のローム塊を含む。締まりは良好。
5. 明褐色土 ローム塊主体の層。やや締まりは乏しい。
6. 黄褐色土 ローム塊主体の層。締まりは良好。



1. 褐色土 粘性、締まり無い。
2. 暗褐色土 粘性、締まり無い。ローム粒含む。
3. 暗褐色土 粘性、締まり無い。ローム塊と混じる。
4. 黄褐色土 粘性ややあり。ローム主体。

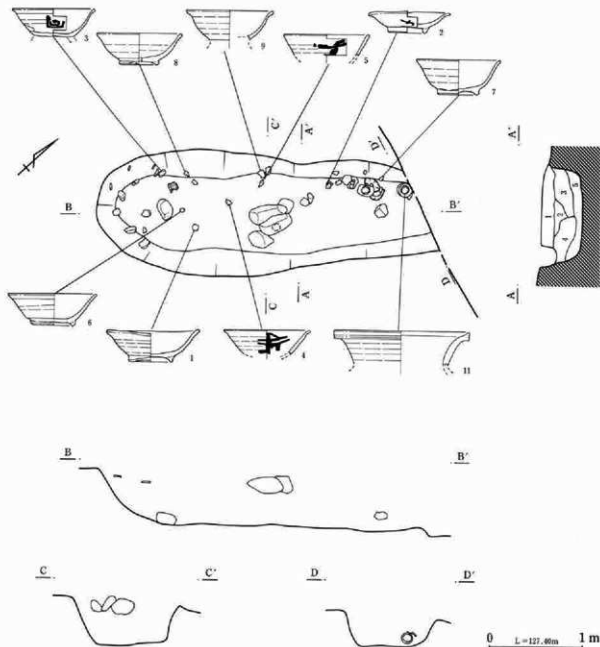


第75図 6・8・18号土坑跡平面図及び出土遺物

2号土坑 (P.L. 16・29)

Dh-15グリッド内に位置し、主軸方位はN-48°-Eに傾く。規模は、長辺(3.4)m、短辺1.2m、深さ50cmを測る。形状は溝状を呈し、断面は台形を呈する。北辺は、耕作溝により切られている。埋没

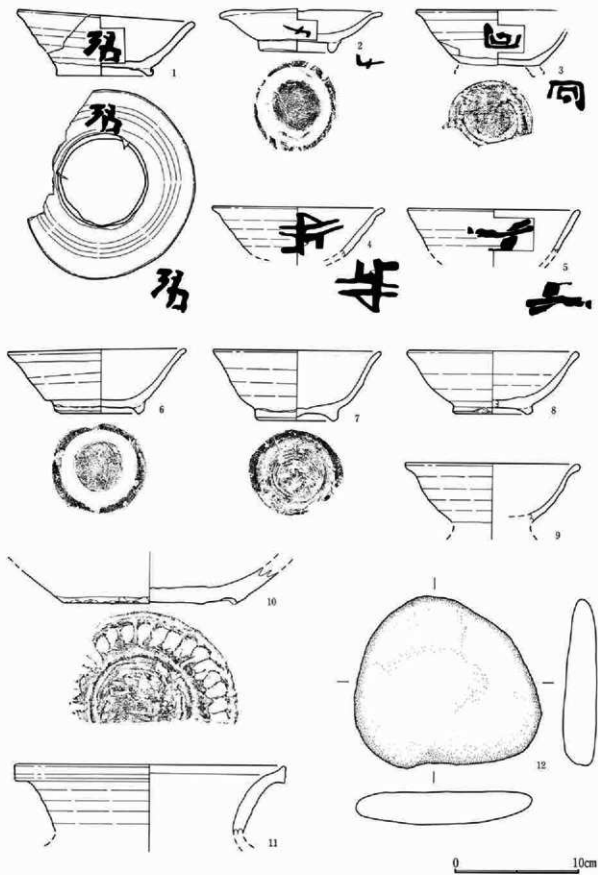
土上面中央部には30cm前後の大礫のまとまりが見られる。また土坑内からは墨書を有する須恵器環、埴類が出土している。遺構の性格としては、墓坑の可能性が考えられる。



1. 明黄褐色土 ロームを多量に含有した土。締まり無く、フカフカした層。
2. オリーブ褐色土 やや締まりのある黒褐色土を混入する。
3. オリーブ褐色土 2層と近似するが、色調は明るい。
4. 黄褐色土 Y P 軽石を混入する。
5. 黄褐色土と締まりのある黒褐色土の混入。

第76図 2号土坑跡

第2節 検出された遺構・遺物



第77図 2号土坑跡出土遺物

3号土坑 (P L, 16)

Dc-13グリッド内に位置し、主軸方位はN-6°-Wに傾く。規模は、長辺2.0m、短辺1.8m、深さ20cmを測る。形状は、若干南北に長い円形を呈する。重複は無し。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は南から北に向かい僅かに傾斜をもつ。

4号土坑 (P L, 16)

Db-13グリッド内に位置し、主軸方位はN-16°-Eに傾く。規模は、長辺1.4m、短辺0.9m、深さ

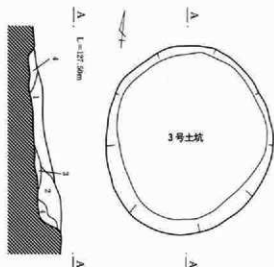
14cmを測る。形状は、楕円形状を呈する。重複は、現代の耕作溝に端部を壊される。

5号土坑 (P L, 16)

Db-15グリッド内に位置し、主軸方位はN-57°-Wに傾く。規模は、長辺1.4m、短辺0.6m、深さ33cmを測る。形状は楕円形を呈する。重複は現代の耕作溝に上面を掘り込まれる。

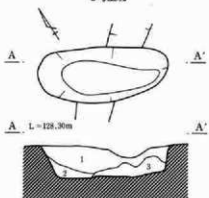
7号土坑

Da-11グリッド内に位置する。規模は、径1.6m、深さ85cmを測る。形状は円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がるが、南壁面は下位部分がハングし袋状を呈する。埋土は人為的な様相を呈する。

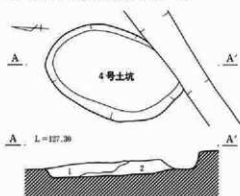


1. 褐色土 やや明るい、均質で締まり良好。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。締まりは良好。
3. 明褐色土 ローム塊主体の層。締まりはやや乏しい。
4. 黄褐色土 ローム塊主体の層。締まりは良好。

5号土坑

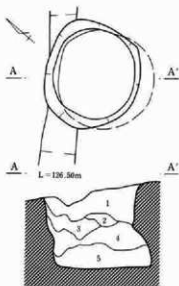


1. 暗褐色土 ローム塊と暗褐色土の斑状堆積。
2. 黒褐色土 比較的均質で包含物は無い。
3. 明褐色土 ローム粒を多く含む。



1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 明褐色土 ローム塊と暗褐色土の斑状堆積。

7号土坑



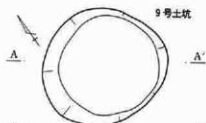
1. 褐色土 少量のYPを含む。
 2. 暗褐色土 褐色土塊と暗褐色土塊の斑状堆積。
 3. 褐色土 暗褐色土塊を含む。
 4. 褐色土 ローム塊を多く含む。
 5. 暗褐色土 ローム塊を多く含む。
- 備考 全体に締まりは乏しい。人為的埋土。

0 1 m

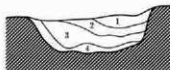
第78図 3~5・7号土坑跡

9号土坑

Db-11グリッド内に位置する。規模は、長辺1.3m、深さ24cmを測る。形状は円形を呈する。重複は無し。



A L=126.20m A'



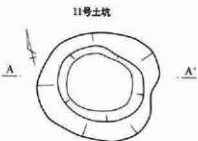
1. 黒褐色土 少量のローム粒を含む。
2. 暗褐色土 小型のローム塊を含む。
3. 暗褐色土 大型のローム塊を含む。
4. 明褐色土 大型のローム塊を多く含む。

10号土坑 (P L, 16)

第34図中に掲載。Dd-11グリッド内に位置し、主軸方位はN-60°-Eに傾く。規模は、長辺2.3m、短辺2.1m、深さ66cmを測る。形状は楕円形を呈する。重複は4号住居と接する。覆土は人為的様相を呈する。

11号土坑 (P L, 17)

Dj-15グリッド内に位置し、主軸方位はN-71°-Wに傾く。規模は、長辺1.3m、短辺0.8m、深さ12cmを測る。形状は、楕円形を呈する。重複は無し。



A L=126.20m A'



12号土坑 (P L, 17)

Dd-11グリッド内に位置し、主軸方位はN-85°-Eに傾く。規模は、長辺1.0m、短辺0.8m、深さ65cmを測る。形状は、楕円形を呈する。重複は無し。



A L=126.00m A'



32号土坑

Dd-11グリッド内に位置し、主軸方位はN-90°-Eに傾く。規模は、長辺0.8m、短辺0.5m、深さ16cmを測る。形状は長円形を呈する。重複は無し。土師器環、須恵器環破片を覆土中に含む。

33号土坑

Dc-11グリッド内に位置し、主軸方位はN-25°-Wに傾く。規模は、長辺0.7m、短辺0.5m、深さ10cmを測る。形状は長方形を呈する。重複は無し。32号土坑同様土器片を含む。

0 1 m

13号土坑 4号住居に変更

14号土坑 (P L, 17)

Cy-8グリッド内に位置する。規模は、径1.0m、深さ37cmを測る。形状は、円形を呈する。重複は無し。

15号土坑 欠番

16号土坑

Ct-5グリッド内に位置し、主軸方位はN-62°-Eに傾く。規模は、長辺1.2m、短辺0.6m、深さ23cmを測る。形状は、長円形を呈する。重複は、17号土坑に掘り込まれる。

17号土坑 (P L, 17)

Ct-5グリッド内に位置し、主軸方位はN-28°-Wに傾く。規模は、長辺1.3m、短辺1.0m、深さ24cmを測る。形状は、隅丸長方形を呈する。重複は、16号土坑を掘り込む。

19号土坑

Db-11グリッド内に位置する。規模は、長辺0.5m、短辺0.4m、深さ19cmを測る。形状は、円形を呈する。1号溝と重複する。

20号土坑 (P L, 17)

Da-8グリッド内に位置し、主軸方位はN-25°-Wに傾く。規模は、長辺1.3m、短辺1.1m、深さ20cmを測る。形状は、南北方向僅かに長い隅丸方形を呈する。重複は無し。

21号土坑 (P L, 17)

Da-8グリッド内に位置し、主軸方位はN-90°-Eに傾く。規模は、長辺1.8m、短辺1.3m、深さ56cmを測る。形状は、長円形を呈する。重複は無し。

22号土坑 (P L, 18)

De-9グリッド内に位置し、主軸方位はN-41°-Eに傾く。規模は、長辺1.2m、短辺0.9m、深さ18cmを測る。形状は、隅丸長方形を呈する。重複は無し。

23号土坑 (P L, 18)

De-10グリッド内に位置し、主軸方位はN-47°-Wに傾く。規模は、長辺1.4m、短辺1.1m、深さ20cmを測る。形状は、長円形を呈する。重複は無し。

24号土坑 (P L, 18)

Df-10グリッド内に位置し、主軸方位はN-28°-Wに傾く。規模は、長辺1.4m、短辺0.8m、深さ24cmを測る。形状は、隅丸長方形を呈する。重複は無し。

25号土坑

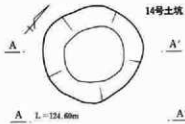
Ar-17グリッド内に位置し、主軸方位はN-35°-Eに傾く。規模は、長辺1.6m、短辺0.7m、深さ20cmを測る。形状は、隅丸長方形を呈する。重複は無し。

26号土坑

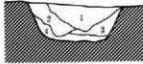
Ar-18グリッド内に位置する。規模は、径0.6m、深さ25cmを測る。形状は、円形を呈する。重複は、27号土坑と接する。

27号土坑

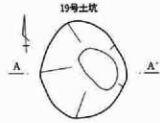
Ar-18グリッド内に位置し、主軸方位はN-38°-Eに傾く。規模は、長辺0.8m、短辺0.5m、深さ22cmを測る。形状は、長円形を呈する。重複は、26号土坑と接する。



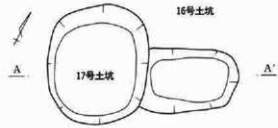
L = 124.60m



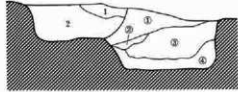
1. 黒褐色土 少量のローム粒を含む。
2. 暗褐色土 小型のローム塊を含む。
3. 暗褐色土 大型のローム塊を含む。
4. 明褐色土 大型のローム塊を多く含む。



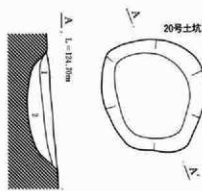
L = 123.60m



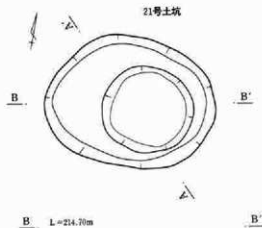
L = 123.50m



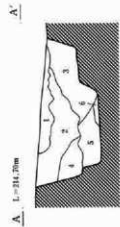
1. 淡褐色土 ロームと褐色土との混土。白色軽石粒含む。
 2. 褐色土 ローム含む。白色軽石粒含む。
 - ①. 褐色土 ローム粒を含む。
 - ②. 褐色土 小型のローム塊を含む。
 - ③. 黒褐色土 粘性ややあり、よく締まる。
 - ④. 暗褐色土 大型のローム塊を含む。
- 備考 全体に粘性、締まり無い。



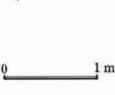
L = 114.50m



L = 214.70m



L = 114.70m



20号～24号土坑土層説明

1. 褐色土 暗褐色土塊を含むが均質。
2. 黒褐色土 暗褐色土塊を少量含む。均質。
3. 暗褐色土 ローム塊を少量含む。
4. 黒褐色土 炭化物を少量含む。2層に近似する。
5. 黒褐色土 少量のローム粒を含む。均質。
6. 暗褐色土 Y Pを含むローム塊が主体。

0 1 m

第80図 14・16・17・19・20・21号土坑跡

28号土坑

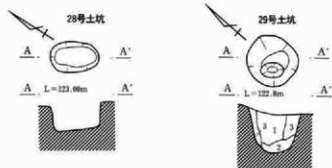
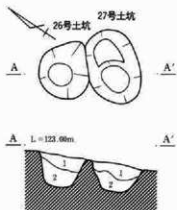
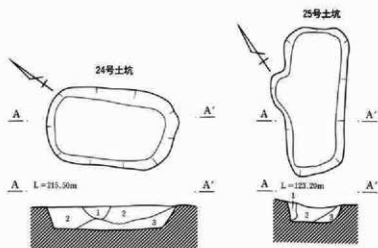
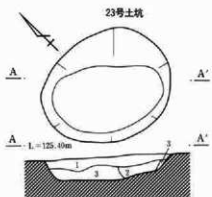
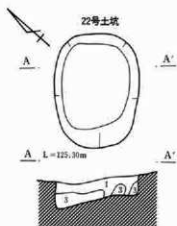
Ar-18グリッド内に位置し、主軸方位はN-28°-Wに傾く。規模は、長辺0.4m、短辺0.3m、深さ20cmを測る。形状は、長円形を呈する。重複は無し。

29号土坑

Ar-18グリッド内に位置する。規模は、径0.5m、深さ43cmを測る。形状は、円形を呈する。重複は無し。

30号土坑 欠番

31号土坑 14号住居に変更



25号土坑土層説明

1. 黄褐色土 ロームと褐色土との混土。
2. オリーブ褐色土 As-Aを多量に混入する。
3. 黄褐色土 締まり無く、サクサクしている。

26号・27号土坑土層説明

1. 暗褐色土 夾雑物ほとんど無い。均質。
2. 黒褐色土 ローム塊を少量含む。

29号土坑土層説明

1. 濃い黄褐色土 夾雑物含まず。均質。
2. 黒褐色土 ローム塊を混入する。
3. ロームとオリーブ褐色土との混土。

0 1m

第81図 22~29号土坑跡

土坑出土遺物観察表

1号土坑

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	1土坑 覆土	口縁部 破片	①よい黄褐色②良好 ③粗砂粒を多く含む	懸垂状貼付文が間隔を持って付され口縁部内面にかけて棒状貼付が施される。地文は横位集合条線。	諸磯c式
2	縄文土器 深鉢	1土坑 覆土	口縁部 破片	①よい黄褐色②良好 ③粗砂粒を多く含む	1と同一個体か。懸垂状貼付文御縁は丁寧に推でられる。地文の条線は多数竹管か。	諸磯c式
3	縄文土器 深鉢	1土坑 覆土	口縁部 破片	①焼色堅緻 ③含繊維	角頭状の口唇部。0段3条R.L縄文の横位施文。原体幅は短い。	関山2式 内面研磨。

6号土坑

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	6土坑 覆土	体部破片	①焼色良好 ③粗砂粒含む	雑な刻みを施した浮線文が2条横位に貼付される。地文は無筋縄文R。	諸磯b式
2	縄文土器 深鉢	6土坑 覆土	体部破片	①焼色堅緻 ③粗砂粒含む	起こし気味の刻みが横位に連続する。	諸磯c式併行
3	石	6土坑 覆土	破片	<計測値>長3.5、幅5.6、厚3.0、重109.1<石材>輝緑色<特徴>両端部欠損、円柱状を呈し、割口以外磨かれる。		

8号土坑

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	8土坑 -6cm	口縁部 破片	①赤褐色不良 ③含繊維、砂粒多い	0段多条のR.L縄文横位施文。施文方向は乱れる。	黒沢式
2	縄文土器 深鉢	8土坑 +24cm	底部破片	①赤褐色良好 ③粗砂粒を多く含む	小型の「C」字状半軟竹管文が横位に連続する。施文は密で下ら端部にまで及ぶ。1住3と同一か。	諸磯c式併行

18号土坑

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	18土坑 +35cm	体部破片	①暗赤色堅緻 ③粗砂粒を含む	0段3条R.LとL.Rの結束第1種による羽状縄文。原体幅は短い。	関山式か

2号土坑

番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 埴	2土坑 -19cm	瓦欠損	口(14.8) 高5.3 底7.0	①淡黄②中性焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、高台部貼付。体部外面磨き「私」	
2	須恵器 皿	2土坑 +35cm	完整	口13.9 高3.4 底6.1	①灰白②還元焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、高台部貼付。体部外面磨き「刀」	
3	須恵器 埴	2土坑 +16cm	瓦	口(13.2)	①淡黄②中性焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、高台部貼付。体部外面磨き「国」	内面うすく 墨?付着
4	須恵器 埴	2土坑 +24cm	口+体 瓦	口(14.0)	①灰白②還元焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。体部外面磨き「尊」	
5	須恵器 埴	2土坑 +12cm	口縁部 破片	口(14.0)	①灰白②還元焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。体部外面磨き「尊」	
6	須恵器 埴	2土坑 +43cm	瓦	口(14.4) 高5.1 底6.3	①淡黄②中性焙 ③砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、高台貼付。高台部強いナデ。	
7	須恵器 埴	2土坑 +37cm	瓦	口(13.6) 高5.5 底6.1	①灰白②中性焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、底部補修。その後高台部貼付。	
8	須恵器 埴	2土坑 +31cm	瓦	口(13.4) 高 5.0 底(5.6)	①灰白②還元焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、高台部貼付。	
9	須恵器 埴	2土坑 +33cm	口+体 瓦	口14.9	①灰白②還元焙 ③細砂粒含む	縦軸整形。口縁部外反。	
10	須恵器 埴	2土坑 +5cm	高部瓦 断	底(13.7)	①よい黄褐色②中性焙 ③粘土粒含む	高部周辺部に指摺による、粘土かき寄せが見られ、高台部貼付の際の補強用と考えられる。	
11	須恵器 埴	2土坑 +24cm	口縁部 瓦	口(21.6)	①灰白②還元焙 ③砂粒含む	口縁部外反。端部やや受口状を呈し、1条の沈線走る。回転ナデ整形。	
12	石	2土坑 +33cm	完整	<計測値>長13.5、幅15.1、厚2.7、重99.0<石材>変安武岩<特徴>扁平な石。加工痕等は見られない。何かの台石か。			

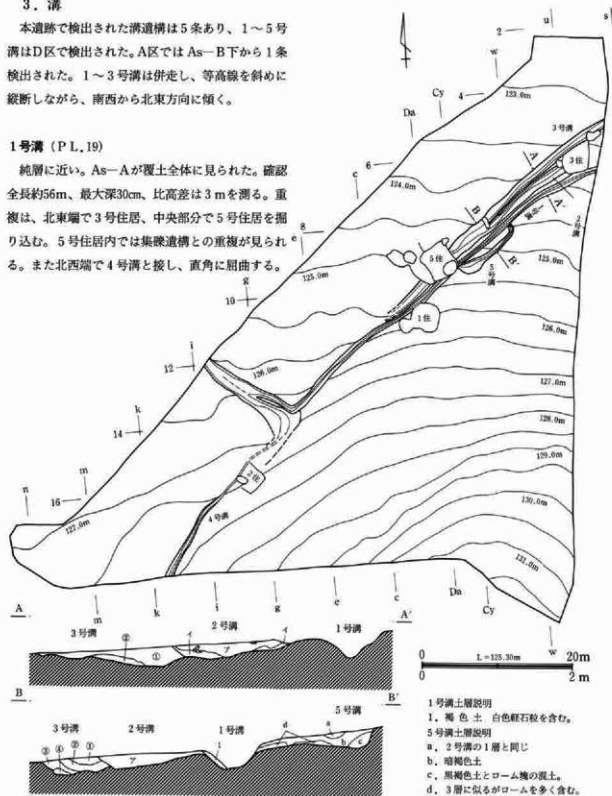
第4章 白石根岸遺跡

3. 溝

本遺跡で検出された溝遺構は5条あり、1～5号溝はD区で検出された。A区ではAs-B下から1条検出された。1～3号溝は併走し、等高線を斜めに縦断しながら、南西から北東方向に傾く。

1号溝 (P.L. 19)

純層に近い。As-Aが覆土全体に見られた。確認全長約56m、最大深30cm、比高差は3mを測る。重複は、北東端で3号住居、中央部分で5号住居を掘り込む。5号住居内では集積遺構との重複が見られる。また北西端で4号溝と接し、直角に屈曲する。



2号溝土層説明

ア, 淡褐色土 白色軽石粒、黄色粒を含む。締まり良好。
イ, ロームと褐色土とを斑状に混入する。白色軽石粒、黄色粒を若干含む。

3号溝土層説明

①, 褐色土 白色軽石粒を多量に含む。黄色粒含む。
②, 暗褐色土 白色軽石粒を若干含む。
③, 褐色土 黄色粒、ローム粒が少し混じる。
④, 黒褐色土とローム塊の混土。

第82図 1～5号溝跡

2号溝 (P L, 19)

1・3号溝と併走し、5号住居付近で3号溝と合流する。確認全長34m、最大深25cm、比高差は1.75mを測る。重複は、3・5号住居を掘り込む。

3号溝 (P L, 19)

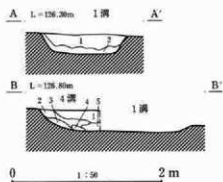
1・2号溝と併走し、5号住居付近で2号溝と合流する。確認全長26m、最大深20cm、比高差は2.00mを測る。重複は、3・5号住居を掘り込む。

4号溝 (P L, 19)

調査区西中央部からでて、1号溝と接し屈曲する。屈曲部分には5~30cm前後の集塵(3号集石遺構)が見られる。確認全長12m、最大深30cm、比高差は0.97mを測る。

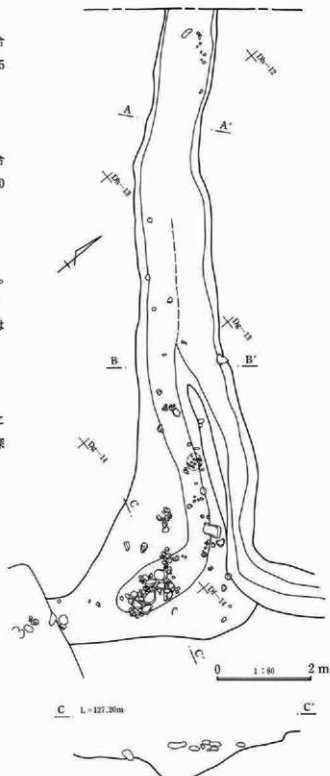
5号溝

調査区北東よりに位置する。1号溝と5号住居に接し、鉤の手状に屈曲する。確認全長8.5m、最大深20cm、比高差1.4mを測る。



1号溝土層説明

1. 明黄褐色土 ロームを主体とする。
2. オリーブ褐色土 ロームと褐色土の混土。



4号溝土層説明

1. 明黄褐色土 ローム質であって、1~2mmの白色軽石を少量混入する。
2. オリーブ褐色土 ローム質土50%、褐色土50%の混土。
3. 明黄褐色土 ローム質土であるが、YPの軽石を多量に混入する。
4. 明黄褐色土 3層と同質であるが、YP軽石の混入が少ない。
5. 暗オリーブ褐色土 ややきめが細かく、ロームの質感をもつ。混入物はほとんどない。

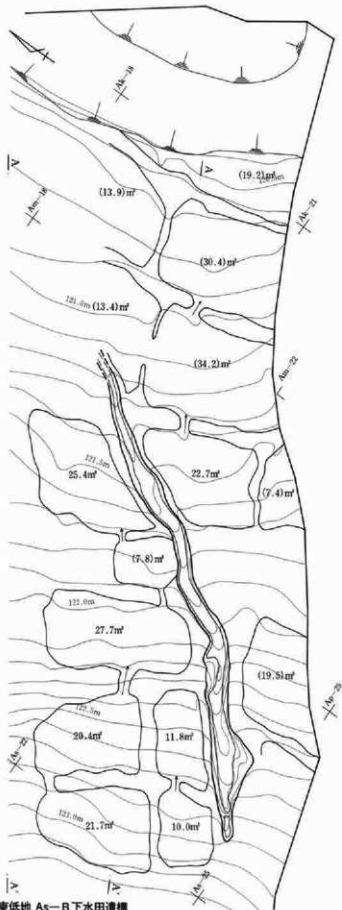
第83図 1・4号溝跡

4. 水田遺構 (P.L.20)

本遺跡東調査区において、台地から緩やかに移行する幅20m程の狭小な谷地形が見られ、調査区1/4程の部分に As-B の堆積が確認された。この As-B 直下より水田面が検出された。遺構面の状態はかなり湿潤で湧水が見られ、調査時には調査区際に排水用の側溝を必要とした。明確な畦畔は検出できず、遺構面の円形又は楕円形の足跡と考えられる凹凸の多少により耕作面と畦畔とを区別した。水田耕作土は側縁部及び上流部は薄く、数cmで灰白色の基盤層が見られる。下流部の調査区端部では、掘削機械が埋まるほど湿潤で黒色土が厚く堆積している。

水田面は未完掘を含め15面確認でき、最大面積27.7㎡、最小面積10.0㎡、平均19.9㎡を測る。水田面の傾斜角度は3.5°、比高差2.2mを測る。

また、水田面内には南北方向に走行をもつ溝状遺構が検出された。この溝状遺構は水田面を覆う As-B 直下であり、水田面と同時存在である。溝状遺構は畦畔をぬうように走り、水田の排水施設と考えられる。確認全長は25.8m、幅0.95mを測る。



第84回 東低地 As-B 下水田遺構

5. 集石遺構

本遺構は、D区で3カ所検出され、礫が集中して見られる遺構であり、用途は不明である。

1号集石遺構 (P.L. 18)

5号住居東コーナー部の1号溝との重複部分に位置し、5号住居を掘り込む1号溝調査段階で検出された。規模は、長辺2.2m、短辺1.5mを測り、長円形に礫がまとまる。方位はN-50°-Eに傾く。

集石中を1間×2間の掘立柱建物跡と思われる柱穴が掘り込んでいる。

2号集石遺構 (P.L. 18)

1号溝東脇の Cu-7 グリッド内に位置し、1号集石遺構の礫よりひとまわり小さな礫が2カ所確認面上に設置されたような状態で検出された。礫以外の遺物は見られない。

3号集石遺構 (第83図、P.L. 18・19)

4号溝と1号溝がT字状に交わる Df-14 グリッド内に位置し、4号溝屈曲部で検出された。礫は浮いた状態で出土している。礫の大きさは不揃いであり、形状も乱れるなど、廃棄された礫と考えられる。



第85図 1～3号集石遺構

6. 遺構外出土遺物

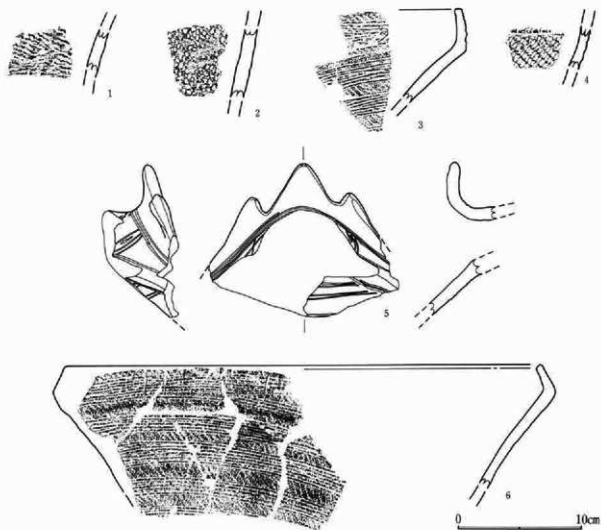
白石根岸遺跡では、主に縄文時代前期、奈良・平安時代の遺構を確認した。この遺構群に伴い、遺構平面確認時や遺構に伴わない遺物が若干ながら出土している。ここではこれらの遺物から、遺存が良く特徴的な遺物を抽出し掲載する。

縄文時代の遺物は西台地を中心に、前期後半の諸磯り式～中期初頭の土器片が見られる(第90図)。極少量の中期中葉と後半の土器片も出土したが、これは客体的な出土であり、多くは前期後半に集中する傾向である。検出された遺構も、該期に時間的位置が求められており、これら遺構外遺物も前期後半～終末期における居住に伴うものと考えられよう。

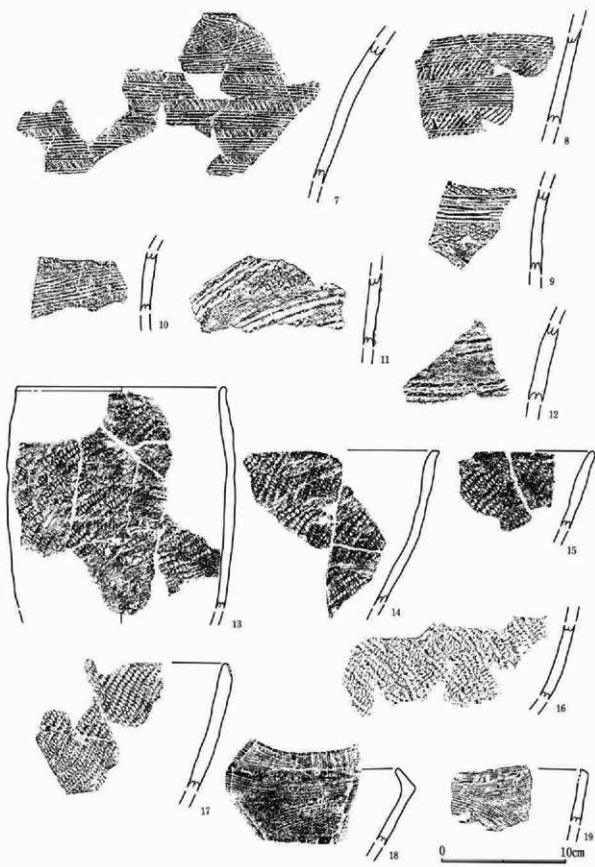
西台地では、この他に9～10世紀代の土器や鉄鎌などが見られたが、希薄な出土である(第92図)。

縄文時代の遺物が集中した西台地に比して、東低地では8～9世紀の土器が出土している(第91図)。これらは検出された住居跡遺物と時間的にも合致するが、As-B下水田の存在も考慮しておきたい。その他に縄文時代の石器及び古墳時代初頭期の土器片なども見られるが、混入であろう。

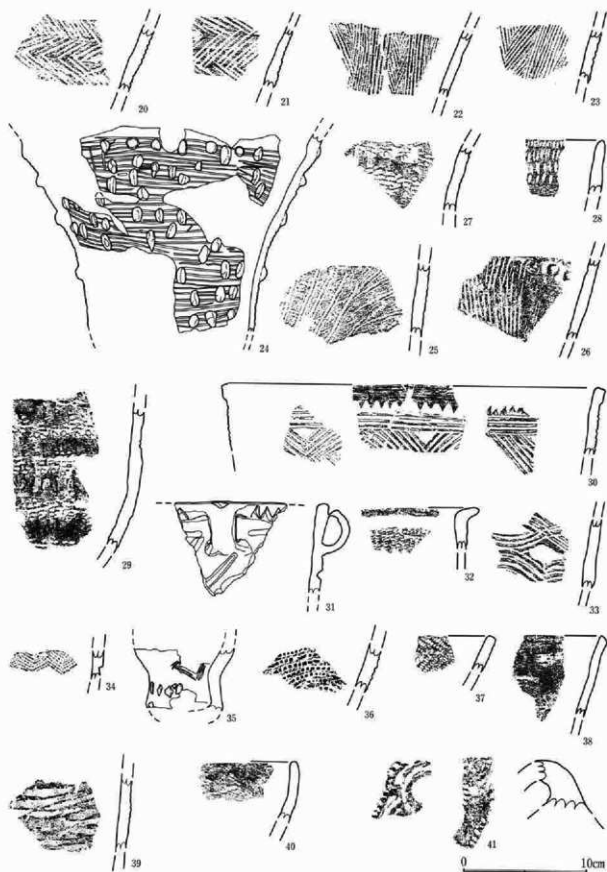
また、近世～近代に比定される陶磁器・古銭なども出土したが、同時期の遺構は検出されておらず、調査区域外に該期の民家跡などの存在を示唆しておきたい。



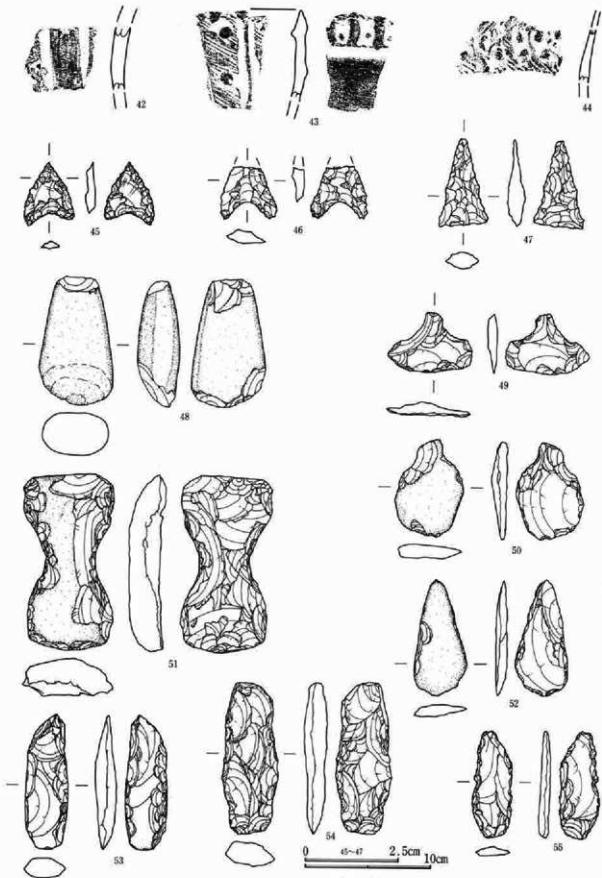
第86図 遺構外出土遺物(1)



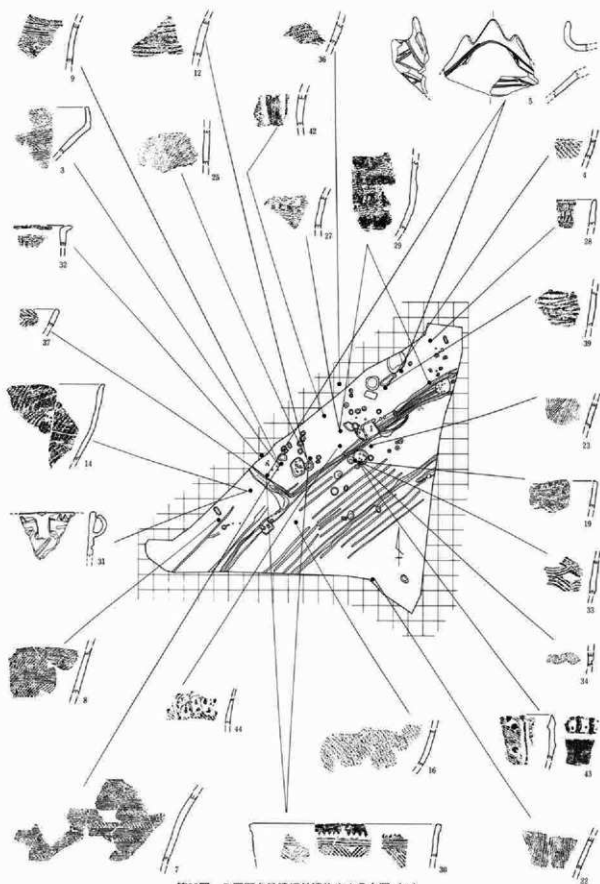
第87図 遺構外出土遺物(2)



第88図 遺構外出土遺物(3)

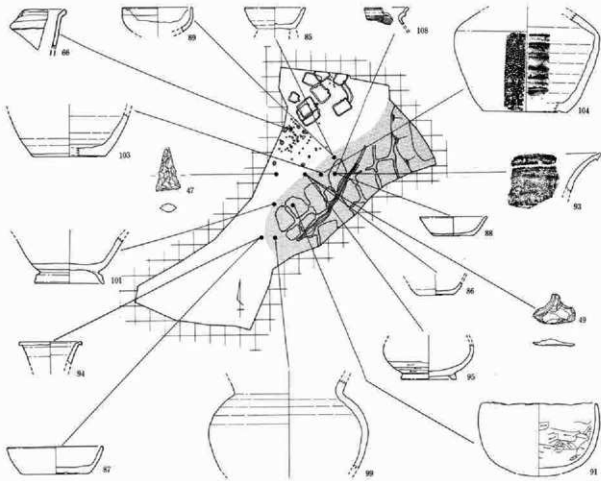


第89図 遺構外出土遺物(4)

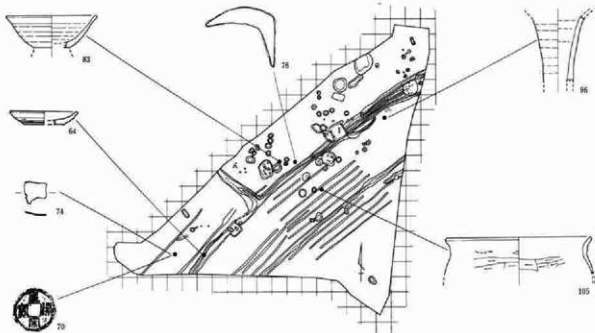


第90圖 D区西台地遺構外遺物出土分布圖(1)

第2節 検出された遺構・遺物

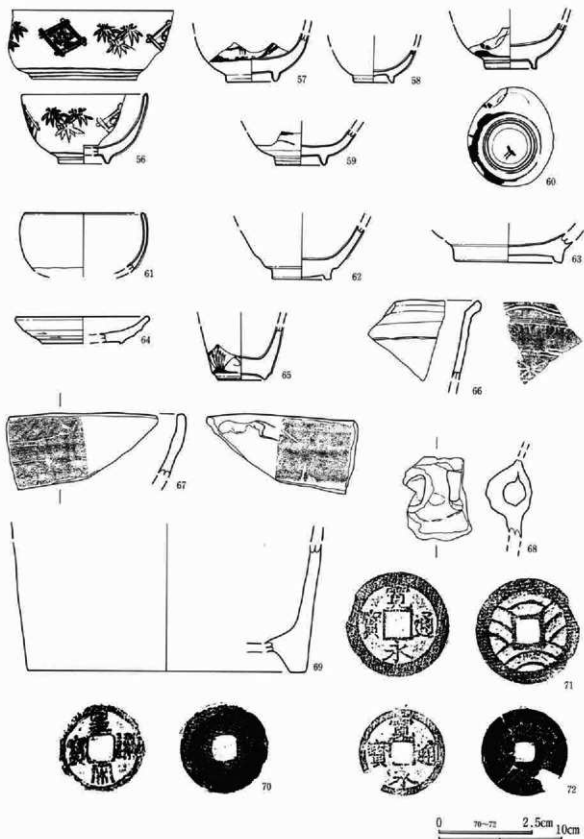


第91図 A区東低地遺構外遺物出土分布図(2)

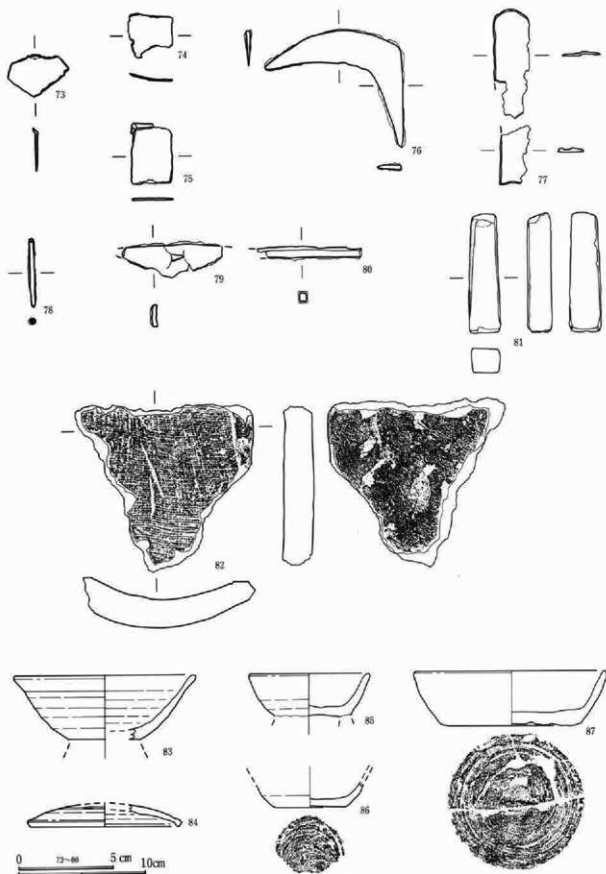


第92図 D区西台地遺構外遺物出土分布図(3)

第4章 白石根岸遺跡

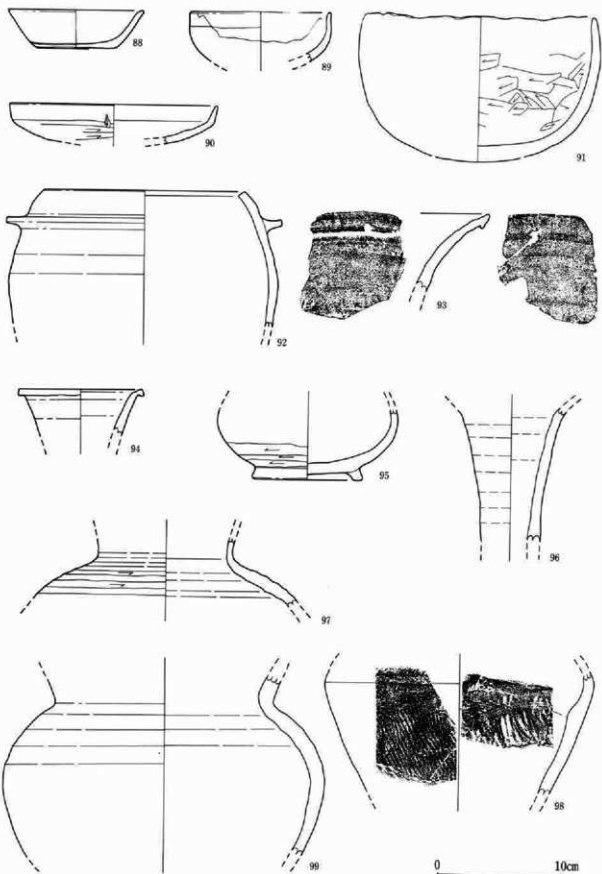


第93圖 遺構外出土遺物(5)

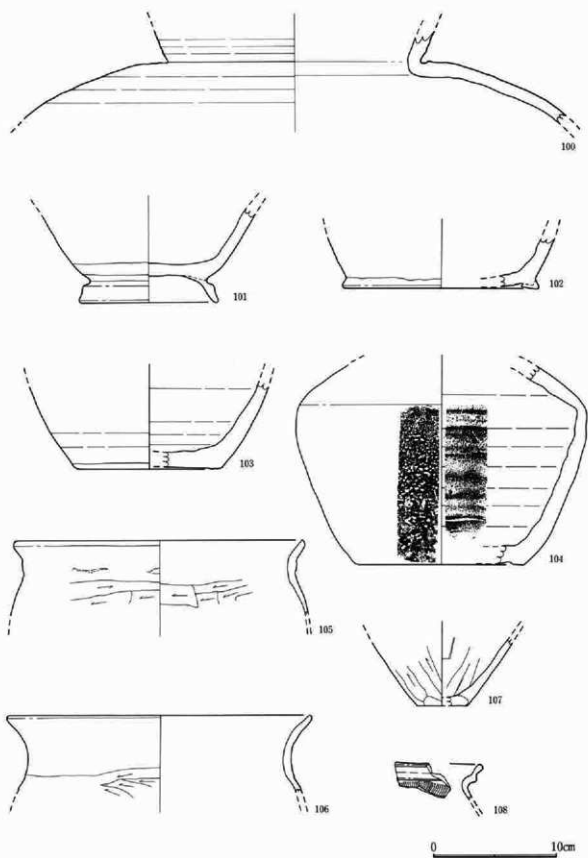


第94図 遺構外出土遺物(6)

第4章 白石根岸遺跡



第95回 遺構外出土遺物(7)



第96図 遺構外出土遺物 (8)

第4章 白石根岸遺跡

遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 (m)	残存	①色調②地紋③胎土	器形・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	東低地	体部破片	①にぶい黄褐色②良好 ③含繊維、粗砂粒	L R縄文の横位施文。内面研磨。	黒沢式
2	縄文土器 深鉢	東低地	体部破片	①にぶい黄褐色②良好 ③含繊維、粗砂粒	L R縄文の横位施文。	黒沢式
3	縄文土器 深鉢	Df-11	口縁部破片	①橙②良好 ③粗砂粒を含む	内屈する口縁部。横位平行沈線が多段に施される。地文はL R縄文。	清瀨b式
4	縄文土器 深鉢	Cx-6	体部破片	①にぶい黄褐色②良好 ③含繊維、粗砂粒	幅狭の半楕円管文が横位に施される。地文は0段多束のL R縄文。	黒沢式
5	縄文土器 深鉢	Cw-5	口縁尖起破片	①橙②良好 ③粗砂粒を含む	先端部が欠損する乾先状の突起。3枝する小突起を付し、平行沈線が施文される。縄文はL R。	清瀨b式
6	縄文土器 深鉢	Dk-10	口縁部破片	①にぶい橙②やや軟質 ③粗砂粒を含む	緩やかに内屈する口縁部。平行沈線の多段施文。口縁部沈線は分岐し小区画を描く。地文L R縄文。	清瀨b式
7	縄文土器 深鉢	Df-11 Dg-12	体部破片	①にぶい赤褐色②良好 ③粗砂粒を含む	平行沈線の多段施文。間隔が短い。上位文線帯に矩形の区画文が看取される。地文L R縄文。	清瀨b式
8	縄文土器 深鉢	Df-15	体部破片	①明黄褐色②良好 ③粗砂粒を多く含む	やや幅広の平行沈線による多段施文。比較的、地文はR L縄文が施される。	清瀨b式
9	縄文土器 深鉢	Df-10	体部破片	①明赤褐色②堅緻 ③粗砂粒を含む	多岐竹管複面使用の横位平行沈線。地文はL R縄文が施されるが施文不明。	清瀨b式
10	縄文土器 深鉢	Cu-17	体部破片	①黄褐色②堅緻 ③粗砂粒を多く含む	横位平行沈線。地文はL R縄文の確かな施文。	清瀨b式
11	縄文土器 深鉢	6トレンナ	体部破片	①にぶい黄褐色②やや軟質 ③粗砂粒を含む	刻みを施した浮線文が2条平行し横位・斜位に貼付される。地文はR L縄文。	清瀨b式 (新)
12	縄文土器 深鉢	Dd-11	体部破片	①明黄褐色②軟質 ③粗砂粒を含む	刻みを施した浮線文の平行貼付。器面磨光する。	清瀨b式
13	縄文土器 深鉢	Dk-10	ロー体部互反	①明黄褐色②やや軟質 ③粗砂粒を多く含む	直立気味の器形。口縁部は僅かに横撫でを施す。R L縄文が器面を覆う。	清瀨b式
14	縄文土器 深鉢	Dk-10	口縁部破片	①にぶい橙②やや軟質 ③粗砂粒を多く含む	僅かに内屈する口縁部形態。R L縄文は横位施文。口唇端部にまで及ぶ。	清瀨b式
15	縄文土器 深鉢	Dk-10	口縁部破片	①にぶい橙②やや軟質 ③粗砂粒を含む	口唇部が僅かに外反する。R L縄文横位施文。	清瀨b式
16	縄文土器 深鉢	De-15	体部破片	①赤褐色②良好 ③粗砂粒を含む	L R縄文の横位施文。内面磨光顕著しい。	清瀨b式
17	縄文土器 深鉢	Dd-4 Dh-13	口縁部破片	①にぶい橙②良好 ③粗砂粒を含む	口唇部は撫でにより尖り気味。L R縄文横位施文。	清瀨b式 (新)
18	縄文土器 深鉢	Dd-12	口縁部破片	①明黄褐色②やや軟質 ③粗砂粒を少量含む	内屈する杖状口縁。集合条線の横位・縦位施文。おそらく波頭下の菱形状区画。	清瀨b式 (新)
19	縄文土器 深鉢	Da-11	口縁部破片	①浅黄②良好 ③粗砂粒を含む	内屈部分の剥落した口縁部。浅い集合条線で菱形状区画が描かれる。	清瀨b式 (新)
20	縄文土器 深鉢	5トレンナ	体部破片	①にぶい橙②良好 ③粗砂粒を含む	平行沈線による横位矢羽状文が充塞される。	清瀨c式
21	縄文土器 深鉢	5トレンナ	体部破片	①にぶい橙②良好 ③粗砂粒を含む	平行沈線による横位矢羽状文。20より丁寧な施文。	清瀨c式
22	縄文土器 深鉢	Cy-19	体部破片	①にぶい橙②良好 ③粗砂粒を多く含む	集合沈線による縦位・斜位施文と縦位矢羽状文が交互する。	清瀨c式
23	縄文土器 深鉢	Cy-10	体部破片	①にぶい赤褐色②良好 ③粗砂粒を少量含む	集合沈線による縦位施文と縦位矢羽状文。	清瀨c式
24	縄文土器 深鉢	Dk-1 10-11	束上・下 平均片	①赤褐色②やや軟質 ③粗砂粒を含む	頸部屈曲部のボタン状貼付と小棒状貼付は相関性があるが体部貼付文は不規則。地文横位平行沈線。	清瀨c式
25	縄文土器 深鉢	Dd-11	体部破片	①にぶい橙②軟質 ③粗砂粒を多く含む	僅かに貼付文の痕跡有り。地文は斜位の平行沈線が確らに施される。	清瀨c式
26	縄文土器 深鉢	西台地 3トレンナ	体部破片	①にぶい橙②軟質 ③粗砂粒を多く含む	2対のボタン状貼付文が付され、地文に縦位平行沈線が確らに施される。	清瀨c式
27	縄文土器 深鉢	Db-9	体部破片	①明赤褐色②堅緻 ③粗砂粒、緻密	砂質。平行沈線による横位結節文が多段に施される。器面の凹凸が顕著。	興津式
28	縄文土器 深鉢	Cu-3	口縁部破片	①にぶい橙②良好 ③粗砂粒を含む	砂質。口唇端部に刻みが施され、以下同一工具による小型の爪形刻みが横位多段に連続する。	興津式
29	縄文土器 深鉢	Cu-6 Db-9	体部破片	①灰黄褐色②堅緻 ③粗砂粒、緻密	平行沈線による横位結節文が多段に施される。砂質で27と同一器体であろう。	興津式

第2節 検出された遺構・遺物

30	縄文土器 深鉢	Dg-12	口縁部	①明赤褐色堅緻 ③粗砂粒を含む	口唇肥厚部に三角連続印刻文。以下平行比線横位斜位施文で空白部にも三角印刻する。	十三書提式
31	縄文土器 深鉢	Dh-13	口縁部	①明赤褐色堅緻 ③粗砂粒を含む	小型の楕状把手。口唇部連続三角印刻文。以下太く深い比線を横位斜位に施す。地文R.L縄文。	十三書提式
32	縄文土器 深鉢	Dg-11	口縁部	①明赤褐色や軟質 ③粗砂粒を含む	口縁部外周。2個一組の横位連続斜刻文と連続三角印刻文を施す。1位9と同一側体。	十三書提式
33	縄文土器 深鉢	Da-11	体部破片	①地質良好 ③粗砂粒を含む	弧状の平行比線で木葉状モチーフを描く。空白部は雫な白刷手法で彫られる。	十三書提式
34	縄文土器 深鉢	Da-11	体部破片	①地質良好 ③粗砂粒を含む	結節比文による横位連続縦面文。三角形の空白部は比刻される。	十三書提式
35	縄文土器 深鉢	6トレンチ	体部約	①にぶい微②良好 ③粗砂粒を含む	有部分か。起こし気味の横位刻み目列を多段に施す。上位に細比線で菱形を区画し内縁を比刻する。	十三書提式
36	縄文土器 深鉢	Dh-7	体部破片	①にぶい微②堅緻 ③粗砂粒を含む	結節浮文による円環状モチーフ。地文は疎かな平行比線による斜位施文。	十三書提式
37	縄文土器 深鉢	Dg-12	口縁部	①にぶい微②堅緻 ③粗砂粒を含む	角面状の口唇部形態。R.L・L.R縄文による羽状構成。原体幅は短い。	十三書提式併行
38	縄文土器 深鉢	西台地 3トレンチ	口唇部	①にぶい微②堅緻 ③粗砂粒を含む	外唇ざ状の口唇部形態。無文で雑な整形。	
39	縄文土器 深鉢	Cx-6	体部破片	①暗赤褐色堅緻 ③粗砂粒を多く含む	横位指撫でが重なる。あるいは異時期か。内面は比較的平滑。	
40	縄文土器 深鉢	西台地 1トレンチ	口縁部	①にぶい微②堅緻 ③粗砂粒を含む	あるいは鉢か。内脣する口縁部を呈し無文である。内外面とも研磨。	
41	縄文土器 深鉢	東低地	突起破片	①地質良好 ③粗砂粒を含む	半円環状の突起か。外縁には刻みが施され、結節比線が沿う。	阿玉台式
42	縄文土器 深鉢	Dc-8	体部破片	①地質良好 ③粗砂粒を含む	2条の凹縁が懸垂し、その間を磨り滑す。地文の縄文はR.Lの縦位施文。	加吉川B3式
43	縄文土器 深鉢	Da-11	口縁部	①にぶい微②良好 ③粗砂粒を含む	懸垂状貼付文とボタン状貼付文。地文は斜位平行比線。内面も楕状貼付文とボタン状貼付文が及ぶ。	諸磯c式
44	縄文土器 深鉢	Dh-10	体部破片	①地質不良 ③粗砂粒を含む	地文は横位矢羽状平行比線。不規則に貼付文が付される。	諸磯c式
45	石製品 打製石鏃	B区 3トレンチ	完形	<計測値>長1.6、幅1.3、厚0.4、重0.4<石材>黒曜石<特徴>無基凹基。		
46	石製品 打製石鏃	Dd-12	先端部欠損	<計測値>長1.9、幅1.5、厚0.4、重0.5<石材>黒曜石<特徴>無基凹基。		
47	石製品 打製石鏃	As-20	完形	<計測値>長2.3、幅1.4、厚0.4、重0.8<石材>チャート<特徴>二等辺三角形を呈する。無基平基。		
48	石製品 磨製石斧	表採	端部欠	<計測値>長10.0、幅5.9、厚3.4、重310.0<石材>玄武岩<特徴>磨面を呈する。刃部片刃状を呈する。側縁部磨面見られる。		
49	石製品 石鏃	Aq-20	完形	<計測値>刃部長6.8、基部長1.8、厚1.2、重22.5<石材>ホルンフェルス<特徴>磨長。		
50	石製品 石鏃	Dd-4	完形	<計測値>刃部長4.0、基部長2.0、厚1.3、重46.0<石材>硬質泥岩<特徴>磨長。刺摩面片面のみ。		
51	石製品 打製石斧	As-B下	完形	<計測値>長13.8、幅7.4、厚2.9、重310.0<石材>硬質泥岩<特徴>分割形を呈し、片面調整。エグリ部両側縁部磨削。		
52	石製品 打製石斧	Dd-4	完形	<計測値>長9.1、幅4.3、厚0.9、重36.4<石材>硬質泥岩<特徴>刺摩面片面のみ。磨面を呈する。		
53	石製品 打製石斧	東低地	完形	<計測値>長10.5、幅3.5、厚1.6、重75.8<石材>硬質泥岩<特徴>短冊状を呈する。刃部及び両側縁部磨削。		
54	石製品 打製石斧	東低地	完形	<計測値>長11.8、幅4.6、厚2.0、重110.0<石材>硬質泥岩<特徴>短冊状を呈する。刃部自然面を残す。		
55	石製品 打製石斧	東低地	完形	<計測値>長8.4、幅3.2、厚0.8、重24.8<石材>硬質泥岩<特徴>磨面を呈する。		
番号	器種	出土位置 (cm)	残存	法量 (cm)	器形・整形の特徴	備考
56	磁器 碗	西台地	欠	口(10.0)高 5.5 底(4.0)	灰白色をなし、焼成不良。外面コンニャク印判による施文の後、ひみを入れる。	肥前17C末 ~18C中
57	陶器 碗	西台地	口縁部 欠損	底4.4	灰白色をなす。陶胎染付。外面合圍山水文。素地に白土掛け後施釉。貫入入る。高台端部使用により磨滅。	肥前18C前
58	陶器 小瓶	西台地	口縁部 欠損	底(3.3)	灰白色をなす。貫入のある乳濁した釉を施す。高台以下無釉。	製作地不詳 江戸時代
59	陶器 碗	西台地	口縁部 欠損	底4.2	オリーブ灰色をなす。陶胎染付。外面合圍山水文。素地に白土掛け後施釉。貫入入る。	肥前18C前

第4章 白石根岸遺跡

60	磁器 陶器	西台地	底部	底4.0	明緑灰色をなす。外面に梅の折れ枝文?高台内に「大明年製」?折れ筋を 描く。	肥前18C中 ~後	
61	陶器 陶器	西台地	底部欠 損写	口9.6	黒色をなす。丸い筒形を呈するが、天目茶碗と同様な鉄釉を施す。	瀬戸・美濃	
62	陶器 陶器	E区 南トレンチ	口縁部 欠損	底4.6	黒褐色をなす。天目茶碗。胴側に近い鉄釉を施す。高台部以下無軸。	瀬戸・美濃 江戸時代	
63	陶器 片口鉢	西台地	底部	底8.8	明黄褐色をなす。内面鉄釉。底部内面日痕3ヶ所。	瀬戸・美濃 江戸時代	
64	陶器 皿	Di-17	口~底 写	口(10.6) 高 (2.1)底(6.2)	黒灰色をなす。焼成不良のため不詳であるが、長石釉を施した近野丸皿 であろう。	瀬戸・美濃 系17C	
65	磁器 器口	西台地	口縁部 欠損	高(4.0)	明青灰色をなす。形骸は厚く、染付の発色も悪い。高台部が存在し、外 面には草花文を描く。	肥前18C	
66	陶器 鉢	A1-17	口縁部 破片	口一 高一 底一	ぶい赤褐色をなす。三島手鉢。外面口縁部下無軸。	肥前・博 多系江戸時代	
67	炊具陶器 焙烙	西台地	口縁部 破片	口(18.0)	黒褐色をなす。内面に幅広い耳割痕がある。	在地系江戸 時代	
68	炊具陶器 内耳鍋	東低地	内耳部 破片	口一 高一 底一	ぶい褐色をなし、焼成は普通。胎土は精選されている。内耳部粘土組 貼付。指押え。		
69	炊具陶器 植木鉢	西台地 3トレンチ	体~底 写	底(22.6)	黒色をなす。高台状になった部分に水抜き用のエグリを有する。器表黒 色鉄釉。	製作地不詳 時期不詳	
70	古銭	Dk-17	完形	<計測値>外径2.3、内孔長0.7<特徴>息末通宝。(宋・1039年)			
71	古銭	1トレンチ	完形	<計測値>外径2.7、内孔長0.7<特徴>寛永通宝。裏面有文。			
72	古銭	5トレンチ	ほぼ完 形	<計測値>外径2.3、内孔長0.6<特徴>寛永通宝。裏面無文。			
73	銅製品 銅板	西台地 2トレンチ	破片	<計測値>長2.1、幅3.2、厚0.1、重2.6<特徴>薄く板状に延ばされる。		No74と同一 品?	
74	銅製品 銅板	Dk-17	破片	<計測値>長2.3、幅2.3、厚0.1、重2.3<特徴>薄く板状に延ばされる。		No73と同一 品?	
75	銅製品 表面	破片	<計測値>長3.2、幅2.1、厚0.1、重5.5<特徴>コの字状に屈曲し、刀剣類の足金物に 類似する。				
76	鉄製品 鏝	Dc-11	完形	<計測値>長7.5、幅6.2、厚0.3、重16.2<特徴>L字目に屈曲する。			
77	鉄製品 西台地 3トレンチ	破片	<計測値>長9.2、幅0.9、厚0.2、重7.2<特徴>板状に延ばされる。頂部内形を呈する。				
78	鉄製品 棒状	西台地	端部欠 損	<計測値>長3.6、幅0.4、厚0.2、重4.0<特徴>用途不明。			
79	鉄製品 刀子?	西台地 8トレンチ	両端部 欠損	<計測値>長11.9、幅2.0、厚0.5、重10.2<特徴>三角形の板状を呈する。刃部不明瞭。			
80	鉄製品 基?	西台地 8トレンチ	端部欠 損	<計測値>長5.2、幅0.6、厚0.5、重7.0<特徴>角柱状を呈する。			
81	石製品 砥石	東低地	完形	<計測値>長9.3、幅2.6、厚2.0、重88.4<石材>砥沢石<特徴>四側面磨面。角柱状を 呈する。			
番号	器種	出土位置 (cm)	残存 法	量 (cm)	①色調②焼成③胎土	器形・整形の特徴	備考
82	平瓦	Di-13	破片	厚2.7	①ぶい黄褐色②普通 ③粗砂粒多量に含む	側縁部面取り。外面布目。	
83	須恵器 埴	Dd-11	口~底 写	口(14.5)	①灰白②還元焰 ③砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り。高台部剥落?	
84	須恵器 蓋	東低地	口縁部 破片	口(12.0)	①灰白②還元焰 ③細砂粒僅かに含む	口縁部内凹。強いナデにより断面三角形。頂 部回転ヘラ削り。	
85	土師器 小型埴	Ao-19	口縁部 写	口(9.6) 高(3.3)	①橙赤酸化焰 ③砂粒含む	縦軸整形。回転糸切り後、高台部貼付。高台部 削離。	土師質
86	土師器 小型埴	Aq-20	体~底 写	高(5.6)	①橙赤酸化焰 ③砂・粘土粒含む	縦軸整形。回転糸切り未調整。	土師質
87	須恵器 埴	At-24 As-24	口縁部 写欠	口(15.2) 高4.3 底10.6	①灰白②還元焰 ③粗砂粒含む	縦軸整形。右回転ヘラ調整。底部肥厚。	
88	土師器 小型埴	Ao-20	口~底 写	口(10.5) 高 3.1 底(5.5)	①黄褐色酸化焰 ③砂・粘土粒含む	縦軸整形。回転糸切り?高台部剥落。	土師質 やや軟質
89	土師器 埴	Ao-19	口縁部 写	口(10.9)	①橙赤酸化焰 ③砂粒含む	口縁部横ナデ。体部磨耗し、調整不明。	
90	土師器 埴	東低地	口~底 破片	口(16.7)	①ぶい黄褐色②酸化焰 ③細砂粒含む	口縁部横ナデ。体部僅かに未調整部分あり。底 部ヘラ削り。内面丁準なナデ。	

第2節 検出された遺構・遺物

91	土師器 鉢	Ar-22	口～底 片	口(18.2)	①明赤褐色酸化焙 ②砂粒含む	丸底状を呈し、口縁部縦なつくりで凸凹みられる。外面ナデ。内面ヘラナデ。	
92	須恵器 須恵器 3トレンチ	西台地	口～胴 破片	口(16.2)	①橙褐色酸化焙 ②砂粒含む	縦軸整形。胴部縦長。胴部貼付、板状を呈する。	
93	須恵器 須恵器	Ao-20	口縁部 破片	口一高一 底一	①灰白②還元焙 ③白色粒・砂粒含む	縦軸整形。口縁端部折り返し。	
94	須恵器 短頸壺	At-24	口縁部 破片	口(5.0)	①暗伏②還元焙 ②砂粒含む	縦軸整形。口唇部外反。端部強い回転ナデ。	
95	須恵器 長頸壺	Aq-20	胴～底 片	径9.0	①灰白②還元焙 ②砂粒含む	縦軸整形。胴下部回転ヘラ削り。回転ヘラナデ後、高台部貼付。接地面面取り。	
96	須恵器 長頸壺	Cv-8	胴部片	口一高一 底一	①灰白②還元焙 ②砂粒含む	縦軸整形。回転ナデ。	2号集石 5号注履合
97	須恵器	東低地	胴～胴 破片	口一高一 底一	①灰②還元焙 ③白色粒・砂粒含む	縦軸整形。胴部回転ナデ。	
98	須恵器 長頸壺?	Ag-20	胴～胴 片	口一高一 底一	①灰②還元焙 ②砂粒細かに含む	胴部回転ナデ。胴部外面タタキ、カキ目。内面当具痕見られる。	
99	須恵器 須恵器	As-24	胴～胴 片	口一高一 底一	①灰②還元焙 ③黒色・白色砂粒含む	胴上半回転ナデ、下半タタキ痕。内面回転ナデ。	
100	須恵器 須恵器 南トレンチ	F区	胴～胴 破片	口一高一 底一	①灰白②還元焙 ②白色砂粒含む	胴部から口縁部にかけ回転ナデ。内面当具痕あり。	
101	須恵器 長頸壺	As-22	胴～底 片	径(11.0)	①灰白②還元焙 ③精選	縦軸整形。胴下部回転ヘラ削り。高台部貼付。	
102	灰陶器	1トレンチ	胴～底 破片	径(15.8)	①灰白②良好 ③精選、堅硬	縦軸整形。高台部貼付。底面回転ヘラ調整。	
103	須恵器	Ap-20	胴～底 片	口一高一 底一	①灰②還元焙 ③白色粗砂粒含む	胴下部左回転ヘラ調整。底部高台部削落。底部左回転ヘラ調整。	
104	須恵器 長頸壺	Ap-20	胴～底 片	径(14.0)	①灰②還元焙 ③黒色・白色砂粒含む	外面全体に自然釉付着。下部端及び底面右回転ヘラ調整。	
105	土師器 須恵器	Da-13	口～胴 破片	口(23.0)	①明赤褐色酸化焙 ②砂粒含む	口縁部短く外反、胴部にかけて横ナデ。胴上半、横方向ヘラ削り。内面横方向刷毛目。	
106	土師器 須恵器	東低地	口～胴 破片	口(24.6)	①橙褐色酸化焙 ②細砂粒含む	口縁部縦やかに外反。胴部にかけて横ナデ。胴部直下横方向ヘラ削り。	
107	土師器 須恵器	東低地	胴～底 片	径4.2	①橙褐色酸化焙 ②細砂粒含む	底面ヘラ削り。径小さく不安定。胴下部、斜方向ヘラ削り。内面ヘラナデ。	
108	古式土師 白付塗	An-18	口縁部 破片	口一高一 底一	①にぶい黄褐色②普通 ③細砂粒含む	S字状口縁片、胴部縦方向刷毛目。	

根岸遺跡住居跡一覧表

住居 番号	住居 位置	主軸方位	規模 (m・㎡)				住居形状	貯蔵穴 穴数	柱穴 有無	重複	住居始 時期	遺 構	備 考
1号	Dh-11	—	3.90	3.70	0.43	9.0	円形	無し	1溝・8土釘	縄文前期	踏破C式		
2号	Dg-15	N-140°-E	4.80	—	0.14	(5.2)	—	北東向き	無し	4溝(赤)	10C	西側削り受け	
3号	Cc-6	—	3.84	3.09	0.19	7.8	円形	無し	12本(1～3溝(新))	縄文前期	踏破C式		
4号	Dw-11	N-18°-W	4.20	3.70	0.31	12.4	横長長方形	無し	11本(10土釘する)	縄文前期			
5号	Cy-9	N-28°-W	4.40	3.55	0.25	9.5	長方形	無し	赤塗	13本(1～3溝(新))	中2号	1×2溝の縦立柱建物跡含む	
6号	Ag-14	N-137°-E	3.20	3.00	0.10	17.9	縦長長方形	内側壁	無し	無し	8C	西壁下床土に遺物出土(貯蔵穴e)	
7号	Am-15	N-30°-W	4.68	3.12	0.54	12.4	横長長方形	無し	無し	8C	床下土塚多数出土		
8号	Ap-16	N-59°-E	3.66	3.20	0.45	10.5	台形	無し	無し	12・13(古)	8C	13号と西壁隣り	
9号	Ap-14	N-110°-E	4.60	3.00	0.12	12.7	縦長長方形	無し	3本(10・11(古))	10C	胴部から住居中央にかけて硬化面あり		
10号	Ap-13	N-54°-E	3.88	3.00	0.34	66.0	円形	無し	2(古)	9C	各溝床下円形土坑		
11号	Ap-15	N-55°-E	4.86	3.60	0.49	12.0	縦長長方形	無し	無し	9(古)	8C+9C		
12号	Ap-16	N-59°-E	4.46	3.80	0.45	14.7	縦長長方形	無し	無し	8本(8・13(古))	8C		
13号	Ap-16	N-58°-E	5.40	(2.60)	0.20	69.0	縦長長方形	無し	無し	9・12(新)	8C		
14号	Ap-15	N-110°-E	2.60	2.20	0.20	5.0	ほぼ正円形	無し	無し	無し	8C	大塚9住居跡と履合	

根岸遺跡炉及び竈一覧表

住居 番号	炉・竈位置 (標準部位置)	標準部計測値			形状	構造部			備 考	
		奥行(m)	幅(m)	高さ(m)		基土	竈立ち上り形状	炉壁		
1号	中央西より(地味砂)	0.60	0.40	—	隅丸長方形	—	—	無し		
2号	東壁中央(壁外)	0.70	0.55	0.30	U字	—	—	57°	無し	壁面の焼けは強い
3号	未確認	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4号	未確認	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5号	未確認	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6号	東側西寄り(壁内)	1.10	0.80	0.20	U字	—	—	30°	有り	地山一帯削り残し
7号	北壁西寄り(壁内)	0.75	0.55	0.25	U字	0.21	0.21	40°	有り	地山と褐色土層土
8号	北壁西寄り(壁内)	0.40	0.45	0.35	U字	0.61	0.30	26°	有り	地山削り残し
9号	北壁西寄り(壁内)	0.40	0.45	0.35	U字	0.61	0.30	26°	有り	地山削り残し
10号	東壁中央西寄り(壁上)	0.57	0.50	0.15	U字	—	—	32°	無し	灰口焼物に立石使用
11号	東壁中央西寄り(壁内)	0.65	0.50	0.30	U字	—	—	67°	有り	地山と褐色土層土
12号	東壁西寄り(壁上)	0.40	0.45	0.40	U字	0.65	0.30	26°	有り	地山削り残し
13号	東壁(壁外)	0.38	(0.50)	0.15	U字	—	—	35°	有り	地山削り残し
14号	東壁(壁外)	0.26	0.21	0.06	U字	—	—	不確	—	削り受け、僅かに地山面を露出

第5章 まとめ

第1節 白石根岸遺跡1号住居跡
出土土器の位置付け

— 鍋川右岸下流域の様相から —

はじめに

本遺跡の1号住居跡からは、諸磯c式土器が出土している。この他にグリッド出土遺物にも諸磯c式が見られ、鍋川右岸における上位段丘上に立地する縄文時代前期遺跡の一つとして、本遺跡が位置付けられる要素となっている。

鍋川右岸の上位段丘上の前期後半の遺跡は、第1章第2節で概略を述べたが、吉井町黒熊第5遺跡や入野遺跡、藤岡市滝下遺跡ではc式期の住居跡が検出されており、本遺跡との関連が注目されよう。本節では上記3遺跡出土土器を挙げ、本遺跡と併せて、鍋川右岸の該期様相の一端を示しておきたい。

また後段では、1号住居出土土器1の体部下半が外反する屈曲底部の位置付けも考えて見たい。

1. 周辺の諸磯c式土器概観

白石根岸遺跡：1号住で諸磯c式土器を主体に出土した。1のように地文の縄文を施し古相を残す個体や、屈曲する体部形態を呈し、地文に雑な平行沈線の施文が見られる4などに、c式の特徴でもある貼付文を施す一群が見られる。また、5は体部器形の歪みから不明確な器形だが口唇部の隆起刺突文は、7の貼付文を付す口縁部破片にも見られ、興津式の要素を一部に取り入れた構成ともいえよう。

その他に、3・9などの連続刺突文のありかたは従来のc式には見られず、あるいは、10のようなc式終末期～十三菩提式期の要素かもしれない。

このように、本住居跡出土土器は1・4の貼付文の一群、隆起刺突文を施す5・7、十三菩提式ともいえる10などが出土しているが、個体の在り方から、1・4の諸磯c式期前半の所産といえよう。

黒熊第5遺跡：白石根岸遺跡と同様に鍋川右岸の上位段丘に位置する。両遺跡とも標高差も少なく、密接な関連が想起されよう。住居跡は3軒検出されており、3号住居出土土器が良好な一括資料として周知されている。特に、14のような興津式との共伴例から、交差編年の基準ともなる土器群である。c式の安定した様相を見せる一群であるが、12のように、内彎する口唇部に貼付文を付す手法が残存している要素は重視しておかなければならないだろう。13もb式に見られた靴先状の大突起からの系譜であろうか。諸磯c式古段階の一群ともいわれている。

入野遺跡：土合川を隔てているが、同様に上位段丘に位置する遺跡である。26号住居跡よりc式が出土している。2基の炉体土器(25・26)を持ち、c式～十三菩提式期の土器が出土している。c式は比較的新しい様相を呈し、c式後半段階の土器群といえよう。貼付文も頻繁に付される傾向が見られ、また25には刺突浮線文が施されている。その他の破片資料には横位蛇行浮線文を付した大木5式系も見られ、この段階の混在の様相を示している。

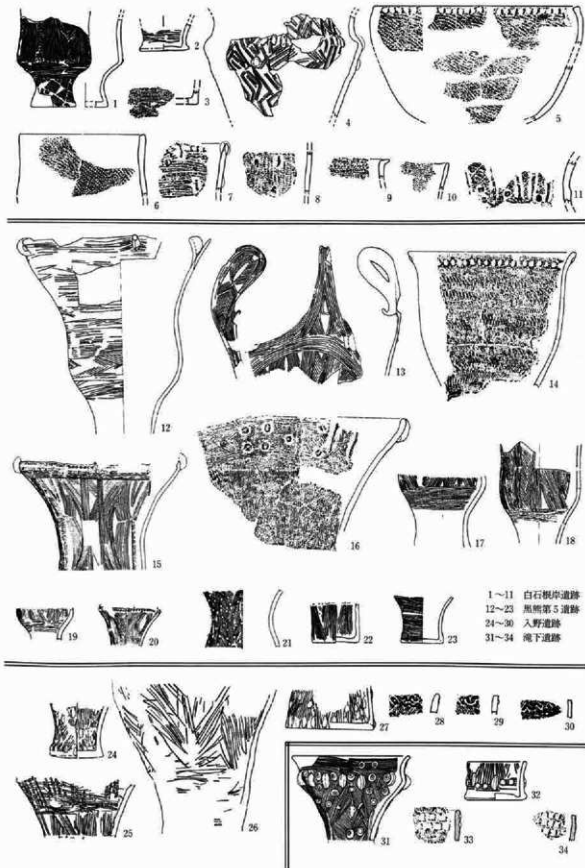
滝下遺跡：c式の住居跡は1軒が確認されている。藤岡市の鮎川右岸河岸段丘上に位置し、低位地形においての該期居住の一端を示した評価を持つ。

検出されたJ-1号住では、31のような安定したc式が見られる。その他も貼付文や集合沈線を施した資料が主体を占め、c式盛期の所産といえよう。破片資料だが隆起刺突文を横位に施した2点の土器片が見られ、東関東系の土器群の混在も見られる。

以上のように、鍋川下流域右岸の諸磯c式土器を概観したが、濃密な分布ではないものの、他地域に比して出土量は安定する傾向を見せる。

出土土器は黒熊第5遺跡ではb式の系譜を引く一群と興津式の共伴例、滝下遺跡ではc式の安定した様相、入野遺跡は十三菩提式への過渡期とも言える様相で、諸磯c式の変遷過程の側面が窺えよう。

第1節 白石根岸遺跡1号住出土土器の位置付け



1図 周辺遺跡の該期土器群

第5章 まとめ

その中で、本遺跡1号住出土土器は黒熊第5遺跡3号住と同時期ないしは後続する段階と捉えられ、両遺跡の親近性は、極めて近いものと考えられる。

2. 屈曲底部の諸例

本遺跡1号住1は体部下半に屈曲を持ち、外反する底部形態を呈する(以下屈曲底部)。前期終末より中期初頭段階の底部は端部に張り出しを持つものや、外反気味に立ち上がる形態もあり多様性を含む。この段階の底部形態の変化や消長、あるいは文様変化との関連性も課題となっており、該期深鉢の底部の様相も重要な分析項目である。

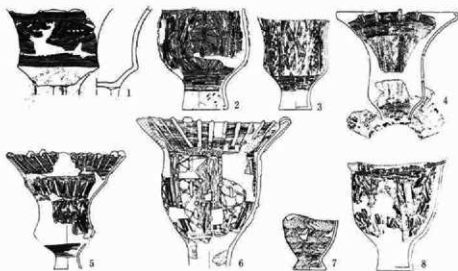
屈曲底部を持つ深鉢として、本資料以外に黒熊第5遺跡の例が挙げられるが(1図11・16・17)、県内ではこの他に、前橋市荒砥二之堰(2図1)、吉岡町七日市遺跡(2)、箕野町中善地宮地遺跡(3・4)、前橋市芳賀北曲輪遺跡(5)、上野村新羽今井平遺跡(8)、赤城村勝保沢中ノ山(6・7)で良好な例が出土している。いずれも、体部下半に緩やかな膨らみあるいは屈曲を持たせ、底部との器形上の分化を果たしている。

屈曲底部ではないが、小型台形土器1は、脚台あるいは透孔を持つとされている。屈曲部上の体部文様は横位を基本としており、b式終末段階に位置

付けられる要素である。2~4は本遺跡1住1と類似した文様構成を呈す。c式の前半段階であろう。体部は縦位区画文様構成で、4のように長胴化した器形も現れるようだ。長胴化した器形は5・6にも共通し、c式として文様が安定した段階に、長胴化器形を呈す一群が屈曲底部を備える傾向がある。7・8の文様構成は変わっている。7は横位矢羽状構成であり、c式の基本である縦位区画文様構成からは外れた構成である。8は口縁部文様帯の省略か。また、体部下半の横位集合沈線も無く、全体に区分線の不明瞭な文様構成である。

このように、屈曲底部は荒砥二之堰例のb式段階から類似した器形は見られ、黒熊第5のc式古段階では既に定着した底部形態といえよう。c式の変遷過程においても、体部器形を際立たせる底部形態として長胴化を促進した。これは体部文様帯の拡大にも原因し、さらに縦位区画文様が発達したのであろう。

屈曲底部を付した土器群にほぼ共通する体部縦位区画文様構成はc式の普遍的な文様構成であり、屈曲底部は縦位区画文様構成とともにc式の特徴として理解できる。次に、この屈曲底部と縦位区画文様構成の関連を考えてみたい。



1. 荒砥二之堰遺跡 (1985 群埋文) 2. 七日市遺跡 (1986 吉岡町教委) 3・4. 中善地宮地遺跡 (1988 群馬県史料編1) 5. 芳賀北曲輪遺跡 (1990 前橋市埋蔵文化財発掘調査報告) 6・7. 勝保沢中ノ山遺跡 (1988 群埋文) 8. 新羽今井平遺跡 (1988 群馬県史料編1)

2図 県内屈曲底部諸例

3. 体部縦位区画文構成について

諸磯b式の体部文様は横位が基本であり、浮線文や平行沈線で多段に分帯された構成である。b式後半の横位平行沈線を施す土器群を観視すると、底部直上にも横位施文が安定して見受けられる。例えば2図1に注目すると、このような特殊な器形においても、屈曲部直上の横位集合沈線による施文方法は、底部直上施文の系譜と考えたい。この体部下半～底部直上における横位集合沈線による体部文様を区分する手法は、2～7に見られるようにc式へ受け継がれる要素のひとつであることが理解できよう。

また、この段階には体部器形に屈曲や緩やかな彎曲を持たせ、器形全体に変化を持たせる一群も見られる。この体部の屈曲が下降し、屈曲底部へと変化する要素も考慮しておかねばならないだろう。

さらにb式終末段階には、既に対弧文が発生し、体部縦位区画文構成が意識される。伊勢崎市天神山遺跡出土土器には多段の対弧文が配されており、b式からc式への変遷にあたり、体部対弧文による縦位構成に至る過程を示している。¹⁾

c式段階では、横位集合沈線が体部下半に降下し、体部文様は幅広くなり縦位集合沈線や対弧文で縦位区画し、区画間を矢羽や格子目で充塞する構成を取る。この縦位区画文は、単位文としても成り立ち、数単位の区画文配列も重要な文様構成となる。

屈曲底部を付す深鉢の多くは、縦位区画文構成を保証した一群ともいえるのである。²⁾

すなわち、屈曲底部を付す一群は、横位集合沈線を底部直上施文として設けることが多く、これは体部器形の屈曲部下降にも対応する手段として採用されたものと考えられる。体部文様が縦位区画化する際に、横位集合沈線が体部下端にまで降下し、さらに体部文様を拡大化したのである。

諸磯c式には確実に体部文様の拡大化意識があり、横位集合沈線と屈曲部の降下、さらに体部文様の縦位区画が受容されるものとする。その際に、b式段階(1)では屈曲上に施文されていた横位集合沈線が、2・3に見られるように屈曲(彎曲)下

に施文されるようになり、またさらに、体部文様を拡大する傾向も見られるのである。ここに至り、体部文様の縦位区画化と屈曲底部の付加によって、器形全体の長調化も果たされるのである。

以上、外反する屈曲底部は諸磯c式の体部文様帯縦位区画構成をより確立した重要な役割を担った底部形態ともいえよう。屈曲底部は十三菩提式期にも一部継承されるのだが、c式段階で定着した屈曲底部のその後の変化は、機会をあらためて分析したい。

まとめ

以上のように、白石根岸遺跡1号住出土土器を取り巻く該期土器群の概観を提示したが、当地域の該期資料はようやく報告される段階であり、資料集成は著に着的ばかりである。前段で述べたように、該期土器の推移は雑駁な変化は捉えられるものの、文様要素の変容を提示できる段階ではない。加えて、諸磯c式土器群は近年の研究で、数段階の変遷が捉えられており、その変遷過程における各類型間の交渉や変化が注目されている。³⁾

しかし改めて、今回は編年や変遷観を提示せず、1号住1に見られた外反する屈曲底部の諸例を挙げ、この底部器形と体部縦位区画文の関係の深さを予測した。体部屈曲部の下降によって下半の屈曲・彎曲化が果たされ、体部文様の拡大が可能になり、横位集合沈線も同時に屈曲部とその下に設けられるようになる。この条件によって、体部縦位区画文の発達が促されたものと考えた。しかし、上記の動態は細かな土器の時間軸に沿った様相ではなく、詳細な編年案の提示を待って再検証するべきだろう。当該地域の該期土器研究の進展に伴って、再度この問題については考えてみたい。

(註)

1) 『曹上木山遺跡～波志江天神山遺跡』1992 群像文

2) 縦位区画文構成の一群とは別に、沈線懸垂構成を取る一群も存在する。懸垂構成の一群は、比較的体部そのものに外反する傾向が見られる。また体部外反器形の土器にも、底部直上施文する手法があり、一概に屈曲底部の様相だけで該期土器群は解決できない。

3) 細田 勝「諸磯c式土器研究への視点」『埼玉考古』29号1992 埼玉考古学会

第2節 白石根岸遺跡の遺構・遺物について（8世紀以降）

本遺跡で検出された8世紀以降の遺構・遺物について、右図及び後出の図を参考に以下のような事柄について検討を加えてみたい。

1. 遺構について

(1) 主軸方位

竈を検出した住居を対象。三方向に分けられる。

N-110°~120°-S 6・9・14号住居

N-50°~60°-E 8・11・12・13号住居

N-30°-W 7号住居

(2) 住居形状

主軸方位に対して長辺方向により住居形状を、縦長長方形、横長長方形、正方形、台形に分類。

縦長(主軸方向) 8号・9号・12号・13号住居

横長(直交) 6号・7号・11号住居

方形・台形 14号住居(6号・10号住居)

(3) 重複住居 2カ所で確認(矢印は新→旧)

10号住居→9号住居→11号住居

8号住居→12号住居→13号住居

(4) 竈構築状況

燃焼部位置により、壁内、壁中、壁外に分類。

壁内(住居内) 6・7・13号住居

壁中(壁延長上) 8・11号住居

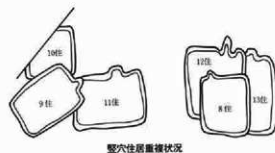
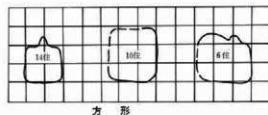
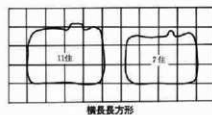
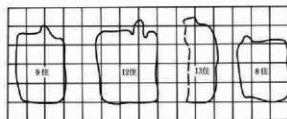
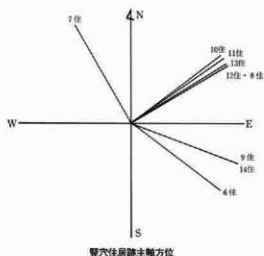
壁外(住居外) 9・12・14号住居

以上のように、主軸方位、住居形状、重複関係、竈構築状況等の分類を行った。その結果以下のような事柄が推定できるが、最終的には遺物を検討したうえで判断していく必要がある。

1. 8号・12・13号住居は軸、形状、重複から建て替えの可能性が考えられる。
2. 8号(12号・13号)・11号住居は主軸方位がほぼ一致し、また7号住居はこれらと直交する位置関係にあり、住居形状も類似することなどから、同時存在の可能性が考えられる。

2. 遺物について

各住居出土遺物は、発掘調査段階での記録類(図



面、台帳等)を重視し、住居内出土遺物としての実測可能個体を選び出し、出土位置が分かるように掲載した。しかし、そのため一括遺物として同時性の疑わしい遺物も含まれてしまった。

ここでは、単独検出住居及び重複住居出土遺物を後出の図のように一括し、個別器種について製作技法及び形態的特徴による分類を行い、各住居出土遺物について検討を加えて見たい。

器種分類

土師器環 大半が口縁部横ナデ、口縁部下部未調整、体部へ底部手持ちへラ削り整形技法がなされ、分類には若干の器形の違いを用いた。

A1 底部へ口縁部にかけて緩やかに湾曲(12住2)

A2 器高浅く、底部やや平底状を呈し、口縁部直線的に立ち上がる(10住2)

B 弱い稜を体部に持ち、壺状の環(13住6)

須恵器環 底部切り離しと器形の違いにより分類。

A1 回転へラ切離後、未調整。(14住1)

A2 回転へラ切離後、回転へラ調整(12住10)

B1 回転糸きり未調整、直線的に開く(11住7)

B2 回転糸きり未調整、体部内湾気味(2住4)

須恵器壺 整形技法は轆轤整形、底部回転糸きり後高台部貼付。分類には体部の特徴により分類。

A1 体部僅かに内湾し、やや大ぶり(6住3)

A2 直線的に開き、底径が小さい(2住5)

土師器壺 大半が口縁部へ頸部横ナデ、胴上端部横位、胴上半部へ下半部斜縦位へラ削りがなされる。分類には器形の特徴により分けた。

A1 「く」の字状口縁。胴部やや直線的(7住2)

A2 口縁部へ頸部横ナデ、胴上半部。(12住15)

B 球形状の胴部(13住7)

以上のような器種分類を行い、これらを参考に各住居出土遺物を概観し、重複関係を中心に各住居出土遺物を比較検討したい。

重複の中で13号住居が最も古く位置付けられる。出土遺物には土師器環A1、B、土師器壺Bがある。次に12号住居が古く、出土遺物は土師器環A1、須恵

器環A2、土師器壺A2がある。類似遺物を出土する住居に6号・14号住居がある。14号住居では土師器環A1が欠落する。6号・14号両住居とも須恵器環A1を持つが、底部調整や口径：底径：高さの比率が若干異なる。また、11号住居では土師器環A1、土師器壺A2が出土し、№7の須恵器環の底部調整技法の違いから僅かに時期差が考えられる。3軒重複中で最も新しい8号住居は、土師器環A1・A2、土師器壺A2が出土し、12号住居とはあまり形態差は見られない。羽釜については別遺構が絡む可能性が考えられ、№4須恵器環は12号住居との住居間接合が見られ12号住居所属の可能性が考えられる。D区単独住居である2号住居及び10・11号住居を掘り込む9号住居については、両住居とも須恵器環・壺・羽釜を主体とする器種構成となり、他の住居とは隔絶した時期にあり、10世紀前半代と考えられる。

遺物の時期については、土師器環の丸底から平底への変化や土師器壺の口縁部へ頸部横ナデが施され、コの字口縁への過渡的様相及び須恵器環の回転へラ調整から糸きり未調整への変化等、8世紀から9世紀の特徴を備える。

3. まとめ

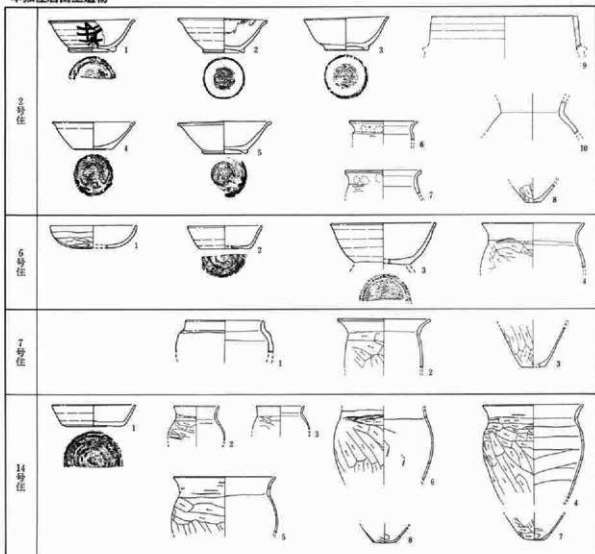
根岸遺跡A区の家落は、台地縁辺部に8世紀中頃より整穴住居が作られ、谷頭には湧水利用の水田耕作が行われていた。また、住居は建て替えなど行われながら9世紀後半に一時的に集落は断絶し、10世紀代に新たに集落が営まれたと考えられる。しかし、路線内の制約から調査地は限定され、また路線内においても擾乱を受け遺跡の広がり等不明な点が多い。遺構外出土遺物中には古墳時代前期の土器が含まれるなど更に古い段階から継続された集落の可能性も考えられる。今後、周辺調査・分析を含め考えて行きたい。

《参考文献》

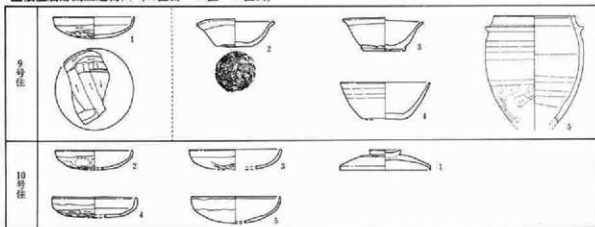
- 【上野原分霊寺・尼寺中間地域】群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
 『鳥羽遺跡』I・J・K区 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
 『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
 【下東西遺跡】群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
 坂口 一・三浦京子『群馬県史研究』24
 【戸神原遺跡】群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990

第5章 まとめ

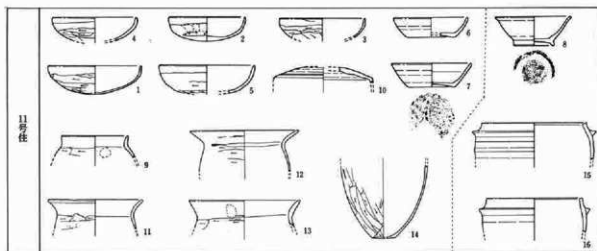
単独住居出土遺物



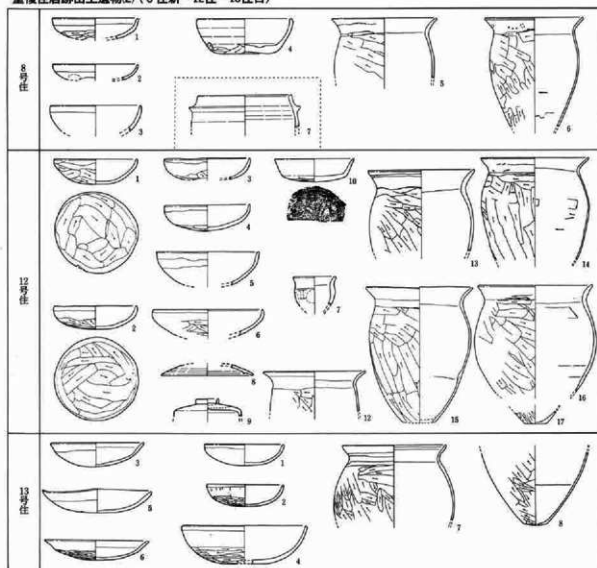
重複住居跡出土遺物(1) (10住古←9住→11住古)



第2節 白石根岸遺跡の遺構・遺物について



重複住居跡出土遺物(2) (8住新→12住→13住古)



発掘調査報告書抄録

フリガナ	タイラヒラノイセキ シロイシネギシイセキ
書名	多比良平野遺跡 白石根岸遺跡
副書名	関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第20集
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第155集
編著者名	斎藤利昭
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦 1994年2月26日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タイラヒラ ノイセキ 多比良平野	タノグンヨシイマチオオ ザタイラ 多野郡吉井町大字多比良	10363	10005 00287	36°14'25"	139°0'40"	19890501— 19890627	2,600	道路建設
シロイシネ ギシ 白石根岸	フジオカシシロイシアザネ ギシ 藤岡市白石字根岸	10209	10005 00285	36°14'30"	139°01'50"	19890419— 19890614	17,240	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
多比良平野	住居 土坑 溝	平安時代 時期不明 時期不明	竪穴住居跡1軒 土坑4基 溝跡3条	土師器、須恵器、灰釉陶器	
白石根岸	住居 土坑 溝 集石遺構 生産址	縄文時代 奈良・平安時代 時期不明 縄文時代 平安時代 時期不明 平安時代 時期不明 平安時代	竪穴住居跡3軒 竪穴住居跡10軒 竪穴住居跡1軒 土坑4基 土坑1基 土坑 溝1条 溝4条 集石遺構3カ所 水田址	縄文時代前期土器 土師器、須恵器 縄文時代の土器 縄文時代の土器、石器 墨書土器	浅間B軽石下 浅間B軽石下

写 真 图 版





1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡土層



3. 1号住居跡壘



4. 1号住居跡出土遺物



5. 1号住居跡出土遺物



1. 1・3号溝全景



2. 1号溝土層



3. 1・3号溝土層

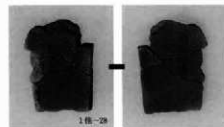
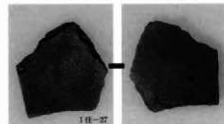
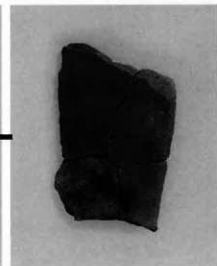
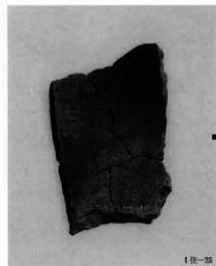
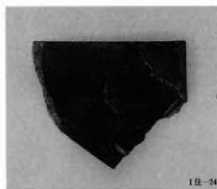


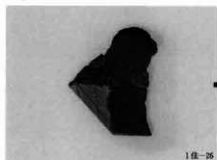
4. 2号溝4号土坑全景



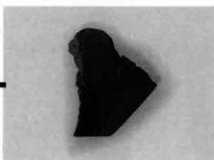
5. 2号溝土層







1住-25



1住-32



1住-30



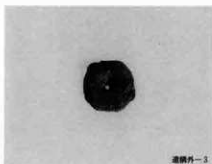
1住-31



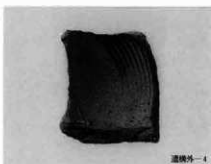
1号住跡出土遺物



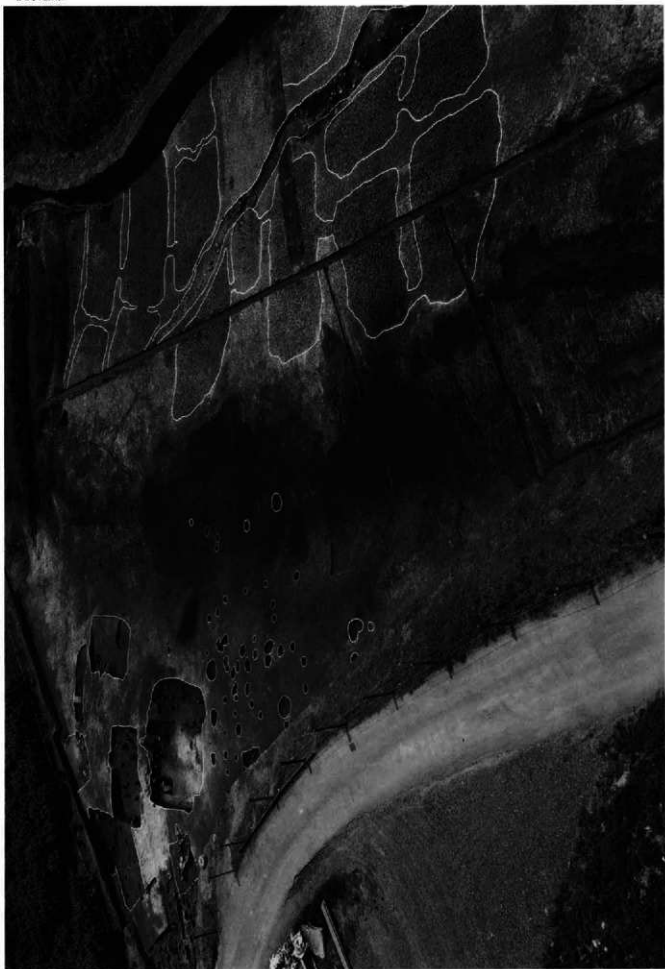
遺物外-1



遺物外-3



遺物外-4





1. 根岸遺跡A区(東低地)全景



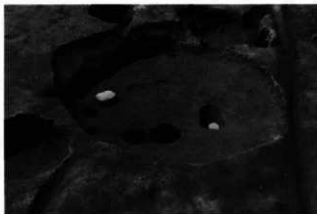
2. 根岸遺跡D区(西台地)全景



1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡土層



3. 1号住居跡掘り方



4. 2号住居跡全景



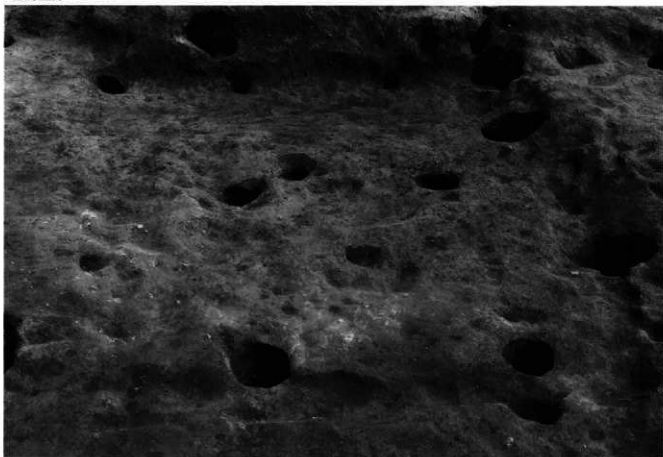
5. 2号住居跡出土遺物



1. 3号住居跡全景



2. 4号住居跡全景



1. 5号住居跡全景



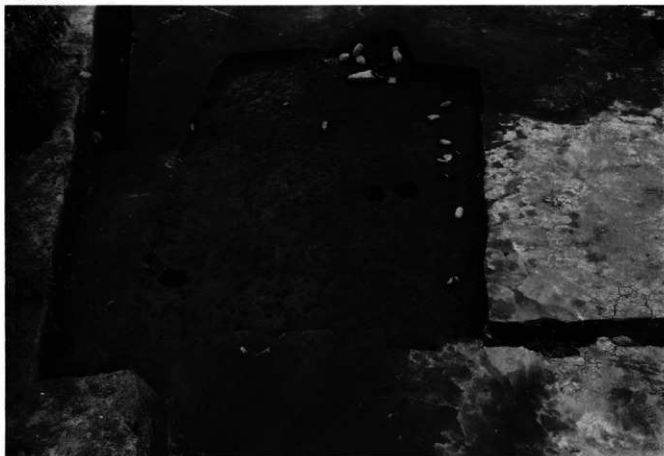
2. 6号住居跡全景



1. 7号住居跡全景



2. 8号住居跡全景



1. 9号住居跡全景



2. 10号住居跡全景



1. 11号住居跡全景



2. 8・12・13号住居跡掘り方全景

根岸遺跡



1. 12号住居跡竈



2. 12号住居跡竈内出土遺物



3. 13号住居跡竈



4. 13号住居跡竈周辺出土遺物



5. 14号住居跡全景



1. 1号土坑全景



2. 2号土坑全景



3. 2号土坑出土遺物



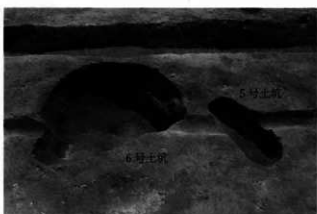
4. 2号土坑出土遺物



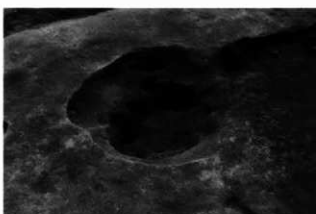
5. 3号土坑全景



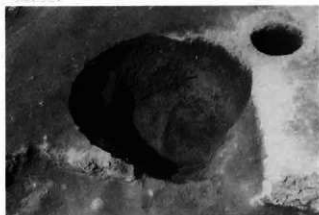
6. 4号土坑全景



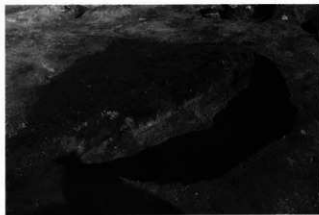
7. 5・6号土坑全景



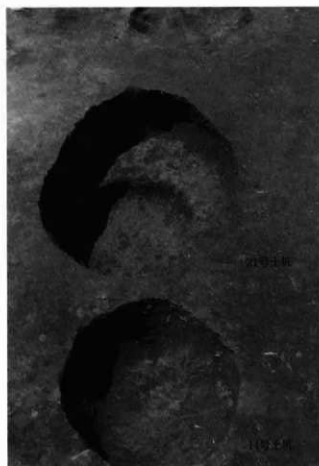
8. 10号土坑全景



1. 11号土坑全景



2. 12号土坑全景



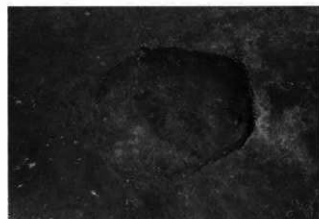
3. 14・21号土坑全景



4. 17号土坑全景



5. 18号土坑全景



6. 20号土坑全景



7. 21号土坑全景



1. 22・23号土坑全景



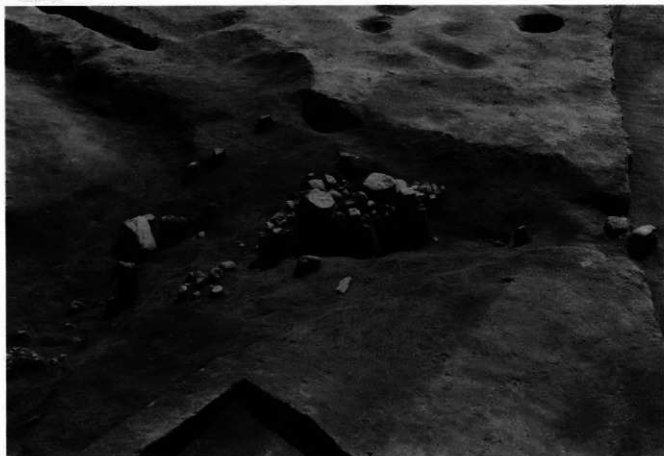
2. 24号土坑全景



3. 1号集石遺構



4. 2号集石遺構



1. 4号溝内3号築石遺構全景



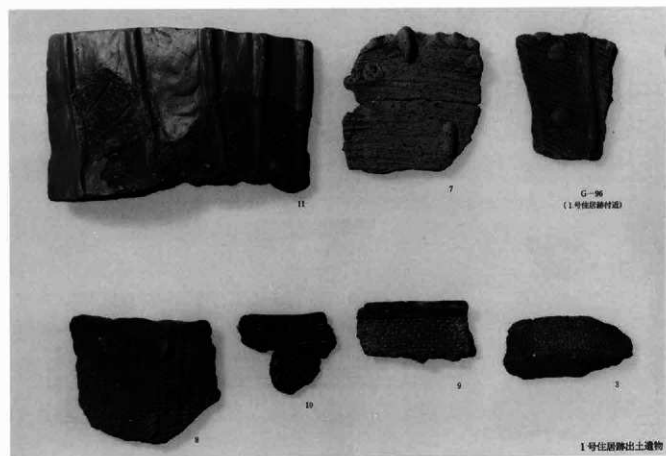
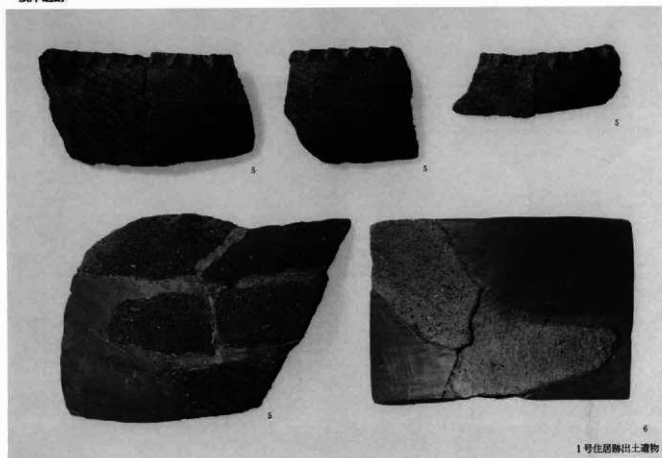
2. 1・2・3号溝全景



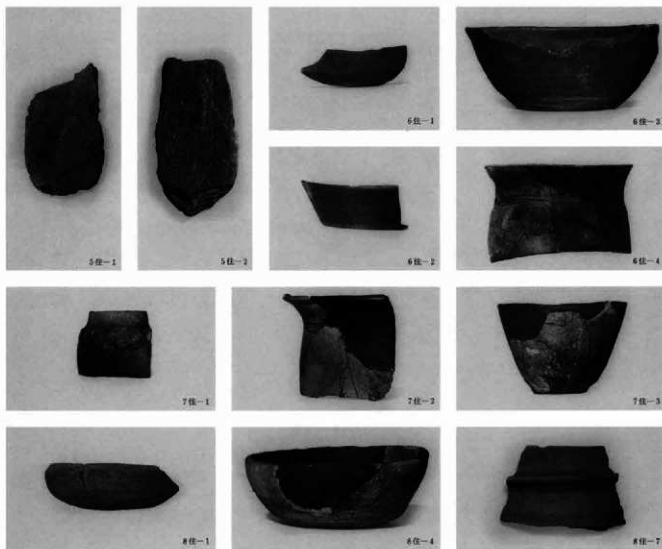
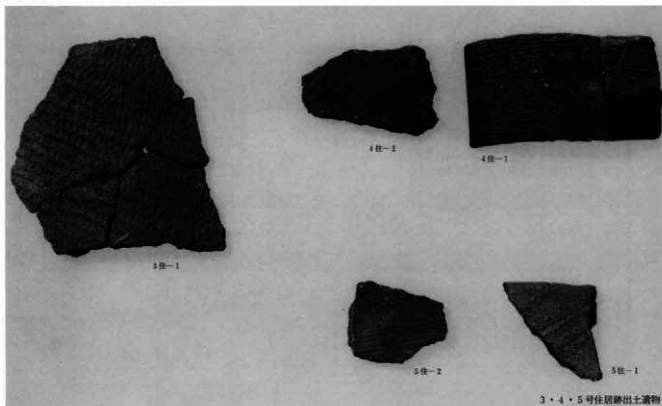
1. 浅間B軽石下水田跡近景

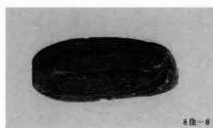
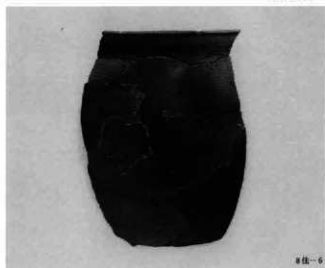
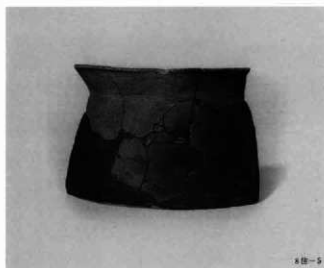


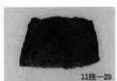
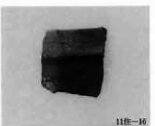
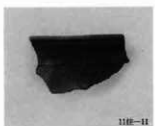
2. 浅間B軽石下水田跡内溝

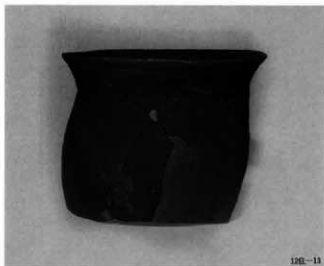


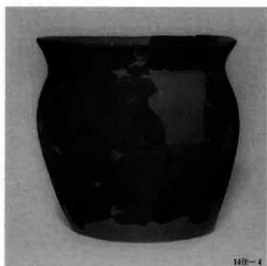
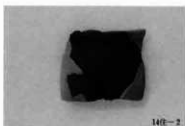
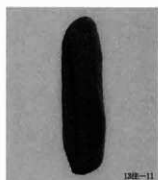
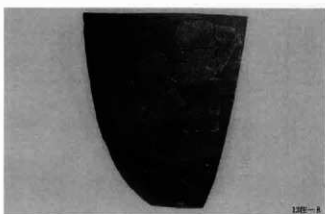


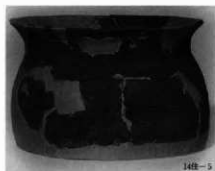












14E-5



14E-7



14E-8



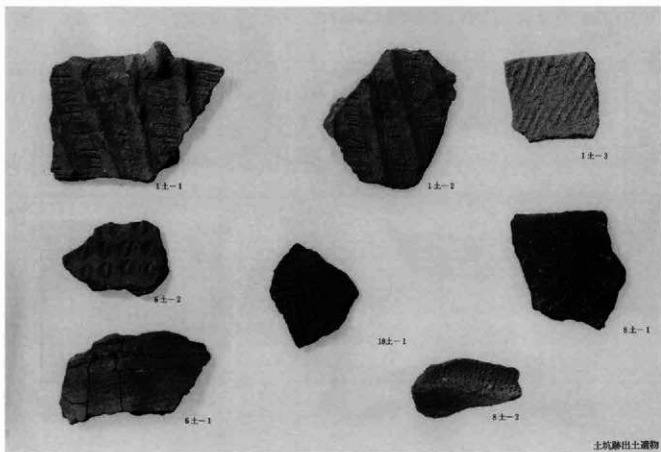
14E-10



14E-6



14E-9



1土-1

1土-2

1土-3

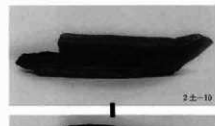
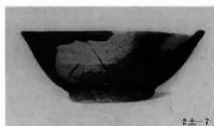
6土-2

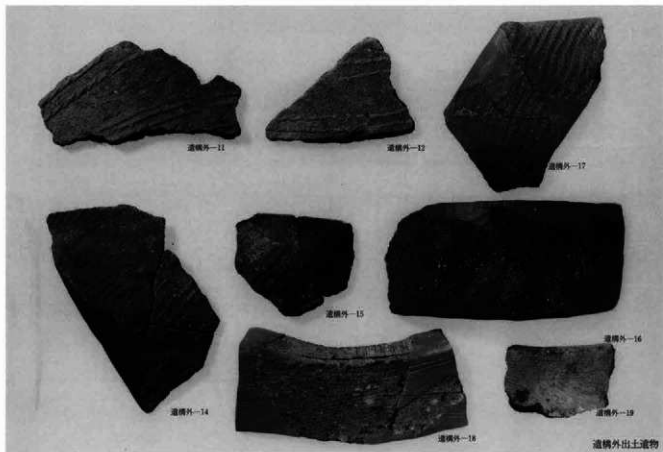
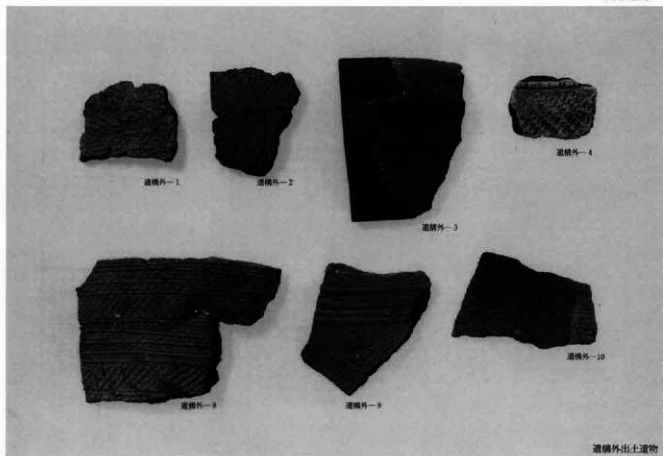
10土-1

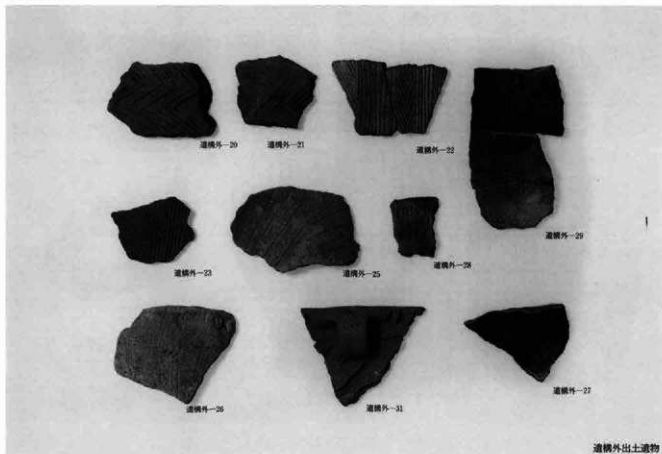
8土-1

6土-1

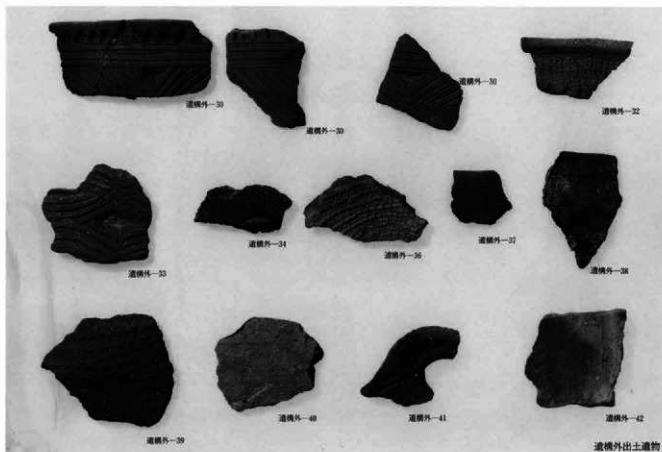
8土-2







遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外-6



遺構外-7



遺構外-13



遺構外-24



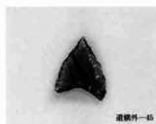
遺構外-5



遺構外-35



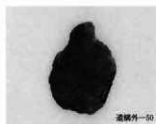
遺構外-45



遺構外-45



遺構外-49



遺構外-50



遺構外-54



遺構外-53



遺構外-52



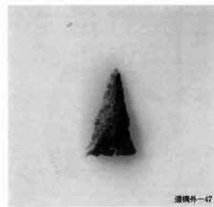
遺構外-55



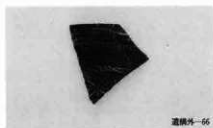
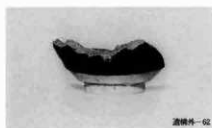
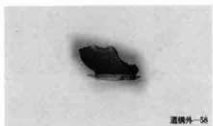
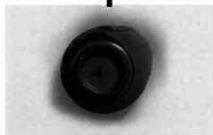
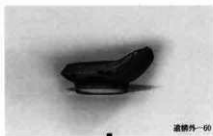
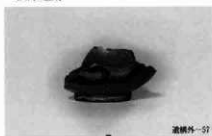
遺構外-51



遺構外-48



遺構外-47





遺構外-79



遺構外-82



遺構外-87



遺構外-85



遺構外-86



遺構外-87



遺構外-88



遺構外-89



遺構外-90



遺構外-91



遺構外-92



遺構外-93



遺構外-94



遺構外-95



遺構外-96



遺構外-98



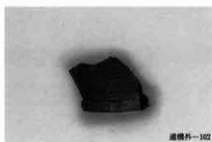
遺構外-99



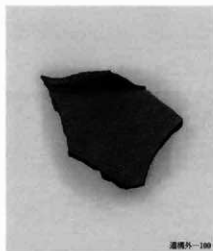
遺構外-97



遺構外-101



遺構外-102



遺構外-100



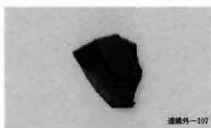
遺構外-103



遺構外-104



遺構外-105



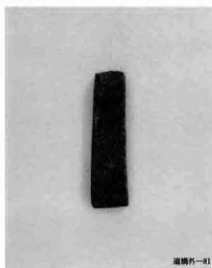
遺構外-107



遺構外-106



遺構外-108



遺構外-81

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第159集

多比良平野遺跡 白石根岸遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第20集

平成6年2月22日 印刷

平成6年2月28日 発行

編集/群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北機村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行/群馬県考古資料普及会
勢多郡北機村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷/朝日印刷工業株式会社